

平成三十年度 東京藝術大学音楽研究科 博士論文

地歌謡物の研究

平成二十八年入学
邦楽 箏曲生田流 2316905 村澤丈児

凡例

- 1 注は脚注形式とする。
- 2 括弧は、次のように使い分ける。
《 》 楽曲名。
『 』 書籍名。
- 3 楽器名「箏」、「箏」、「琴」などは「箏」と表記し、「三弦」、「三絃」などは「三味線」に統一する。ただし、引用や参考音源の項などは、典拠の文字使用のまま記載する。

目次	
序論	1
(一) 研究動機	1
(二) 研究目的	1
(三) 先行研究	1
(四) 本論文の構成	3
本論	
第一部 謡物の分析	
第一章 謡物の定義と研究対象・分類	5
第一節 謡物の定義	5
第二節 研究対象と分類	6
第二章 謡物各曲の概要と分析	10
(一) 分析にあたって	10
(二) 「ノリ型風」「平ノリ風」「中ノリ風」「大ノリ風」「特殊な型」について	11
(三) 詞章等の比較について	14
A 歌舞伎に用いられていたと思われる作品	15
A - 1 《古道成寺》	15
A - 2 《古松風》	19
A - 3 《善知鳥 ^{うと} 》	22
A - 4 《関寺小町》	27
A - 5 《新道成寺》	30
A - 6 《山姥》	33
A - 7 《邯鄲》	38
A - 8 《海女》	41
A - 9 《珠取り》	44
A - 10 《放下僧》	47
A - 11 《石橋》	52
A - 12 《貴船》	55
A - 13 《葵の上》	57
B 十八世紀に名古屋で作曲されたと思われる作品	60
B - 1 《八島》	60
B - 2 《富士太鼓》	63
B - 3 《虫の音》	67
B - 4 《鉄輪》	70
B - 5 《梓》	73
B - 6 《藤戸》	76
C その他	79
C - 1 《融》	79
C - 2 《神楽》	82
C - 3 《鳥追》	84
C - 4 《三津山》	87
C - 5 《西行桜》	92
C - 6 《新青柳》	94
C - 7 《翁》	96
C - 8 《嵯峨の春》	99
C - 9 《老松》	101
C - 10 《新娘道成寺》	104
C - 11 《新山姥》	107
C - 12 《尾上の松》	109
C - 13 《四季の雪》	111
C - 14 《梅が枝》	114
C - 15 《京松風》	118
C - 16 《鉢の木》	125
C - 17 《鶴亀》	128
C - 18 《高砂》	130
C - 19 《綱》	132
C - 20 《高砂》	136
C - 21 《狸々》	138
第三章 謡物の特徴の分析	140

第一節	詞章の構成・内容	140
(一)	詞章の構成	140
(二)	地歌独自の詞章の内容	144
第二節	曲の構成・音楽的特徴	146
(一)	調絃	146
(二)	曲の構成	146
(三)	器楽部分	146
(四)	調絃替え	149
(五)	「ノリ型風」の部分	149
(六)	旋律	152
第三節	謡物分析のまとめ	155
第二部	謡物の作曲背景と楽曲に与えた影響	
第一章	近世における能の状況と謡物の成立	160
第一節	近世における謡曲の流行	160
第二節	「謡物」の概念が成り立つまで	162
第二章	A作品について	163
第一節	A作品の作曲された時期	164
(一)	初出の文献	164
(二)	A作品の作曲者	165
第二節	十八世紀の上方歌舞伎の状況	168
第三節	A作品の特徴が生まれた要因と十八世紀の歌舞伎音楽実態からの考察	169
(一)	調絃	170
(二)	曲の構成	171
(三)	旋律①「同音合わせ撥の連続」	172
(四)	旋律②「同音スクイ撥の連続」	173
(五)	「ノリ型風」「大ノリ風」「中ノリ風」「平ノリ風」「特殊な型」の部分	173
第三章	B作品について	174
第一節	B作品の作曲された年代	174
第二節	名古屋開府から十八世紀の能と地歌の状況	174
(一)	十八世紀の名古屋における能の状況	175
(二)	十八世紀の名古屋における地歌の状況	176
(三)	十七～十八世紀の名古屋における歌舞伎の状況	177
第三節	B作品の特徴が生まれた要因	178
第四章	C作品について	
第一節	《神楽》《鳥追》について	180
第二節	C作品の作曲者の能への理解	179
第三節	A、B作品と共通する特徴をもった作品	179
結論		181
(一)	謡物の特徴とそれらが生まれた要因	181

(二) 本研究の意義	182
(三) 今後の課題	182
参考文献	184
参考楽譜	185
参考音源	189
あとがき	196

表一覧

表 1 「ノリ型風」の部分一覧（「平ノリ風」「中ノリ風」）	150
表 2 「ノリ型風」の部分一覧（「大ノリ風」「特殊な型」）	151
表 3 謡物分析表（A・B作品）	157
表 4 謡物分析表（C作品）	158

序論

(一) 研究動機

筆者は、『吉沢検校三味線作品の研究』¹を執筆する中で、幕末に名古屋で活躍した吉沢検校の作品の特徴を分析するため、吉沢検校以前に名古屋で作曲された作品についても調査をした。その結果、吉沢検校以前に名古屋で作曲されたと考えられている作品は、その全てが「謡物」とよばれる作品であることが分かった。

筆者は、能楽を愛好していた祖父の影響で、一家全員が謡曲を稽古している家庭環境に育った。その影響から、地歌・箏曲の演奏家である筆者の母は、主に故中井猛師から積極的に「謡物」を習得し、自身の主催する会などでたびたび取り上げてきた。そのため、筆者は幼いころから能楽、「謡物」が身近にあり、それらに深い親しみをもっている。

修士論文での調査をきっかけに、それらの作品により深い興味をもつようになり、「謡物」についての研究をすることを決めた。

(二) 研究目的

「謡物」とは、広義には詞章が能とかかわりをもつ作品を指す言葉である。つまり、楽曲の形式とはかわりのない分類であるため、作曲された時代、形式が多岐にわたっており、包括的な研究が難しく、現在まで「謡物」に特化した研究はあまりなされていない。その中で、蒲生郷昭「地歌が摂取した能詞章」²などの貴重な研究も存在するが、どの研究も詞章の摂取のしかたや摂取されている演目の傾向などが主な研究内容となっており、作品の音楽的な特徴やそれらの能、謡曲とのかかわりについては触れられていないか、かわりが薄いと考察されている。しかしながら、筆者は、今まで実際に「謡物」を演奏してきた経験などから、「謡物」の中には、詞章のみならず、音楽、構成の面において能と深いかわりがある作品があると感じてきた。

本研究は、「謡物」各曲の考察を深め新たな見解を見出すこと、様々な面での能とのかかわりを深く研究すること、作曲された背景を探ることなどを目的としている。

(三) 先行研究

¹ 村澤丈児『吉沢検校三味線作品の研究』東京藝術大学大学院音楽研究科修士論文、二〇一五年度。

² 蒲生郷昭『日本古典音楽探究』東京…出版芸術社、二〇〇〇年、三一五～三四六頁。

「謡物」を主題とした先行研究として、次の三つが挙げられる。

久保田敏子「地歌・箏曲の謡い物について」³は、「謡物」について、主に「謡曲のどの部分を引用しているか」という分析がなされており、例として能《葵上》、山田流箏曲《葵上》、地歌《葵の上》の歌詞の比較が行われている。音楽的な面については、謡曲と三味線音楽について「共通の要素が考えられる箇所は非常に少ないといえる」と結論を出しているが、曲の構成において、一部の「謡物」の最後部分が、謡曲の「ギリ」のノリ型のリズム感に即した手付けが行われているとしている。

蒲生郷昭「地歌が摂取した能詞章」⁴は、「謡物」に特化し深い研究がなされた貴重な文献である。主に謡曲のどの部分を摂取しているか、またどのように摂取をしているかを中心に詳細な研究がなされており、その点について新たな研究の余地はあまり残っていないとみることができる。本論文では、詞章の摂取のしかた等を踏まえた上で、構成や音楽的な面での能とのかかわりについて、さらに深く研究したい。

徳野礼子『地歌〈謡いもの〉に関する一考察』⁵は、東京藝術大学大学院音楽研究科修士論文として唯一「謡物」に特化した研究がなされた論文である。地歌に能の詞章が取り入れられた背景や、特定の音型が多用されている理由などが研究されている。研究範囲は狭義の「謡物」であり、歌舞伎に用いられていたと思われる作品、名古屋で作曲されたと思われる作品以外の作品については、あまり詳しく述べられていない。

更に、特定の楽曲を扱った研究として、以下の論文が挙げられる。

日原暢子『地歌《屋島》について―箏手付を中心に―』⁶では、「謡物」の代表的作品である《八島》(屋島)⁷の作曲者、藤尾勾当の人物像や、《八島》の作曲された背景を探った上で、手付けの相違を元に、伝承の違いを主眼においた研究がなされている。能の詞章との比較も詳細に行われており、曲の概要を知る上での参考とする。

³ 久保田敏子「地歌・箏曲の謡い物について」龍谷学会『龍谷大学論集』No.434,435 京都：文功社、一九九一年十一月、二九七～三二一頁。

⁴ 蒲生郷昭『日本古典音楽探究』前掲、三二五～三三六頁。

⁵ 徳野礼子『地歌〈謡いもの〉に関する一考察』東京藝術大学大学院音楽研究科修士論文、一九九四年度。

⁶ 日原暢子『地歌《屋島》について―箏手付を中心に―』東京藝術大学大学院音楽研究科修士論文、二〇一四年度。

⁷ 本論文では表記は《八島》に統一する。

石本かおり『地歌箏曲《西行桜》の研究』⁸は、手事物⁹の《西行桜》を取り上げた研究である。作曲者の菊崎検校、作詞者のえぎぬ屋孫八についての研究他、歌本¹⁰への記載、箏の手付けを含めた楽曲研究がなされている。

鳥越菜々子『地歌《石橋》伝承の比較』¹¹は、芝居歌の《石橋》について、多くの流派の歌、三味線、箏手付けを比較した研究である。《石橋》は、能、歌舞伎、地歌のつながりが具体的に見いだせる貴重な作品であり、その伝承の相違等は貴重な資料となる。

また、「謡物」が中心ではないが、本研究と深くかわりのある研究として、前島美保『十八世紀上方歌舞伎音楽の研究―囃子方を中心に―』¹²が挙げられる。十八世紀の上方歌舞伎について、様々な史料から囃子方の活動実態を探っており、また音楽実態についても深い研究がなされている。本研究では、もとは歌舞伎に用いられていたと思われる作品を多く取り上げている。それらの作品は主に十八世紀に作曲されたとみられ¹³、同時期の上方歌舞伎、しかも囃子方¹⁴を中心に研究がなされたこの論文は本研究とかかわりの深い部分が多くあった。歌舞伎について専門外である筆者は、芝居歌作品の考察等において、この論文を参考にした部分が多くある。

(四) 本論文の構成

本論文は、二部構成となっている。第一部では、「謡物」各曲の概要を分析した上で能との比較をし、詞章の引用のしかた、構成や音楽面での能とのかかわりを探り、特徴をまとめる。第二部では、作曲者や時代背景を分析し、それらが各曲の音楽面に与えた影響を考察した上で「謡物」の特徴が生まれた要因を探り、研究の成果をまとめる。

⁸ 石本かおり『地歌箏曲《西行桜》の研究』東京藝術大学大学院音楽研究科修士論文、二〇一五年度。

⁹ 地歌箏曲における曲中の長い器楽部分を「手事」といい、「手事」をもつ作品を「手事物」という。

¹⁰ 地歌箏曲の歌詞などを集成した本。

¹¹ 鳥越菜々子『地歌《石橋》伝承の比較』東京藝術大学大学院音楽研究科修士論文、二〇一六年度。

¹² 前島美保『十八世紀上方歌舞伎音楽の研究―囃子方を中心に―』東京藝術大学大学院音楽研究科博士論文、二〇一一年度。

¹³ 本論文第二章第一節。

¹⁴ ここでは、三味線や唄を含む歌舞伎で演奏していた音楽家全体を指す。

「能」と「謡曲」の表記について

「謡曲」とは、「能」の声楽部分、ないしはそのテキストを表わす言葉であるが、本研究では、テキストのみならず、囃子事や演目の構成についても扱うため、演目他の表記は極力「能」に統一している。そのため、声楽部分やテキストにしか関連しておらず、「謡曲」の表記の方がふさわしいと思われる場合も、「能からの引用」「能において」などと表記している部分が多くある。これは、能と地歌という二つの分野についての記述が入り混じっている本論文において、「能」と「謡曲」の使い分けは混乱を招きかねないと判断したためである。

「歌舞伎」「芝居」の表記について。

本論文では「芝居歌」とよばれる、歌舞伎に用いられていたと思われる作品を多く扱っている。文献や状況により「芝居」と「歌舞伎」という言葉は使い分けられている場合もあるが、本論文では表記を全て「歌舞伎」に統一している。

本論

第一部 謡物の分析

第一章 謡物の定義と研究対象・分類

第一節 謡物の定義

先にも述べたように、「謡物」とは、広義には詞章が能とかかわりをもつ作品を指す言葉であるが、未だその定義は一定していない。次に、いくつかの文献から「謡物」についての説明を引用する。

◆吉川英史監修『邦楽百科事典』「謡物」¹⁵

（前略）地歌の分類用語。能から歌詞をとった曲、あるいは能を題材にした地歌を指すが、芝居でおこなったものも含めて、広義の端歌として扱う。歌詞は必ずしも謡曲どおりではなく、世話に砕けた部分や、遊女の世界をかさねたものもある。（後略）

◆久保田敏子編『地歌箏曲研究』資料編¹⁶

「謡物」は能の詞章である「謡」から歌詞を採ったり、能を題材にした内容の作品をいう。これらのうち、「手事物」でないものは「端歌物」に扱うことも多い。

歌本では享和本『糸のしらべ』（1801）から「謡の部」という分類が登場するが、この中にはたとえば《石橋》《古道成寺》《松風》《新道成寺》《山姥》のように、元来「芝居歌」であつた曲も含まれているが、「謡物」としては、《葵上》《海女》《翁》《鉄輪》《富士太鼓》《虫の音》《八島》などがある。

なお、「謡物」には、途中で世話に砕けた遊里の世界を歌ったクドキ風の詞章が挿入される例が多く、必ずしも能の詞章通りでないものもある。上方舞では、「謡物」の曲種¹⁷を「本行物」と称している。

¹⁵ 吉川英史監修『邦楽百科事典』東京…音楽之友社、一九八四年、九七頁。

¹⁶ 久保田敏子編『地歌箏曲研究』資料編 京都…京都市立芸術大学 日本伝統音楽研究センター、二〇一二年、五三頁。

¹⁷ 地歌の曲が分類されるグループの呼称で、平野健次、野川美穂子の先例に倣い、本論文でもこの呼称を用いる。

◆蒲生郷昭「地歌が摂取した能詞章」¹⁸

（前略）地歌では、能を取り入れて作られた曲を、謡物または謡曲ものと呼ぶ。ただし、その概念は広狭の幅が大きい。もつとも狭義には、詞章の大部分が謡からの引用で、かつ、通常の端歌などとは異なる独特のハコビで奏される箇所を持つ曲に限定する。この意味での謡物は、端歌のなかの特別な一群と見るべきものである。いっぽう、もつとも広義には、詞章の一部に謡を運用しているものから、曲名を借りただけのもの、さらにはパロディまでを含める。したがって、その場合には、謡物であると同時に手事物でもある、あるいは作物でもある、などという曲が、当然、出てくることになる。また、広狭の問題とは別に、芝居歌と謡物との境界が微妙で、判断が分かれる場合が少なくない。（後略）

他にも文献は存在するが、前掲のものとはほぼ内容が一致するため省略する。

筆者は、蒲生氏の説明が、現在の演奏家の認識とほぼ一致しているように思うが、各文の共通している点は、「詞章に能とのかかわりがある」という点に限られる。

中井猛が、一九九一年に作成した地歌の現行曲一覧表、通称「中井総覧」¹⁹を見ると、「謡物」に分類されている作品はわずかに九曲である。これは、「謡物」以外に分類しづらいものを「謡物」にまとめた結果とみられ、詞章において能とのかかわりが深い作品も、手事物は「手事物」の項に、芝居歌物は「芝居歌物」の項に分類している。この「中井総覧」で「謡物」に分類されている作品が、蒲生郷昭が「詞章の大部分が謡からの引用で、かつ、通常の端歌などとは異なる独特のハコビで奏される箇所を持つ曲」としている作品にあたるといえる。

このように、「謡物」の定義はいまもって一定していない。

第二節 研究対象と分類

本研究ではなるべく多くの「謡物」を取り上げたいと考えたが、もつとも広義である「詞章が能とかかわりのある作品」とすると、一つの論文で取り上げるにはあまりにも範囲が広い。

¹⁸ 蒲生郷昭『日本古典音楽探究』前掲、三二六頁。

¹⁹ 野川美穂子『地歌における曲種の生成』東京：第一書房、二〇〇六年、一〇～一四頁に掲載。

様々な考慮の結果、研究対象を「江戸期に作曲されたと思われる地歌作品の中で、能から詞章を引用している作品」とした。江戸期の作品に絞った理由は、明治以降の作品を含めると作品数が膨大となる上、明治維新は能楽界、地歌箏曲界にとって大きな転機であり、それ以前の作品とそれ以後の作品を一つの論文で扱うことは難しいと判断したためである。詞章の引用がある作品に絞った理由は、「能との音楽的かわりを探る」ことを大きな目的としている本研究において、詞章を引用していない作品について深く分析することは研究の主旨から外れると判断したためである。また、地歌の分類上特殊な位置づけにある「三味線組歌」に限り、研究対象から外している²⁰。

研究対象となる作品数が多いため、本論文では次のように分類をする。他の分類にも入る可能性のある作品は、その旨を記す。

- A 歌舞伎に用いられたと思われる作品
- B 十八世紀に名古屋で作曲されたと思われる作品
- C その他
 - ・手事物
 - ・長歌物
 - ・端歌物
 - ・作物
 - ・上方歌

A、Bは他の曲種にはない特徴を持っている曲が多く、特定の背景を持っている可能性がある高いと予測したため、このように分類した。Cは、それ以外の曲を形式で分けたのみである。

次に、筆者が設定した研究範囲の「謡物」を、右の分類に当てはめる。分類は、B↓A↓Cの順に優先して行う。例として、芝居歌に分類されることもある《梓》は、名古屋で作曲された作品であるためB作品に分類し、手事物に分類されることもある《石橋》は歌舞伎に用いられていたと思われる作品であるためA作品に分類する。

²⁰ 「三味線組歌」は江戸期の盲人音楽家の必修曲として扱われ、伝承その他の面で特殊な位置づけにある曲種であり、「三味線組歌」が他の曲種にも分類されることはない。

◆ A 歌舞伎に用いられていたと思われる作品（十三曲）

- 1 《古道成寺》
- 2 《古松風》
- 3 《善知鳥》
- 4 《関寺小町》
- 5 《新道成寺》
- 6 《山姥》
- 7 《邯鄲》
- 8 《海女》
- 9 《珠取り》
- 10 《放下僧》
- 11 《石橋》
- 12 《貴船》
- 13 《葵の上》

◆ B 十八世紀に名古屋で作曲されたと思われる作品（六曲）

- 1 《八島》
- 2 《富士太鼓》
- 3 《虫の音》
- 4 《鉄輪》
- 5 《藤戸》
- 6 《梓》

◆ C その他（二十一曲）

- 手事物（十三曲）
- 1 《融》
 - 2 《神楽》
 - 3 《鳥追》
 - 4 《三津山》
 - 5 《西行桜》
 - 6 《新青柳》
 - 7 《翁》
 - 8 《嵯峨の春》

9	《老松》
10	《新娘道成寺》
11	《新山姥》
12	《尾上の松》
13	《四季の雪》
長歌物（一曲）	
14	《梅が枝》
端歌物（四曲）	
15	《京松風》
16	《鉢の木》
17	《鶴亀》
18	《高砂》① ₂₁
作物（二曲）	
19	《綱》
上方歌（二曲）	
20	《高砂》②
21	《猩々》

2
1
本論文で、《高砂》の題の曲を二曲扱うため、①、②として区別した。

第二章 謡物各曲の概要と分析

この章では、「謡物」各曲の概要をまとめ、主に能とのかかわりについて分析をしていく。

(一) 分析にあたって

◆詞章の特徴における分類は、蒲生郷昭が「地歌が摂取した能詞章」の中で詳細に行っている。これは、平野健次が措定した九通り²²に蒲生氏が五通りを加えたもので、次の十四通りとなる²³（原文ではそれぞれに更に詳しい解説がなされているが、要点のみを記す）。

- A 丸取り型…一曲の能のあるまとまった部分を、そっくり地歌の詞章としているもの。
- A' 準丸取り型…能の詞章に地歌的詞章を前置または付加（後置）したもの。
- B 別謡曲文合成型…二曲以上の能の詞章を直接接合して一曲の地歌の詞章としたものの。
- C 地歌的詞章挿入型…一曲の能からとった詞章に、地歌的詞章を挿入したもの。
- C' 謡曲文・地歌的詞章混交型…能から取った詞章と地歌的詞章を交互に組み合わせるもの。
- D 後半謡曲文丸取型…前半に地歌的詞章を、後半に能からとった詞章を配したもの。A'型とははっきり区別される。
- E 部分謡曲文引用型…地歌的詞章のあいだに、能からの引用を挿入したもの。
- F 別謡曲文分離引用型…二曲の謡曲文を地歌的詞章を挟んで引用したもの。
- G 再構成型…謡の詞章の前後を入れ換えて再構成したもの。
- H パロディ型…曲全体が能のパロディとなっているもの。
- H' 合成パロディ型…能二曲を利用してパロディに仕組んだもの。
- I 曲名借用型…内容上は能から摂取しているとはいいたいのに、能の曲名が流用されているもの。
- I' 準曲名借用型…能からの引用がごくわずかで、曲名も能と異なるもの。換言する

²² 平野健次『箏曲・地歌の歌謡とその表象文化論』東京…邦楽社、一九九〇年、一五二～一七三頁の「箏曲・地歌の「亡霊もの」の項で措定されている。前半部分は『季刊邦楽』二七号（東京…邦楽社、一九八二）での特集「亡霊もの——名曲のルーツ——」からの再録で、後半部分は一九七九年二月二十日に国立劇場大劇場で行われた「箏曲の伝統を守る会 第二回春季公演」で配布されたパンフレットからの転載（後半部分については蒲生氏記述による）。

²³ 蒲生郷昭「地歌が摂取した能詞章」『日本古典音楽探究』前掲、三二三～三二四頁。

と、曲名が同じなら曲名借用型となるもの。

本研究では、詞章の引用がある作品のみを扱っており、右のⅠ、Ⅰ'に属する曲を扱っておらず、後に、引用の形式や、引用部分ではない地歌独自の詞章の内容に関連した独自の方法で改めて分類を行う。

◆ 作曲者、作詞者、初出の文献については、地歌を網羅した研究書で最新のものである『地歌箏曲研究』を参考とした。これに記載のない曲、筆者の判断で内容を変えている部分については、その都度記述する。また、『歌舞伎事始』²⁴等、歌本以外の資料も含まれる。

◆ 能、地歌の詞章の字使い、送り仮名等については、謡本、翻刻、参考楽譜などを資料とした上で、筆者の判断による表記とする。

◆ 曲ごとに作曲者、作詞者、初出の文献、引用されている能、調絃（三味線のもの）、詞章を最初に記載し、その後曲の特徴の分析、能との比較を行う。

◆ 各曲の分析の際に使用した楽譜、音源は、稿末に一覧を記載する。

◆ 地歌の伝承の性質上²⁵、能から引用する際の詞章の多少の変化等については言及しない。

◆ 譜例は、全て三味線の楽譜である。また、邦楽社出版の三味線譜などに採用されている「縦ワク式」の譜面を用いる。

（二）「ノリ型風」（「平ノリ風」「中ノリ風」「大ノリ風」「特殊な型」）について

「謡物」には、能の「拍子合」²⁶の部分をおぼろげに思わせる独特のリズム、節回しをもつ作品が多くある。言葉での説明は難しいが、特徴として、「地歌の特色である産み字が少なく、言葉を次々に歌う」「リズムカルである」などが挙げられる。本論文ではそれらの部分を、能の三種類のノリ型である「平ノリ」「中ノリ」「大ノリ」に倣った「平ノリ風」「中ノリ風」「大ノリ風」とそれに「特殊な型」を加えた四つに分類し、それら四つを総称して「ノリ型風」と表現する。能において「平ノリ」とは「中ノリ」「大ノリ」以外の「拍子合」の部分を指す言葉であり、それに倣い、地歌について述べる際、能をおぼろげに思わせる独特の節であり

²⁴ 為永一蝶『歌舞伎事始』宝暦十二年（一七六二）。翻刻…芸能史研究会編『日本庶民文化史料集成』第六巻歌舞伎、三三書房、一九七三年。

²⁵ 流派、演奏者による詞章の差異が多くあり、作曲当時の詞章を正確に知る事が困難である。

²⁶ 能において、拍子に合わせて謡う部分。

かつ「中ノリ風」「大ノリ風」でない部分を「平ノリ風」と分類するが、地歌にしかみられない独特のリズムであり「平ノリ」とかけ離れていると判断した場合は、「特殊な型」と分類している。また、地歌の場合は能の「ノリ型」に似たリズムの歌の合間にごく短い三味線のための旋律が奏される場合が多くあり、そのような場合は、その旋律を省略した上で「ノリ型」を判断する。

この「ノリ型」とそれに対応した「ノリ型風」の部分は、本研究において重要な要素となるため、三種の「ノリ型」についてごく簡単に説明をする。

能において、拍子に合わせて謡う部分のほとんどは「平ノリ」である。最も普遍的な「ノリ型」で、能のテキストの基本形となっている七五調の上の句七文字、下の句五文字の計十二文字を八拍にあてはめる形である。実際には字数の多少があるため、母音を伸ばす「モチ」等によって調整し、平ノリ句には様々な形がある。

「中ノリ」は、別名「修羅ノリ」ともいわれ、「修羅物」²⁷とよばれる演目のキリ（最後の部分）は、「中ノリ」で謡う場合が多い。一拍に二文字謡う形が基本となっているが、実際には「平ノリ」の型がかなり混在することになる。

「大ノリ」は、一拍に一文字を謡う形が基本となっている。

次に、横道萬里雄『謡リズムの構造と実技——能：地拍子と記号——』に記載の図を用するが²⁸、三種の「ノリ型」は、各部分の出だしを表記しており、あくまで基本型である。特に「平ノリ」と、その句が多く混在する「中ノリ」には更に詳しい解説が必要だが、紙面を膨大に割くため本論文での解説は避ける。「ノリ型」の理論については、横道萬里雄の同書他に詳しい。

²⁷ 修羅道で苦しむ武士の霊をシテとする演目の通称。

²⁸ 横道萬里雄『謡リズムの構造と実技——能：地拍子と記号——』東京：檜書店、二〇〇二年、二三頁に記載のもの。

図1 「平ノリ」「中ノリ」「大ノリ」の型の例（右の数字は拍の位置を表している）

大		中		平	
ノ		ノ		ノ	
しーげーほーそー2	リ	すーさーー1	リ	さーんーちゅー1	リ
ーーーーー		がーもー		さーまーおー	
けーんーまーもー3		たーはーそー2		げーのーりゅー2	
ーーーーー		もーなーのー		けーうーおー	
にーペーれーそー4		こーやーごー3		ーーーーー	
ーーーーー		こーかーとー		るーえーくー	
もーいーのーもー5		ろーなーくー4		にーなーつー4	
ーーーーー		もーるーにー		ぞーるーをー	
とーとーーぶー6		あーおーー5		ーーーーー	
ーーーーー		らーんーわー		こーせーさー	
りーおーーりゃー7		てーなーじゅー6		こーきーさー6	
ーーーーー		んーりーおー		ろーこーげー	
わーきーちーくー8		ぐーさーろー7		とーおーつー7	
ーーーーー		をーまーおー		けーにーつー	
きーッーーのー1		ーーにーもー8		ー0ー0ー0ー8	
ーーーーー		0ーてー0ー			

※図のリズムはあくまで理論上のもので、実演は異なる場合がある。

この三種類のノリ型は、能においては分類をすることが可能だが、地歌においては、「伝承によりリズムが異なる」「伝承の途中でリズム型が変わっている可能性がある」などの理由により、明確な分類は困難である。しかし、明らかに「大ノリ」や「中ノリ」と思われるリズム型がみられる作品も少なからずあり、また、これまで地歌における歌のリズムを能の理論に倣って分類するという試みは行われていないことに鑑み、分類を試みた。地歌の歌のリズムが伝承により異なるという点を考慮しなくとも、能の理論に完全に当てはめることはできず、筆者の主観によって判断されている部分もあることを述べておく。

(三) 詞章等の比較について

◆作品ごとに、地歌と能の、詞章と器楽部分等の比較を行う。それぞれ詞章等が一致している部分を傍線で示すが、傍線は次のように使い分ける。


..... 詞章がほぼそのまま引用されている部分。

~~~~~ や ~~~~~ など。複数の能から引用している部分や、引用部分が前後している部分

など、傍線を使い分けた方が分かり易いと判断した部分。

----- 詞章が引用されているが、言い回しや表現が変化している部分。

----- 器楽部分が対応している部分。

また、「クセ」の入り<sup>29</sup>など、能において区切りに当たる部分に器楽部分が挿入されている場合は、 のような塗りつぶしで対応する部分を示す。

◆「手事」や長めの「合の手」の他、短い合の手を「小合の手」と表記している場合があるが、煩雑になることを防ぐため、分析に必要と判断した場合にのみ表記する。ただし、一回でも「小合の手」を表記した場合は、曲中の「小合の手」は全て表記する。また、場合によっては詞章の比較から「合の手」、「調絃替え」の表記を省略する場合もある（詞章が長大で、構成に能とのかかわりがみられない作品等）。

◆能の詞章については、役や上調、下調などの情報をすべて記入することは難しいため、基本的には「クセ」などどの部分であるかと、詞章と器楽部分のみを示す。「打切」<sup>30</sup>等は、必要と判断した場合のみ表記しているが、同じ曲の中で、ある器楽部分のみを表記し、別の部分を省略しているということはない。例として、一か所でも「打切」を表記している場合、他に「打切」がある部分は全て表記する。

<sup>29</sup> 能の小段を指す用語。聞かせどころでもある。

<sup>30</sup> 大鼓、小鼓による手組の一つで、合頭をつけ、小段末や節の切れ目など、謡が一段落する箇所に挿入される（『邦楽百科事典』前掲、一〇五頁）。

## A 歌舞伎に用いられていたと思われる作品

### A・1 《古道成寺》

作曲…岸野次郎三

作詞…不詳

初出…『古今端歌大全』（一七一―三六頃）

能…《道成寺》

調絃…三下り↓本調子

#### （詞章）

昔々此所に 真名子の庄司という者あり 彼の者一人の娘をもつ 又その頃奥よりも 熊野へ通る山伏あり 庄司が許を宿と定め 年月送る 庄司 娘寵愛のあまりにて かの客僧こそが汝が夫よ夫と戯れしをば 幼な心に真と思ひ 明し暮して在しける 「小合の手」 その後娘 夜更け人も静まりて 衣紋繕い鬢搔き撫でて 忍ぶ夜の障りは 冴えた月影 更け行く鳥か音 それに嫌なは犬の声ぞつとした 人目忍ぶ夜の 憂や辛や 急きくる胸を押し鎮め 彼の客僧の傍へ行き 何時までかくて置き給う 早く迎えて給われとじつとしむれば 詮方なくも客僧は 縋れつ縋れつ常陸帯 二重廻りに三重四重五重七巻巻いて放しはせじと 引き結ぶ とても寝よなら 果て諸共に 緑は朝顔浅くと儘よせめて一夜は寝て語ろ 後程忍び申すべし 娘真と喜びて 閨の内にぞ待ち居たる その後客僧 しすましたりとそれよりも 夜半に紛れて 「合の手①」 逃げていく 幸い寺を頼みつ つしばらく息をぞ継ぎいたる （本調子） 所へ娘立ち戻り ええ腹立ちや腹立ちや 我を捨て置き給うかや のうのう 如何に御僧よ 何処までも追つかけ行かんと死なば諸共二世三世かけ 逃すまじとて追つかくる 折節 日高川には水嵩増さりて 渡るべきも非ざれば 川の上下 彼方此方と尋ね行きしが 毒蛇となつて川へザンブと飛び込んだり 逆巻く水に浮いつ沈みつ 紅の 舌を巻き立て炎を吹きかけ 吹きかけ吹きかけ 難なく大河を泳ぎ越し 男を返せ戻せよと 此処の面廊 彼処の客殿 ぐるりぐるり追ひ廻り追ひ廻り 「合の手②」 猶々 怨霊 居上高に飛び上がり 土を穿つて尋ねいたる 住持も今は詮方なく 釣鐘降ろし隠しおく 尋ね兼ねつつ怨霊は 鐘の下りしをあやしみ 龍頭を喰わえ七巻巻いて 尾を以て叩けば 鐘は即ち湯となりて 遂に山伏取り畢んぬ 何程恐ろし物語



《古道成寺》詞章の比較（次頁まで）

| 地歌                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                        | 能                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                    |
|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>昔々此所に 真名子の庄司という者あり<br/>         彼の者一人の娘をもつ 又その頃奥より<br/>         も 熊野へ通る山伏あり 庄司が許を宿<br/>         と定め 年月送る 庄司 娘寵愛のあま<br/>         りにて かの客僧こそが汝が夫よ夫と戯<br/>         れしをば 幼な心に真と思ひ 明し暮し<br/>         て在しける その後娘 夜更け人も静ま<br/>         りて 衣紋繕い鬢搔き撫でて 忍ぶ夜の<br/>         障りは 冴えた月影 更け行く鳥か音<br/>         それに嫌なは犬の声ぞつとした 人目忍<br/>         ぶ夜の 憂や辛や 急きくる胸を押し鎮<br/>         め 彼の客僧の傍へ行き 何時までかく<br/>         て置き給う 早く迎えて給われと じつ<br/>         としむれば 詮方なくも客僧は 縊れつ<br/>         纏れつ常陸帯 二重廻りに三重四重五重<br/>         七巻巻いて放しはせじと 引き結ぶ と<br/>         ても寝よなら 果て諸共に 緑は朝顔浅<br/>         くと儘よ せめて一夜は寝て語ろ 後程<br/>         忍び申すべし 娘真と喜びて 閨の内に<br/>         ぞ待ち居たる その後客僧 しすました<br/>         りとそれよりも 夜半に紛れて 逃げて<br/>         いく 幸い寺を頼みつつ しばらく息を<br/>         ぞ継ぎいたる 所へ娘立ち戻り ええ腹<br/>         立ちや腹立ちや 我を捨て置き給うかや<br/>         のうのう 如何に御僧よ 何処までも追<br/>         っかけ行かんと 死なば諸共二世三世か<br/>         け 逃すまじとて追つかくる 折節日高<br/>         川には水嵩増さりて 渡るべきも非ざれば</p> | <p>（ワキ語り）むかし此所に まなこの庄<br/>         司と云ふ者ありしが 彼の者一人の息女<br/>         を持つ 又其頃奥より 熊野詣の先達の<br/>         ありしが 庄司が許を定宿と定め 年々<br/>         来たりしに 庄司娘を寵愛の余りに あ<br/>         の客僧こそ汝が夫よ妻よなどと 戯れけ<br/>         るを 幼心にまことと思ひ年月を送る<br/>         又ある時かの客僧庄司がもとに泊りしが<br/>         彼の女申すよう いつまで我をば捨て置<br/>         き給ふぞ 今は奥へつれてお下りあれと<br/>         申す 客僧大きに騒ぎ<br/>         夜にまぎれ忍び出で此寺に來り かよう<br/>         かやうの仔細により まっぴら助けてく<br/>         れよと申す およそに隠してはあしかり<br/>         なんとと思ひ その時の鐘樓を下ろし そ<br/>         の中に隠す さて彼の女は山伏を逃すま<br/>         じとて追つかくる 折りふし日高川の水<br/>         増りしかば</p> |

|                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                               |                                                                                                                                                                                                                                                       |
|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>川<small>かみしも</small>の上下 彼方<small>あつち</small>此方<small>こち</small>と尋ね行きしが<br/> 毒蛇<small>どくへび</small>となつて川へザンブと飛び込んだり<br/> 逆巻<small>さかま</small>く水に浮いつ沈みつ紅<small>くれなひ</small>の舌を巻<br/> き立て炎を吹きかけ 吹きかけ吹きかけ<br/> 難なく大河を泳ぎ越し 男<small>おのこ</small>を返せ戻せ<br/> よと 此処<small>かしこ</small>の面廊 彼処<small>かしこ</small>の客殿 ぐるり<br/> ぐるり 追い廻り追い廻り 猶々 怨霊<br/> 居上高に飛び上がり 土を穿つて尋ねい<br/> る 住持<small>じゆうし</small>も今は詮方なく 釣鐘降ろし隠<br/> しおく 尋ね兼ねつつ怨霊は 鐘の下り<br/> しをあやしみ 龍頭を喰わえ七巻巻いて<br/> 尾を以て叩けば 鐘は即ち湯となりて<br/> 遂に山伏取り畢<small>おわ</small>んぬ 何程<small>なんぼろ</small>恐ろし物語</p> | <p>川<small>かみしも</small>の上下を彼方<small>あつち</small>此方<small>こち</small>と走り廻りしが一<br/> 念の毒蛇となつて 日高川を易々と泳ぎ<br/> 渡り此寺に來り</p> <p>ここかしこを尋ねしが 鐘<small>かね</small>のおりたるを<br/> 不審に思い 龍頭をくはへ七まとひ纏ひ<br/> 尾にて叩けば 鐘はすなはち湯となつて<br/> 山伏も即座に消えぬ なんぼろ恐ろしき<br/> 物語にては候わぬか</p> |
|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

## A・2 《古松風》

作曲…岸野次郎三

作詞…佐渡島伝八

初出…『古今端歌大全』（一七一―三六頃）

能…《松風》

調絃…三下り

### （詞章）

懐しや行平の中納言 三年はここに須磨の浦 都へ上り給いしが この程の形見とて御立  
烏帽子狩衣を 残し置き給えども これを見る度に いや増しの思い草 葉末に結ぶ露の  
間も 忘れればこそ味気なや〔合の手①〕 形見こそ今は仇なり これ無くば 忘るる暇  
も ありなむと 読みしも 理や 猶思いこそ深かりし〔合の手②〕 乱れ髪 乱れ心や  
狂うらん 我は姿は恥ずかしや 髪も棘を戴いて 日陰を待ちし夕顔の 蔓に放れし破れ  
車 よしや思いは愛しさの 付き添い巡る小車の憎かれとは神かけて 思わぬ夫を放ちや  
る 心の中こそ儚なけれ さは然りながら一念の瞋恚となつて〔合の手③〕 思いしらず  
や思いしれ 恨めしの心やは 今更何と宣うとも そなたは忘れじ松風や松風や〔合の手  
④〕 立ち別れ稲葉の山の峰に生うる あら頼もしの歌やな〔合の手⑤〕 それは稲葉の遠山  
松 これは懐し君ここに 須磨の浦曲の松の行平 立ち帰り来ば 我も木陰にいざ立ち寄  
りて 磯馴松の懐しや 松に吹き来る風も狂じて〔合の手⑥〕 須磨の浦波どうどう どう  
どう どうと激しき夜すがら 妄執の雲に紛れて失せにけり

この曲は《松風》と称することもあるが、《松風》と称する曲は地歌に二曲伝承されているため、本論文では区別するために《古松風》と称する。

能《松風》のクセと、後半の「中ノ舞」の直前の句から曲尾より詞章を引用している。作詞の佐渡島伝八は京阪歌舞伎の道化方で<sup>33</sup>、詞章の「乱れ髪」から「松風や松風や」までの地歌独自の詞章を作詞したと考えられる。この独自の詞章には、「夕顔」「破れ車」「小車」「思いしらずや思いしれ」など、能《葵上》を思わせる言葉が多く使われており、その影響で、詞章全体から「恨み」というものが強く感じられる内容となっているが、能《松

<sup>33</sup> 国立劇場調査養成部 調査記録課『歌舞伎俳優名跡便覧』【第四次修訂版】東京…日本芸術文化振興会、二〇一二年、二二二頁。



風』の主人公松風・村雨は妄執に苦しめられているものの、行平を恨んでいる描写はされていない。おそらくこの曲が使用された歌舞伎が、《松風》を題材としながら、女性の恨みを描いた内容であったと推測できる。

冒頭が情緒的に始まる点は他のA、Bの三下り作品と共通しているが、この曲は同じ能のクセを冒頭に引用し、独自の詞章を経て再び能からの引用となることが一つの特徴である。

「合の手②」は、能の引用から独自の詞章となる変わり目、「合の手④」は、独自の詞章から能の引用となる変わり目に挿入されている。曲中には「オトシ」「同音合わせ撥の連続」や、「同音スクイ撥の連続」「短い旋律の反復」（「合の手⑤」、譜例1）など、三下りの芝居歌作品の特徴的な技法や音型が随所にみられる。

「さはさりながら」から「合の手④」の前まで、「中ノリ風」となる。「それは稲葉の」からは「大ノリ風」となるが、能でも同じ箇所から「大ノリ」となる。「合の手⑤」の後、「須磨の浦波どうどう どうどう どうと激しき夜すがら」の部分は「中ノリ風」となる。

譜例1「合の手⑤」にみられる「同音スクイ撥の連続」と「短い旋律の反復」。

|   |   |   |   |   |   |    |   |   |    |   |   |   |   |   |   |   |    |   |   |    |   |   |   |   |    |
|---|---|---|---|---|---|----|---|---|----|---|---|---|---|---|---|---|----|---|---|----|---|---|---|---|----|
| 一 | ス | く | く | 1 | 3 | 24 | 4 | 3 | 12 | ニ | 一 | ス | く | く | 1 | 3 | 24 | 4 | 3 | 12 | ニ | 4 | 2 | 3 | 12 |
|---|---|---|---|---|---|----|---|---|----|---|---|---|---|---|---|---|----|---|---|----|---|---|---|---|----|

《古松風》詞章の比較

| 地歌                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                  | 能                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                |
|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>懷しや行平の中納言 三年はここに須磨の浦 都へ上り給いしが この程の形見とて御立烏帽子狩衣を 残し置き給えども これを見る度に いや増しの思い草葉末に結ぶ露の間も 忘れればこそ味気なや</p> <p>合の手① 形見こそ今は仇なりこれ無くば 忘るる隙もありなんと 読みしも 理や 猶思いこそ深かりし</p> <p>合の手② 乱れ髪 乱れ心や狂うらん我は姿は恥ずかしや 髪も棘を戴いて日陰を待ちし夕顔の 蔓に放れし破れ車よしや思いは愛しさの 付き添い巡る小車の憎かれとは神かけて 思わぬ夫を放ちやる 心の中こそ儚なけれ さは然りながら一念の瞋恚となつて</p> <p>合の手③ 思いしらずや思いしれ 恨めしの心やは今更何と宣うとも そなたは忘れじ松風や松風や</p> <p>合の手④ 立ち別れ稲葉の山の峰に生うる 松とし聞かば今帰り来ん あら頼もしの歌やな</p> <p>合の手⑤ それは稲葉の遠山松 これは懷し君ここに須磨の浦曲の松の行平 立ち帰り来ば我も木陰にいざ立ち寄りて 磯馴松の懷しや 松に吹き来る風も狂じて</p> <p>合の手⑥ 須磨の浦波はどう とうとう とうと激しき夜すがら 妄執の雲に紛れて失せにけり</p> | <p>(クセ) あはれ古へを 思ひ出づればなつかしや 行平の中納言三年はここに須磨の浦 都へ上り給ひしが 此程の形見とて 御立烏帽子狩衣を 残し置き給へども これを見る度に いやましの思ひ草葉末に結ぶ露の間も 忘れればこそあぢきなや 形見こそ今はあだなれこれなくは 忘るる隙もありなんと よみしも 理や なほ思ひこそは深けれ (中略)</p> <p>あら頼もしの 御歌や 立ち別れ</p> <p>中ノ舞 稲葉の山の峰に生ふる 松とし聞かば 今帰り来ん それは稲葉の遠山松 これはなつかし君ここに 須磨の浦わの松の行平 立ち帰りこば我も木陰にいざ立ち寄りて磯馴松の なつかしや</p> <p>破ノ舞 松に吹き来る風も狂じて 須磨の高波はげしき夜すがら 妄執の夢に見ゆるなり 我が跡弔ひてたび給へ 暇申して 帰る波の音の 須磨の浦かけて吹くや後の山おろし 関路の鳥も声々に夢も跡なく夜も明けて村雨と聞きしも 今朝見れば松風ばかりや残るらん 松風ばかりや残るらん</p> |

### A・3 《善知鳥》<sup>うと</sup>

作曲…岸野次郎三（杉本為三とも）

作詞…不詳

初出…『琴線和歌の糸』（一七五二）

能…《善知鳥》

調絃…三下り

#### （詞章）

鹿を追う獵師は 山を見ずということあり 身の苦しさも 悲しさも 忘れ草の追ひ鳥  
高縄をさし引く潮の 末の松山風荒れて 袖に波越す沖の石 または干潟とて 海越しな  
りし里までも 千賀の塩竈身を焦がす「小合の手①」報いをも忘れける 事業をなせし悔  
しさよ そもそも善知鳥安方の鳥々に 品変わりたる殺生の 中に無慚やなこの鳥の 愚  
かなるかな筑波嶺の 木々の梢に羽を敷き 波の浮き巢をも掛けよかし 平沙に子を生み  
て落雁の 儂や親は隠さんとすれども 善知鳥と呼ばれて 子は安方と答えける さて  
も捕られやすかた 善知鳥「小合の手②」 親は空にて血の涙を 降らせば濡れじと菅蓑  
や 笠を傾けここかしこと 便りを求めて隠れ笠 隠れ蓑にもあらざりし なお降り掛か  
る血の涙に 目も紅に染め渡る 紅葉の橋の 鵲か「小合の手③」 娑婆にては  
善知鳥安方と見えしも 善知鳥安方と見えしも 冥途にしては化鳥となり 罪人を追っ立  
て 追っ立て追っ立て「小合の手④」 鉄の 嘴を鳴らし羽を叩き 銅の爪を鋭ぎ立  
てては 眼を擱んで肉むらを 叫ばんとすれども猛火の煙に 咽んで声をあげ得ぬは  
鴛鴦を殺せし咎やらん 逃げんとすれど立ち得ぬは 羽抜け鳥の報いとかや「小合の手⑤」  
善知鳥は却つて鷹となり 我は雉子とぞなりたりける 逃れ難のの狩り場の吹雪に 空も  
恐ろし地を走る 犬鷹に責められて あら心善知鳥安方 安き隙なし身の苦しみを 助け  
て賜べや御僧よ 助けて賜べや御僧と 言うかと思えば失せにけり

能《善知鳥》のクセから曲尾までをほぼそのまま詞章としている。『歌舞伎事始』巻五に  
は「うとふ」の作曲者に「岸野次郎三」とあるが、作曲者を「杉本為三」とする説もある<sup>34</sup>。  
『歌舞伎事始』をみると、『放下僧』や『松風』などの様に、同名異曲の作品があったこと

<sup>34</sup> 平野健次・久保田敏子編「寛永以降地歌歌本総合索引」小泉文夫・星旭・山口修責任編  
集『日本音楽とその周辺』東京…音楽之友社、一九七三年。他。

がうかがえるため、この《善知鳥》が岸野の作品でない可能性もあるが、曲調から岸野の作品の可能性が高いと考えている。もともと、芝居歌は地歌に取り入れられる際に抜粋や多少の編曲がなされている可能性が高く、どこかの段階で杉本為三がかかわったと考えることもできる。

この曲は、三味線の手は廃絶しており、萩原正吟（一九〇〇～一九七七）<sup>35</sup>が箏の手のみを伝承していたものを、口三味線を元に復曲したと伝えられている<sup>36</sup>。そのため、三味線の手を分析するに当たり、復曲であることを前提としなければならない。

曲中、器楽部分が少なく、合の手も比較的短いもののみである。

曲は情緒的に始まる。「事業をなせし悔しさよ」で、芝居歌独特の手をもって区切りをつける（譜例1）。「そもそも善知鳥」の独吟の後雰囲気が変わるが、ここは能において「打切」が入り区切りがつく箇所である。ここから「平ノリ風」となるが、この部分は能においても「平ノリ」である。その後の「小合の手②」の位置は能の「カケリ」の位置と同じである。この合の手は極めて短く（譜例2）、「カケリ」を意識したとはいいい切れないが、ここはテンポも緩む部分であり、曲中の区切りといえる部分である。能ではこの後「親は空にて血の涙を」から「大ノリ」となり、地歌でもおよそ「大ノリ風」となっているが、能のリズムとそれほど一致はしていない。能では「大ノリ」の最後の句末尾の「鵲か」<sup>かささぎ</sup>から「大ノリ」から外れ緩むが、地歌でも「鵲か」<sup>かささぎ</sup>で母音が長くなり緩むため、似た印象を受ける。その後の「小合の手③」は、能では「打切」の位置にあたる。能では「娑婆にては 善知鳥安方と見えしも」<sup>うとうやすかた</sup>より「平ノリ」、「冥途にしては」から「中ノリ」となるが、地歌も「善知鳥安方と見えしも」<sup>うとうやすかた</sup>の繰り返しを「平ノリ」のリズムで歌い、その後「中ノリ風」となっている。この「善知鳥安方と見えしも」の句を二回繰り返す部分で、地歌では一回目の後半で緩み、二回目で再びのつていくが、これは能において同じ句を繰り返す間に「打切」が入る場合の緩急と同じであり、能《善知鳥》のこの部分も同様である。「小合の手⑤」は、地謡からシテ謡への変わり目に挿入されている。

このように、曲の中盤「さても捕られやすかた 善知鳥」<sup>うとう</sup>以降が、能の構成、ハコビとかなり近い印象を受ける曲である。特に、能におけるノリ型の変化や、ある句の繰り返しの間に「打切」が入る場合の緩急を取り入れている作品は珍しい。

<sup>35</sup> 京都上派の演奏家。渡辺正之、田中きぬ他に師事。京都府立盲学校教官。

<sup>36</sup> 平野健次解説『三味線音楽事始——京阪芝居歌と地歌の濫觴——』CBS・ソニー…  
SOJZ31~36（LP六枚組）、一九七三年発売、解説書十一頁。他。

序盤に他の芝居歌作品に共通する手が多くみられるのは、三味線の手を復曲した際に同じ曲種である芝居歌を参考にしたためである可能性もある。

曲尾の「譜例3」の旋律は、「謡物」の曲尾に頻出するため、本論文で「謡物終了定型」と名付ける<sup>37</sup>

譜例1「事業をなせし悔しさよ」の後半、芝居歌独特の手をもつて区切りをつけている部分。<sup>ことわざ</sup>

|   |   |    |
|---|---|----|
| 〇 | く | 何  |
| ニ | や | ニ  |
| 1 |   |    |
| ニ |   |    |
| 1 | ー | ー  |
| 何 |   |    |
| 何 |   |    |
| 1 |   |    |
| △ | サ | ー  |
| 3 |   |    |
| ニ |   | よニ |
| ス |   |    |
| 1 | ー | フー |
| 〇 |   |    |
| 何 |   |    |
| 1 |   |    |
| 何 |   |    |
| 何 |   |    |
| 何 |   |    |

譜例2「小合の手②」、極めて短い。

|   |   |   |
|---|---|---|
| △ | う | 何 |
| ー | く | ー |
| △ | う | ー |
| △ |   | し |
| ー |   | ず |
| △ |   | む |
| △ |   |   |
| ー |   |   |
| 4 |   |   |
| 3 |   |   |
| ー |   |   |
| ー |   |   |
| 3 |   |   |
| 〇 |   |   |
| 4 | や | 4 |
| △ | は | 4 |
| 4 |   |   |

譜例3「謡物終了定型」

|    |    |   |   |
|----|----|---|---|
| 5  |    | 2 | 3 |
| 〇  |    | い | 2 |
| 8  | ハ  | 1 | ふ |
| 7  |    | 大 | か |
| 9  | に  | 5 | 7 |
| 17 |    | 7 | と |
| 大  |    | ス |   |
| 15 |    | 1 | あ |
| 〇  | 六  | △ | も |
|    |    | 四 |   |
| 1  | 11 | 1 | へ |
| 〇  | け  | ー | ば |
| 何  |    | 何 |   |
| 何  | エ  | 何 |   |
| 〇  | り  | 五 | 1 |
| 五  | 1  | 〇 | う |
| 〇  |    | 〇 |   |
|    |    | ー |   |
|    |    | 〇 | せ |

<sup>37</sup> おおよそ一致していれば「謡物終了定型」とみなすこととする。

《善知鳥》詞章の比較（次頁まで）

| 地歌                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                           | 能                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                        |
|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>鹿を追う獵師は 山を見ずということあり<br/> 身の苦しさも 悲しさも 忘れ草の<br/> 追ひ鳥 高縄をさし引く潮の 末の松山<br/> 風荒れて 袖に波越す沖の石 または干<br/> 潟とて 海越しなりし里までも 千賀の<br/> 塩竈身を焦がす 小合の手① 報いをも忘<br/> れける 事業をなせし悔しさよ そもそ<br/> も善知鳥安方の鳥々に 品変わりたる殺<br/> 生の 中に無慙やなこの鳥の 愚かなる<br/> かな筑波嶺の 木々の梢に羽を敷き 波<br/> の浮き巢をも掛けよかし 平沙に子を生<br/> みて落雁の 儚や親は隠さんとすれども<br/> 善知鳥と呼ばれて 子は安方と答えけ<br/> る さても捕られやすかた 善知鳥 小合<br/> の手② 親は空にて血の涙を 降らせば<br/> 濡れじと菅蓑や 笠を傾けここかしこと<br/> 便りを求めて隠れ笠 隠れ蓑にもあらざ<br/> りし なお降り掛かる血の涙に 目も<br/> 紅に染め渡る 紅葉の橋の鵲か 小合<br/> の手③ 娑婆にては 善知鳥安方と見え<br/> しも 善知鳥安方と見えしも 冥途にし<br/> ては化鳥となり 罪人を追つ立て 追つ<br/> 立て追つ立て 小合の手④ 鉄の 嘴を<br/> 鳴らし羽を叩き 銅の爪を鋭ぎ立てて<br/> は 眼を掴んで肉むらを 叫ばんとすれ<br/> ども猛火の煙に 咽んで声をあげ得ぬは<br/> 鴛鴦を殺せし咎やらん 逃げんとすれど<br/> 立ち得ぬは 羽抜け鳥の報いとかや</p> | <p>（クセ）鹿を追う獵師は 山を見ずとい<br/> ふ事あり 身の苦しさも悲しさも 忘れ<br/> 草の追鳥 高縄をさし引く汐の 末の松<br/> 山風荒れて 袖に波こす沖の石 または<br/> 干潟とて 海こしなりし里までも 千賀<br/> の塩竈身を焦がす 報いをも忘れける事<br/> 業をなしし悔しさよ 打切 そもそも善<br/> 知鳥 やすかたのとりどりに 品かはり<br/> たる殺生の 中に無慙やな此鳥の 愚か<br/> なるかな嶺の 木々の梢にも羽を敷き波<br/> の浮巢をまかけよかし 平砂に子を生み<br/> て落雁の はかなや親は隠すとすれど<br/> とふと呼ばれて 子はやすかたと答へけ<br/> り さてぞ取られやすかた うとふ 力<br/> ケリ 親は空にて血の涙を 打切 親は<br/> 空にて血の涙を 降らせば濡れじと菅蓑<br/> や 笠を傾けここかしこの 便りを求め<br/> て隠笠 隠蓑にもあらざれば なほ降り<br/> かかる 血の涙に 目も紅に染み渡るは<br/> 紅葉の橋の鵲か 打切 娑婆にては 善<br/> 知鳥やすかたと見えしも 打切 善知鳥<br/> やすかたと見えしも 冥途にしては怪鳥<br/> となり罪人を追つ立て 鉄の 嘴を鳴ら<br/> し羽をたたき 銅の爪を磨ぎ立てては<br/> 眼をつかんで 肉を叫ばんとすれども猛<br/> 火の煙にむせんで声を あげ得ぬは鴛鴦<br/> を殺しし科やらん 逃げんとすれど 立<br/> ち得ぬは羽抜け鳥の報か</p> |

|                                                                                                                                                                                  |                                                                                                                                                                         |
|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p> <small>小合の手⑤</small> 善知鳥は却つて鷹となり 我<br/> は雉子とぞなりたりける 逃れ難なの狩<br/> り場の吹雪に 空も恐ろし地を走る 犬<br/> 鷹に責められて あら心善知鳥安方 安<br/> き隙なし身の苦しみを 助けて賜べや<br/> 御僧よ 助けて賜べや御僧と 言うかと<br/> 思えば失せにけり </p> | <p> 能 </p> <p> うとふは却つて鷹となり 我は雉とぞな<br/> りたりける 遁れがた野の狩場の吹雪に<br/> 空も恐ろし 地を走る 犬鷹に責められ<br/> て あら心うとふやすかた やすき隙な<br/> き身の苦しみを 助けてたべや 御僧助けて<br/> たべや 御僧といふかと思へば失せにけ<br/> り </p> |
|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

#### A・4 《関寺小町》

作曲…岸野次郎三

作詞…不詳

初出…『糸のしらべ』（一七五一）

能…《卒塔婆小町》《芦刈》《鸚鵡小町》

調絃…本調子↓三下り

#### （詞章）

思いい出いずれば懐いしや 人の恨みの積もり来て 何時いつの頃より浮かれ出で 頼む物には竹の  
杖 泣ないわつ笑わつ物狂いと 人は仇し野夢なれや 問ううは恨めし昔は小町 今は姿も恥はずか  
しや 誰たれは泊めねど関寺の 庵淋しき折り折りは 都の町に立ち出でて 行いき来きの袖そでに縫  
りつつ 憂きことの数々を見給えや人々 春は梢の花にのみ 心を寄せて短夜の 時鳥ほととぎす  
雪見草 浅沢の燕子花かきつばた 菖蒲あやめ 藻の葉も枯れ枯がれに 蛩も薄く 残る朝あしたの 名も広沢の月  
影 託かこち顔なる我が涙 落葉時雨に濡れ初めて 我ながら恥はずかしや （三下り） 百夜忍  
ぶの通い路は 雨の降る夜も降らぬ夜も まして雪霜厭いといなく 心尽しに身を砕く 一夜  
を待たで 死したりし 深草の少将の その怨念の積もり来て 斯かよう様に物を思えとや  
彼方あなたへ走り 此方こなたへ走り さらりささり さらさらさつと 恋い得ぬ時は 悪心また狂乱  
の心つきて声変わり けしからず見ゆれば すぐごと関寺の庵に帰る有様は 山田の畦  
の案山子かかしよの 秋果てたりや我が姿

能《卒塔婆小町》《芦刈》《鸚鵡小町》から詞章を引用している。まとまって引用している部分はなく、何か所にもわたり短い引用をしている点が特徴的である。

能《関寺小町》からの引用がないのにもかかわらず《関寺小町》という曲名であるのは、当時の歌舞伎において、小野小町の狂乱物は関寺周辺を舞台とする習慣があり<sup>38</sup>、この曲がそういった演目中使用されていたためと考えられる。地歌《関寺小町》の主題となっているのは、年老いた小野小町の姿と深草の少将の怨念であり、詞章の内容的にも引用している量からも、《卒塔婆小町》とのかかわりが最も深い。

傍線……で示した部分は独吟である。

<sup>38</sup> 松崎仁『元禄歌舞伎研究』東京…東京大学出版会、一九七九年、四三頁。



「憂きことの数々を」から「三下り」に転調するまで、「大ノリ風」となる。「我ながら恥ずかしや」の後、「三下り」に転調し緩徐になるが、これは、内容が「小野小町の姿」から、「深草の少将の怨念」に変わる部分に当たる。その後「さらりさらり」から雰囲気が変わり、「悪心また」から「けしからず見ゆれば」まで「中ノリ風」となる。ここは、能《卒塔婆小町》では「平ノリ」である。曲尾は、「謡物終了定型」が途中から変化した旋律となっている（譜例1）。

他のA作品に多い、「情緒的な部分↓ノリ型分の部分」という構成を二回繰り返すような形であり、他のA作品とは趣が異なる。

譜例1 曲尾の旋律。前半のみ「謡物終了定型」となっている。

|    |    |    |
|----|----|----|
| 2  | 六  | 3  |
| わー | は五 | シ3 |
| ス  | 7  | 3  |
| が  | 7  | ニ  |
| 5  | 1  | 一  |
| 六  | た1 | 〇  |
| す  | 四  | のー |
| 5  | 〇  | 〇  |
| 7  | 〇  | 〇  |
| 1  | 1  | 価  |
| が1 | り1 | 〇  |
| 四  | 一  | 一  |
| アー | や  | 〇  |
| た1 | 四  | 四  |
| 〇  | 一  | 五  |
| 五1 | 四  | 六  |
| 〇  | 1  | 〇  |

ここから変化する。

ここから「謡物終了定型」

《関寺小町》詞章の比較

| 地歌                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                           | 能                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                    |
|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>             思い出<small>い</small>ずれば懷しや 人の恨みの積もり<br/>             来て 何時<small>いつ</small>の頃より浮かれ出で 頼む物<br/>             には竹の杖 泣<small>な</small>いつ笑<small>わら</small>つ物狂いと 人は<br/>             仇し野夢なれや 問うは恨めし昔は小町<br/>             今は姿も恥<small>は</small>ずかしや 誰<small>たれ</small>は泊めねど関寺<br/>             の 庵淋しき折り折りは 都の町に立ち<br/>             出でて 行き来<small>き</small>の袖に縋<small>す</small>りつつ 憂きこ<br/>             との数々を見給えや人々 春は梢の花に<br/>             のみ 心を寄せて短夜の 時鳥 雪見草<br/>             浅沢の燕子花 菖蒲 藻の葉も枯れ枯れ<br/>             に 蛩も薄く 残る朝<small>あした</small>の 名も広沢の月<br/>             影 託<small>かこ</small>ち顔なる我が涙 落葉時雨に濡れ<br/>             初めて 我ながら恥<small>そ</small>ずかしや (三下り)<br/>             百夜忍ぶの通い路は 雨の降る夜も降ら<br/>             ぬ夜も まして雪霜厭<small>いと</small>いなく 心尽しに<br/>             身を砕く 一夜を待たで 死したりし<br/>             深草の少将の その怨念の積もり来て<br/>             斯<small>か</small>様に物を思えとや 彼方へ走り 此方<br/>             へ走り さらりさらり さらさらさつと<br/>             恋い得ぬ時は 悪心また狂乱の心つきて<br/>             声変わり けしからず見ゆれば すごす<br/>             ごと関寺の庵に帰る有様は 山田の畦の<br/>             案山子<small>か</small>よの 秋果てたりや我が姿           </p> | <p>             《芦刈》(ロンギの途中より) 難波女の 難<br/>             波女の かづく袖笠ひじ笠の 雨の芦辺<br/>             も 乱るるかたを波 あなたへざらりこ<br/>             なたへざらりさらざつと 風のあげ<br/>             たる古簾 つれづれもなき心面白や(後<br/>             略)<br/>             《卒塔婆小町》(キリの途中より)<br/>             胸苦しやと悲しみて 一夜をまたで死し<br/>             たりし 深草の少将の その怨念がつき<br/>             そいで かように物には狂わするぞや<br/>             これにつけても後の世を (後略)<br/>             (ロンギの途中より) 今は路頭にさぞらい<br/>             往き来の人に物を乞う 乞い得ぬ時は悪<br/>             心 また狂乱の心つきて 声かわりけし<br/>             からず (後略)<br/>             《鸚鵡小町》(シテ上歌の途中より)<br/>             昔を恋ふる忍寝の 夢は寢覚の長き夜を<br/>             飽きてはてたりな我が心 飽きてはてた<br/>             りな我が心 (後略)           </p> |

## A・5 《新道成寺》

作曲…二世杵屋長五郎・芳沢金七

作詞…不詳

初出…『歌舞伎事始』（一七六二）、歌本への初出は『新大成系のしらべ』（一七八一）<sup>39</sup>

能…《道成寺》《三井寺》

調絃…二上り

### （詞章）

花の外には松ばかり 花の外には松ばかり 暮れ初めて鐘や響くらん 暮れ初めて鐘や響くらん 響くらん 「合の手①」 鐘に恨みは数々ござる 初夜の鐘をつく時は 諸行無常と響くなり 後夜の鐘をつく時は 是生滅法と響くなり 晨朝の響きには生滅滅已 入相は寂滅為樂と響けども 我も五障の雲晴れて 真如の月を眺め明かさん 道成卿は承りて初めて伽藍橘の 道成興業の寺なればとて 道成寺とは名づけたり 「小合の手」 山寺の春の夕暮れ来て見れば 入相の鐘に花や散るらん 入相の鐘に花や散るらん 「合の手②」 さる程にさる程に 寺々の鐘 月落ち鳥啼いて 霜雪天に 満ち潮ほどなく日高の寺の江村の漁火も愁いに対し 人々眠ればよき隙ぞとて 立ち舞う様に狙い寄って 撞かんとせしが 思えばこの鐘怨めしやとぞ 龍頭に手を掛け飛ぶよと見えしが 引き被いてぞ失せにける

冒頭と「道成卿は」以降は、能《道成寺》のシテ次第と「乱拍子」の後から、「合の手①」の後から「真如の月を眺め明かさん」までは能《三井寺》の「鐘の段」から詞章を引用している。

歌本への初出は『新大成系のしらべ』（一七八一）とみられているが、『歌舞伎事始』（一七六二）巻五の「古人小歌作者」の項に、『新道成寺』の作曲者として、「二代目杵屋長五郎」と「芳沢金七」の名前があり、作曲者が同じでありながら全く別の曲とは考えづらく、同じ曲か、原型となった曲だと考えている。ただ、「古人小歌作者」の項では、共作の場合、「松風 あを葉

杵屋長五郎  
薦山四郎兵衛

「兩人作」のように、同じ行に表記しているのに対し、『新道成

<sup>39</sup> 久保田敏子『地歌箏曲研究』前掲、楽曲編上では、『新大成系のしらべ』を初出としている（二二九頁）。

「合の手①」の位置は、能で「乱拍子」が舞われる部分にあたる。「道成寺」とは名づけたりの部分で「オトシ」が奏され（譜例1）、その後「小合の手①」に入り一つの区切りといえる部分となるが、能では「山寺の」の後に「急ノ舞」が舞われる。器楽部分の挿入されている位置が地歌と能で一句ずれているのは、能の通りに区切ると、文章の意味が途中で切れてしまうためとみることができる。

「合の手②」の位置は、能では地謡からシテ謡に変わる部分ではあるが、大きな区切りとはいえない。その後「さるほどに」以降曲尾まで「大ノリ風」となり、能ではその少し前の「入相の鐘に花ぞ散りける」から「大ノリ」となる。

譜例 1 「道成寺とは名づけたり」の中で奏される「オトシ」



《新道成寺》詞章の比較

| 地歌                                                                                                                                                                                                                        | 能                                                                                                                                                                                                                                                     |
|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>花の外には松ばかり 花の外には松ばかり<br/>         暮れ初めて鐘や響くらん 暮れ初めて鐘や響くらん<br/>         合の手①</p>                                                                                                                                         | <p>《道成寺》（シテ次第下歌）花の外には松ばかり花の外には松ばかり 暮れそめて鐘や響くらん 花の外には松ばかり 暮れそめて鐘や響くらん<br/>         乱拍子</p>                                                                                                                                                             |
| <p>鐘に恨みは数々ござる 初夜の鐘をつく時は 諸行無常と響くなり 後夜の鐘をつく時は 是生滅法と響くなり 晨朝の響きには生滅滅已 入相は寂滅為樂と響けども 我も五障の雲晴れて 真如の月を眺め明かさん</p>                                                                                                                  | <p>《三井寺》（鐘の段）ましてや拙なき狂女なれば 許し給へや人々よ 煩惱の夢を覚ますや 法の声も静かに先初夜の鐘を撞く時は 諸行無常と響くなり 後夜の鐘を撞く時は 是生滅法と響くなり 晨朝の響は 生滅滅已 入相は 寂滅為樂と響きて菩提の道の鐘の声 月も数添ひて 百八煩惱の眠りの 驚く夢の夜の迷も はや盡きたりや後夜の鐘に 我も五障の雲晴れて 真如の月の影を眺め居りて明かさん</p>                                                     |
| <p>道成卿は承りて 初めて伽藍橋の 道成興業の寺なればとて 道成寺とは名づけたり 小合の手① 山寺の春の夕暮れ来て見れば 入相の鐘に花や散るらん 入相の鐘に花や散るらん 合の手② さる程に さる程に 寺々の鐘 月落ち鳥啼いて霜雪天に 満ち潮ほどなく日高の寺の江村の漁火も愁いに対し 人々眠ればよき隙そとて 立ち舞う様狙い寄って 撞かんとせしが 思えばこの鐘怨めしやとぞ 龍頭に手を掛け飛ぶよと見えしが 引き被いてぞ失せにける</p> | <p>《道成寺》（乱拍子の後）道成の卿 承り始めて伽藍橋の道成興行の寺なればとて 道成寺とは 名づけたりや 山寺のや 急ノ舞 春の夕ぐれ 来てみれば 入相の鐘に花ぞ散りける 花ぞちりける花ぞ散りける さるほどにさるほどに 寺々の鐘 月落ち鳥鳴いて霜雪天に 満汐ほどなく日高の寺の 江村の漁火 愁ひに 対して人々眠ればよき隙そと 立舞ふ様に狙ひよりて 撞かんとせしが 思へば 此鐘恨めしやとて 龍頭に手をかけ飛ぶとぞみえし ひきかづきてぞ失せにける<br/>         （後略）</p> |

## A・6 《山姥》

作曲…沢野九郎兵衛

作詞…紀海音

初出…『琴線和歌の糸』（一七五二）

能…《山姥》《邯鄲》《夕顔》

調絃…三下り↓本調子↓三下り

### （詞章）

山の端に 心も知らで行く月の 上の空<sup>うわ</sup>にて影や絶えなん 「合の手①」 見しも聞きしも花  
心 色をも香をも捨てざりし 二人添寝の長枕 こち寄れ枕 身に添い初めし移り香の  
憎うはないもの そちの心が変わらねば こちの木枕一筋に これ此処に 畳枕や文枕  
口に任せて塗枕 後や先なる言葉のはしを 括り枕のない人さんが 縁か因果か可愛らし  
「合の手②」 こなん思やこそ 四つの太鼓を合図に来るに 宵は何処<sup>いずく</sup>に隠れて抜けて 鐘  
の鳴る時今来た顔で よう知ると思わんせ 憎い仕方と思えども 顔見りや愛し ほんに  
浮世が儘ならば 嘘つく男が仲良から 恨みがちなる神仏（本調子）「合の手③」 待つ宵  
は 三味線弾いて辛気節 泣いて明かせし後朝<sup>きぬさぬ</sup>の 袖よ袂よ恨み侘び 末はどうなる事じ  
ややら よいやさよいやさ そっちに隣のない操 唯一筋に糸巻の 締め括りせし合の手  
の 合うときばかり引き寄せて よいやさよいやさ 愛し可愛は皆嘘の皮 罰当れとは誓  
いてし よいやさよいやさ ぴんと拗ねては見すれども つい謝って張り弱く 何故に  
女子<sup>おなご</sup>には生まれたぞ よいやさよいやさ よしやその中徒に（三下り）「合の手④」 山廻  
り 一樹の陰や一河の流れ 皆これ他生の縁ぞかし まして我が名を夕月の 浮き世を渡  
る一節も 狂言綺語<sup>きぎょ</sup>の道すぐに 讃仏乗<sup>じょうぶ</sup>の縁ぞかし あら御名<sup>おん</sup>残惜しや 暇<sup>いとま</sup>申して帰る  
山の「合の手⑤」 山は元山 水は元水 塵泥<sup>ちりひじ</sup>積もって 山姥となる 春は花咲き紅葉も  
色よく 夏かと思えば雪も降りて 四季折々を目の前に見て 万木千草<sup>いちじく</sup>一日に花咲いて  
面白や面白や 鬼女の有様 見るや見るやの 峰に駆けり 谷に響きて 今迄ここに あ  
るよと見えしが 山廻り山廻り 山また山に山廻りして 行方<sup>ゆくえ</sup>もしらずなりにけり

能《山姥》の「カケリ」の前から曲尾まで、能《邯鄲》の後半の一部、能《夕顔》のシ  
テのサシ謡から詞章を引用している。

冒頭の「山の端に 心も知らで行く月の 上の空にて影や絶えなん」は、能《夕顔》の前シテサシ謡の冒頭、「見しも聞きしも花心 色をも香をも捨てざりし」は前シテサシ謡末尾の詞章である。能の詞章が中略されている部分に「合の手①」が挿入されている形であり、この構成は珍しい。その後、地歌独自の「枕尽し」の詞章となる。調絃が「本調子」の部分は伊勢音頭の詞章であり<sup>40</sup>、「糸巻」「合の手」などの三味線に関した言葉を交えながら、女性の心情を歌っている。その後、詞章は能《山姥》の「カケリ」の前からの引用となるが、途中、「春は花咲き」より「面白や面白や」までが、能《邯鄲》の詞章と入れ替わっている。この詞章は同じA作品の《邯鄲》にも引用されているが、比較すると、詞章が一致している部分は旋律もほぼ一致していることが分かる（譜例1）。本来の能《山姥》の詞章と比較すると、どちらも四季をめぐる詞章となっていることが分かるが、なぜこの部分を《邯鄲》の詞章と入れ替えたのかは分からない。

情緒的な曲調で始まり、伊勢音頭の部分で「本調子」となり、特定の音型の繰り返しながら見られる「音頭物」<sup>41</sup>風の曲調となる（譜例2）。その後、能からの引用となる部分から「三下り」に戻り、「山は元山 水は元水」より、「大ノリ風」となるが、能《山姥》《邯鄲》どちらも引用されている部分は「大ノリ」である。曲尾は、「謡物終了定型」であるが旋律が若干異なっている（譜例3）。A作品に多く見られる、「情緒的な部分↓ノリ型風の部分」という構成の間に、「音頭物風」の部分を入れた形となっている。

<sup>40</sup> 久保田敏子『地歌箏曲研究』前掲、楽曲編下、二九八頁。

<sup>41</sup> 「京音頭」「伊勢音頭」の歌詞や旋律を引用した作品を指す。一定の旋律の反復がみられるのが一つの特徴である（平野健次・上参郷祐康・蒲生郷昭監修『日本音楽大事典』東京・平凡社、第三刷、一九九六年、五三頁）。

譜例1 《山姥》と《邯鄲》の詞章が一致している部分の比較（右の行が《山姥》、左の行が《邯鄲》）。旋律もほぼ一致している。

| 《邯鄲》 |     | 《山姥》 |     |
|------|-----|------|-----|
| ○    | ○   | ○    | ○   |
| 二は二  | 二は二 | 二は二  | 二は二 |
| ○    | ○   | ○    | ○   |
| 五る五  | 五る五 | 五る五  | 五る五 |
| 二は二  | 二は二 | 二は二  | 二は二 |
| ○は2  | ○は2 | ○は2  | ○は2 |
| 5    | 5   | 5    | 5   |
| 1な2  | 1な2 | 1な2  | 1な2 |
| ウ2   | ウ2  | ウ2   | ウ2  |
| 1さ1  | 1さ1 | 1さ1  | 1さ1 |
| 思い1  | 思い1 | 思い1  | 思い1 |
| 一てー  | 一てー | 一てー  | 一てー |
| 五も3  | 五も3 | 五も3  | 五も3 |
| 3み3  | 3み3 | 3み3  | 3み3 |
| 二ぢ二  | 二ぢ二 | 二ぢ二  | 二ぢ二 |
| 一もー  | 一もー | 一もー  | 一もー |
| 四    | 四   | 四    | 四   |
| △い4  | △い4 | △い4  | △い4 |
| 4*   | 4*  | 4*   | 4*  |
| 3ろ3  | 3ろ3 | 3ろ3  | 3ろ3 |
| 7こ7  | 7こ7 | 7こ7  | 7こ7 |

|     |     |     |     |
|-----|-----|-----|-----|
| 3く3 | 3く3 | 3く3 | 3く3 |
| 一な1 | 一な1 | 一な1 | 一な1 |
| 三つ三 | 三つ三 | 三つ三 | 三つ三 |
| 一か三 | 一か三 | 一か三 | 一か三 |
| 三   | 三   | 三   | 三   |
| ゝと三 | ゝと三 | ゝと三 | ゝと三 |
| 1お1 | 1お1 | 1お1 | 1お1 |
| 四   | 四   | 四   | 四   |
| しも1 | しも1 | しも1 | しも1 |
| 思   | 思   | 思   | 思   |
| 一えー | 一えー | 一えー | 一えー |
| 四ばー | 四ばー | 四ばー | 四ばー |
| ○   | ○   | ○   | ○   |
| 五ゆ五 | 五ゆ五 | 五ゆ五 | 五ゆ五 |
| 二き二 | 二き二 | 二き二 | 二き二 |
| 一もー | 一もー | 一もー | 一もー |
| 二ふ二 | 二ふ二 | 二ふ二 | 二ふ二 |
| 五り五 | 五り五 | 五り五 | 五り五 |
| 二て二 | 二て二 | 二て二 | 二て二 |

|      |      |      |      |
|------|------|------|------|
| ○    | ○    | ○    | ○    |
| 5し5  | 5し5  | 5し5  | 5し5  |
| 7き7  | 7き7  | 7き7  | 7き7  |
| ハおハ  | ハおハ  | ハおハ  | ハおハ  |
| 七リ七  | 七リ七  | 七リ七  | 七リ七  |
| 五お五  | 五お五  | 五お五  | 五お五  |
| 4*   | 4*   | 4*   | 4*   |
| 3の3  | 3の3  | 3の3  | 3の3  |
| 二ま二  | 二ま二  | 二ま二  | 二ま二  |
| 一にー  | 一にー  | 一にー  | 一にー  |
| 四    | 四    | 四    | 四    |
| △い4  | △い4  | △い4  | △い4  |
| 4*   | 4*   | 4*   | 4*   |
| 3ち3  | 3ち3  | 3ち3  | 3ち3  |
| △じ3  | △じ3  | △じ3  | △じ3  |
| 1スフ1 | 1スフ1 | 1スフ1 | 1スフ1 |
| 二に二  | 二に二  | 二に二  | 二に二  |
| ○は3  | ○は3  | ○は3  | ○は3  |
| 二な二  | 二な二  | 二な二  | 二な二  |
| 3さ3  | 3さ3  | 3さ3  | 3さ3  |
| 7さ7  | 7さ7  | 7さ7  | 7さ7  |

|      |      |      |      |
|------|------|------|------|
| ○    | ○    | ○    | ○    |
| ○は四  | ○は四  | ○は四  | ○は四  |
| 二ん二  | 二ん二  | 二ん二  | 二ん二  |
| ○ぼ二  | ○ぼ二  | ○ぼ二  | ○ぼ二  |
| 一くー  | 一くー  | 一くー  | 一くー  |
| △せー  | △せー  | △せー  | △せー  |
| 1ス   | 1ス   | 1ス   | 1ス   |
| 二ん二  | 二ん二  | 二ん二  | 二ん二  |
| ゝそ二  | ゝそ二  | ゝそ二  | ゝそ二  |
| 一ろー  | 一ろー  | 一ろー  | 一ろー  |
| △い4  | △い4  | △い4  | △い4  |
| 4*   | 4*   | 4*   | 4*   |
| 3ち3  | 3ち3  | 3ち3  | 3ち3  |
| △じ3  | △じ3  | △じ3  | △じ3  |
| 1スフ1 | 1スフ1 | 1スフ1 | 1スフ1 |
| 二に二  | 二に二  | 二に二  | 二に二  |
| ○は3  | ○は3  | ○は3  | ○は3  |
| 二な二  | 二な二  | 二な二  | 二な二  |
| 3さ3  | 3さ3  | 3さ3  | 3さ3  |
| 7さ7  | 7さ7  | 7さ7  | 7さ7  |

|     |     |     |     |
|-----|-----|-----|-----|
| 二て二 | 3て3 | 二て二 | 3て3 |
| 五   | 五   | 五   | 五   |
| シお3 | シお3 | シお3 | シお3 |
| 3も3 | 3も3 | 3も3 | 3も3 |
| ○   | ○   | ○   | ○   |
| ヲ1  | ヲ1  | ヲ1  | ヲ1  |
| 二し二 | 二し二 | 二し二 | 二し二 |
| 1ろ1 | 1ろ1 | 1ろ1 | 1ろ1 |
| 二や二 | 二や二 | 二や二 | 二や二 |
| ○   | ○   | ○   | ○   |
| 五   | 五   | 五   | 五   |
| ス   | ス   | ス   | ス   |
| シお3 | シお3 | シお3 | シお3 |
| 3も3 | 3も3 | 3も3 | 3も3 |
| △ろ二 | △ろ二 | △ろ二 | △ろ二 |
| 1ス  | 1ス  | 1ス  | 1ス  |
| 二   | 二   | 二   | 二   |
| 一   | 一   | 一   | 一   |
| ○やー | 7合  | ○やー | 7合  |

譜例2 本調子に転調してからみられる、特定の音型の反復（二例）。

|   |   |   |   |   |   |   |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 五 | セ | ○ | 一 | 五 | セ |
|---|---|---|---|---|---|---|

|   |   |   |   |   |   |   |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 一 | 五 | セ | ○ | 一 | 五 | セ |
|---|---|---|---|---|---|---|



|                |    |                   |    |
|----------------|----|-------------------|----|
| 六 <sub>中</sub> |    | 2                 | ゆ2 |
|                | イ5 |                   |    |
| ○              | イ六 | 1                 | く1 |
|                |    |                   |    |
| 1              | イ1 | 六 <sub>中</sub> 之六 |    |
|                |    | 5                 |    |
| ○              | け1 | 7                 | も7 |
|                |    |                   |    |
| 四              |    | 1                 |    |
| シ              |    |                   | し1 |
| ○              |    | 四                 |    |
|                | エー |                   |    |
| ○              | り1 | 1                 | れ1 |
|                |    | 思 <sub>エ</sub> 四  |    |
| ○              |    | 一                 | ずー |
|                |    |                   |    |
| 五1             |    | ニ                 | ウニ |
|                |    |                   | ウー |
| ○              |    | 価                 | ウニ |
|                |    |                   | な価 |
| ○              |    | 一                 |    |
|                |    |                   | りー |
| ○              |    | ○                 |    |
|                |    |                   |    |
|                |    | 5                 |    |
|                |    | シ                 |    |
|                |    | 8+                |    |
|                |    |                   |    |
|                |    | 7                 |    |
|                |    |                   |    |
|                |    | ○                 | に5 |
|                |    |                   | イ7 |

《山姥》詞章の比較

| 地歌                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                 | 能                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                          |
|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>山の端に 心も知らで行く月の 上の空<br/>         にて影や絶えなん <b>合の手①</b> 見しも聞き<br/>         しも花心 色をも香をも捨てざりし<br/>         (中略)</p>                                                                                                                                                                                                                                                                                                  | <p>《夕顔》(シテサシ謡) 山の端の 心も知<br/>         らで行く月は 上の空にて影や絶えなん<br/>         (中略) 書き置きし世は隔たれど 見し<br/>         も聞きしも執心の 色をも香をも捨てざ<br/>         りし</p>                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                               |
| <p>山廻り 一樹の陰や一河の流れ 皆これ<br/>         他生の縁ぞかし まして我が名を夕月の<br/>         浮き世を渡る一節も 狂言綺語の道すぐ<br/>         に 讃仏乗の縁ぞかし あら御名残惜<br/>         しや 暇申して帰る山の 山は元山<br/>         水は元水 塵泥積もつて 山姥となる<br/>         春は花咲き紅葉も色よく 夏かと思えば<br/>         雪も降りて 四季折々を目の前に見て<br/>         万木千草一日に花咲いて 面白や面白や<br/>         鬼女の有様 見るや見るやの 峰に駆け<br/>         り 谷に響きて 今迄ここに あるよと<br/>         見えしが 山廻り山廻り 山また山に山<br/>         廻りして 行方もしらずなりにけり</p> | <p>《山姥》(カケリの前より) あしびきの<br/>         山廻り <b>カケリ</b> 一樹の蔭一河の流れ 皆<br/>         これ他生の縁ぞかし ましてや我が名を<br/>         夕月の 浮世を廻る一節も 狂言綺語の<br/>         道直ぐに 讃仏乗の因ぞかし あら御名<br/>         残惜しや 暇申して 帰る山の 春は梢<br/>         に 咲くかと待ちし 花を尋ねて 山廻<br/>         り 秋はさやけき影を尋ねて 月見る方<br/>         にと山廻り 冬は冴え行く 時雨の雲の<br/>         雪を誘ひて山廻り 廻り廻りて輪廻を離<br/>         れぬ 妄執の雲の塵積もつて 山姥とな<br/>         れる 鬼女が有様見るや見るやと 今ま<br/>         でここに あるよと見えしが 山また山<br/>         に 山廻り 山また山に山廻りして 行<br/>         方も知らずなりにけり</p> |
| <p>《邯鄲》(後半の途中より) 春の花咲けば<br/>         紅葉も色濃く 夏かと思えば 雪も降り<br/>         つつ 四季おりふしは目の前にて 春夏<br/>         秋冬万木千草も 一時に花咲けり 面白<br/>         や 不思議やな (後略)</p>                                                                                                                                                                                                                                                              |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                            |

A・7 《邯鄲》

作曲…不詳

作詞…不詳

初出…『大成系の節』（一七九四）

能…《邯鄲》

調絃…二上り↓三下り

（詞章）

国土安全長久の 栄華もいや増しに なお喜びは勝り草の 菊の盃とりどりに いざや吞もうよ 廻れや盃の流れは菊水の 流れに引かれて疾く過ぐれば 手まず遮る菊衣の花の袂を翻して 差すも引くも光なれや 盃の蔭の廻る空ぞ久しき「小合の手①」 我が宿の我が宿の 菊の白露今日ごとくに 幾世積もりて淵となりぬる 世も尽きじ世も尽きじ薬の水も泉なれや 汲めども汲めども いや増しに出る菊水を 飲めば甘露もかくやらんと 心も晴れやかに飛び立つばかり 有明の夜昼ともなき楽しみは 栄華にも栄耀にも実にこの上やあるべき「合の手①」（三下り） いままでか栄華の春は常磐にて なお幾久し有明の 月人男の舞なれや 雲の羽袖を重ねつつ 喜びの歌を 歌うよもすがら 日はまた出でて 明らけくなりて 夜かと思えば昼になり 昼かと思えば月また清けし 春の花咲き紅葉も色濃く 夏かと思えば雪も降りて 四季折々を目の前に見て 万木千草一日に花咲き 面白や面白や「合の手②」 なお何時までも生きの松 栄華の程も尽きじ尽きせじ 春夏秋冬眺めは同じ 月も雪も花も紅葉も 栄ゆる末こそ久しけれ

作者不詳で、長歌物に分類されることが多いが、曲調から芝居歌、もしくは芝居歌形式で作曲された作品と考えたため、A作品に分類した。

冒頭から終盤の「合の手②」の前まで、能《邯鄲》の後半部分を広範囲にわたりほぼそのまま引用している。能では、この後盧生が目覚めるという筋書きであるが、地歌では「合の手②」以降の地歌独自の詞章により、栄華が久しく続くという内容に変化している。

冒頭「国土安全長久の」は、能ではシテとワキヅレの問答の後の地謡の謡いだしの句である。「小合の手①」は、地謡から子方の謡となる変わり目に挿入されている。「合の手①」は、能において「楽」という囃子が演奏される部分に挿入されており、「合の手②」は、能からの引用が終わる部分に挿入されている。

「我が宿の」より「平ノリ風」となるが、ここは能でも「平ノリ」である。「歌うよもすがら」から雰囲気が変わり「大ノリ風」となるが、能においてもここから「大ノリ」となる。

A作品に分類した作品の中でも、特に能への強い意識が感じられる作品である。A作品は全曲を通して調絃が「三下り」の作品が多いが、この曲は「二上り↓三下り」となっており、「三下り」に転調して以降は、「ノリ型風」の部分をもつなど、他のA作品の曲調と類似している部分が多い。

傍線~~~~~の部分、A作品に分類した《山姥》にも引用されているが、比較すると、詞章だけでなく、旋律もおおまかに一致している（《山姥》の「譜例1」を参照）。曲尾は「謡物終了定型」である。

《邯鄲》詞章の比較

地歌

国土安全長久の 栄華もいや増しに な  
 お喜びは勝り草の 菊の盃とりどりに  
 いざや呑もうよ 廻れや盃の流れば菊水  
 の 流れに引かれて疾く過ぐれば 手ま  
 ず遮る菊衣の 花の袂を翻して 差す  
 も引くも光なれや 盃の蔭の廻る空ぞ久  
 しき **小合の手①** 我が宿の我が宿の 菊  
 の白露今日ごとに 幾世積もりて淵とな  
 りぬる 世も尽きじ世も尽きじ 葉の水  
 も泉なれや 汲めども汲めども いや増  
 しに出る菊水を 飲めば甘露もかくやら  
 んと 心も晴れやかに飛び立つばかり  
 有明の夜昼ともなき楽しみは 栄華にも  
 栄耀にも 実にこの上やあるべき **合の**  
**手** (三下り) いままでか栄華の春は常磐  
 にて なお幾久し有明の 月人男の舞  
 なれや 雲の羽袖を重ねつつ 喜びの歌  
 を 歌うよもすがら 日はまた出でて  
 明らけくなりて 夜かと思えば昼になり  
 昼かと思えば月また清けし 春の花咲き  
 紅葉も色濃く 夏かと思えば雪も降りて  
 四季折々を目の前に見て 万木千草一日  
 に花咲き 面白や面白や **合の手②** な  
 お何時までも生きの松 栄華の程も尽き  
 じ尽きせじ 春夏秋冬眺めは同じ 月も  
 雪も花も紅葉も 栄ゆる末こそ久しけれ

能 (後半、問答の後の地謡より)

国土安全長久の 国土安全長久の 栄華  
 もいやましに猶喜びはまさり草の 菊の  
 盃 とりどりにいざや飲もうよ 廻れや  
 盃の 廻れや盃の 流れは菊水の流に  
 引かれてとく過ぐれば 手まつさえぎる  
 菊衣の 花の袂をひるがえして指すも引  
 くも光なれや 盃の影の 廻るそらぞ久  
 しき 我が宿の 我が宿の 菊の白露今  
 日ごとに 幾代積りて淵となるらん よ  
 もつきじよもつきじ 葉の水も泉なれば  
 汲めども汲めどもいやましに出づる菊水  
 を 飲めば甘露もかくやらんと 心も晴  
 れやかに 飛び立つばかり 有明の夜昼  
 となき楽しみは 栄華にも栄耀にもげに  
 此上やあるべき **楽** いままでぞ 栄華の  
 春も 常磐にて 猶幾久し有明の月 月  
 人男の舞なれば 雲の羽袖を重ねつつ  
 喜びの歌を 謡う夜もすがら 謡う夜も  
 すがら 日はまた出でて 明きらけくな  
 りて 夜かと思えば 昼になり 昼かと  
 思えば 月またさやけし 春の花咲けば  
 紅葉も色濃く 夏かと思えば 雪も降り  
 て 四季折々は目の前にて 春夏秋冬万  
 木千草も 一日に花咲けり 面白や 不  
 思議やな かくて時過ぎ頃去れば かく  
 て時過ぎ頃去れば 五十年の栄華も尽き  
 て 真は夢の内なれば 皆消え消えと  
 失せ果てて ありつる邯鄲の枕の上に眠  
 りの夢は 覚めにけり

## A・8 《海女》

作曲…不詳

作詞…不詳

初出…『大成系の節』（一七九四）

能《海人》

調絃…三下り

### （詞章）

よしや行方は何処いずくとも 定めなき世や浮雲の 晴れぬ心は黒髪の 乱れて今朝は物をこそ  
思い重なれ八重やえ一重ひとえ 九重ここのえの空ほのぼのと 明石の浦の浦波に 立ち隔て来し故郷ふるさとの恋し  
や 今更に花も紅葉も月雪も 馴れし都を如何でかは 浮かれ出でなん事もや何時と 嵐  
の風に誘われて 夢か現うつか辿り行く 「合の手①」 迷い狂いて讃岐潟 しどけ形振り志度  
の浦 万戸將軍と云いし方 面向めんこう不背ふはいの珠を竜宮へ取られしが 大將軍は御身をやづ褻し 賤  
しき海女の磯枕 妹背言葉も末かけて 女の命捨小舟すておふね 一つの利剣を抜きもって 彼の海  
底に飛び入れば 空は一つに雲の波 煙の波をしのぎつつ 海漫々と分け入りて 直下と  
見れども底もなく 取り得ん事こそ不定なり 我は別れてはや行く水の 波の彼方あなたに我が  
子やあるらんと 父大臣もおはすらん 涙にくれて居たりしが また思ひ切りて手を合わ  
せ 南無や志度寺の観音かんのん薩埵さつたの 力を添えてたび給えとて 大悲の利剣を額ひまにあて 龍宮  
の中へ飛び入れば 左右へぱつとぞ退いたりける 「合の手②」 その隙ひまに宝珠を盗み取つ  
て 逃げんとすれど 守護神追つかく 予て企かねみし事なれば 持ちたる剣つるぎを取りなおし  
乳ちの下をかき切り 珠を押し込み 剣つるぎをすててぞ伏したりける 龍宮の慣なひに死人を忌め  
ば あたりに近づく悪龍なし 約束の縄を動かせば 人々喜び引き上げたりけり 珠は知  
らず海女人は海上に浮かび出でたり

作曲者は不詳だが、曲中「同音合わせ撥の連続」などの芝居歌独特の手が奏される（「合の手②」、譜例1）点などから、歌舞伎に用いられていた作品と考え、A作品に分類した。  
能《海人》の「玉の段」より詞章を引用している。冒頭から「女の命捨小舟」までは地歌独自の詞章だが、能《海人》でシテが語る物語のおおまかな筋書きが辿れる内容となっている。傍線 部は「玉の段」の詞章が変化していて、不気味な海底の描写が省略され、

海女の「これで我が子と房前的大臣と会えなくなってしまうかもしれない」という悲しみと躊躇が強調されている。

しっとりとした曲調で始まり、「玉の段」を引用している「一つの利剣を」から「平ノリ風」となり、「我は別れて早ゆく水の」より再び情緒的になる。この部分は「玉の段」でも調子を抑え軽く謡う。その後「玉の段」では、「また思い切りて手を合わせ」より「ツヨ吟」に変わるが、地歌でもここから曲調が変化する。「南無や志度寺の」より「中ノリ風」となるが、能においても同じ箇所から「中ノリ」となる。その後「玉の段」では「ヨワ吟」に戻る部分となる「人々喜び引き上げたりけり」を切っ掛けに緩急がつく。曲尾は、途中から「謡物終了定型」となっている（譜例2）。

曲の構成、伝承されてきたハコビ双方に、能の曲調への意識が強く感じられる作品である。

譜例1 「合の手②」にみられる「同音合わせ撥の連続」。

|    |     |
|----|-----|
| チ  | -7  |
| ノ  |     |
| 。  |     |
| 。  | (5) |
| -7 |     |
| -7 |     |
| 。  |     |
| 。  |     |
| -7 |     |
| 。  |     |
| -7 |     |
| 。  |     |
| 7  |     |

譜例2 曲尾の旋律。途中から「謡物終了定型」となっている。

|   |   |   |   |   |
|---|---|---|---|---|
| 。 | 。 | い | 3 | 3 |
| 。 | 。 | 。 | 。 | 。 |
|   |   | 一 | 乙 | ニ |
|   |   | 。 | 。 | 一 |
|   |   | 5 | 5 | 5 |
|   |   | 8 | 8 | 8 |
|   |   | 7 | 7 | 7 |
|   |   | 。 | 5 | 5 |
|   |   | 六 | 六 | 六 |
|   |   | 。 | 六 | 5 |
|   |   | 1 | 1 | 1 |
|   |   | 。 | リ | 四 |
|   |   | 四 | 1 | か |
|   |   | 。 | 一 | 乙 |
|   |   | 五 | 1 | 四 |
|   |   | 。 | 。 | 五 |

←ここから

《海女》詞章の比較

| 地歌 | <p>(前略) 一つの利剣を抜きもつて 彼の海底に飛び入れば 空は一つに雲の波煙の波をしのぎつつ 海漫々と分け入って 直下と見れども底もなく 取り得ん事こそ不定なり</p>                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                    |
|----|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 能  | <p>(玉の段) 其時人々力を添へ 引きあげ給へと約束し 一つの利剣を抜きもつてかの海底に飛び入れば 空は一つに雲の波煙の波を凌ぎつつ 海漫々と分け入りて 直下と見れども底もなく 辺も知らぬ海底に その神変はいさ知らず取り得ん事は不定なり かくて龍宮にいたりて 宮中を見れば其高さ 三十丈の玉塔に かの珠を籠めおき 香花を供へ守護神は 八龍並み居たり 其外悪魚鰐の口 逃れ難しや我が命 さすが恩愛の故郷の方ぞ恋しき あゝの波の彼方にぞ我が子はあるらん 父大臣もおはすらん さるにても此儘に 別れはてなん悲しさよと 涙ぐみて立ちしが 又思ひ切りて手を合わせ 南無や志度寺の観音薩埵の力を合はせてたび給へと 大悲の利剣を額に当て 龍宮の中に飛び入れば 左右へばつとぞ退いたりける 其隙に 宝珠を盗みとつて 逃げんとすれば 守護神おつかく かねてたくみし事なれば 持ちたる剣を取り直し 乳の下をかき切り珠を押し込み 剣を捨ててぞ伏したりける 龍宮の慣ひに死人を忌めば あたりに近づく悪龍なし 約束の縄を動かせば 人々喜び引き上げたりけり 珠は知らず海女人は海上に浮かび出でたり</p> |



A・9 《珠取り》

作曲…不詳

作詞…不詳

初出…不明

能…《海人》

調絃…三下り

※『地歌箏曲研究』に記載なし

(詞章)

迷ひ迷ひて讃州潟 しどけなりふり志度の浦 深き心の真珠島 あの水底は綿津見や 取  
られし珠を返さんと 海女野の里に寄る君は 紫の色を隠して身をやつし 賤しき海女の  
磯枕 妹背言葉に末かけて 女命捨て所 一つの利剣を抜きもつて 彼の海底に飛び入れ  
ば 空は一つに雲の波 煙の波をしのぎつつ 海漫々と分け入りて 直下と見れども底も  
なく 取り得ん事は不定なり 我は別れてはや行水の 波の彼方に我が子やあるらん 父  
大臣もおはすらんと 涙にくれて居たりしが また思ひ切りて手を合わせ 南無や志度寺  
の観音薩埵の 力を添えてたび給えとて 大悲の利剣を額にあて 龍宮の中へ飛び入れば  
左右へぱつとぞ退いたりける (◆) その隙に宝珠を盗み取つて 逃げんとすれば 守護神  
追つかく 予てたくみし事なれば 持ちたる剣を取りなおし 乳の下をかき切り 珠を押  
し込み 剣をすててぞ伏したりける 龍宮の慣ひに死人を忌めば あたりに近づく悪龍な  
し 約束の縄を動かせば 人々喜び引き上げたりける珠は知らず海女人は海上に浮かび出  
でたり かくて浮かびは出でたれども 五体はつづかず朱になりて 主は空しくなりけ  
り 宝珠は難なく取り上げて 治まる国の氏寺や 氏の長者の御世継ぎ その名もここに  
房前の 御身の母は我なりと 言ふ声ばかり 面影は 波に揺られて入りにける

この曲は、先に述べた《海女》と詞章が一致している部分は、ほぼ同じ旋律となつてお  
り、別の曲ととらえるべきか意見が分かれている曲であるが、本論文では別に解説するた  
め、《海女》と《珠取り》として分けて扱う。他に、《珠取海士》と称されることもある。

この曲は、《海女》が、舞地として演奏される中で変化したものだと考えている。地歌の  
作品が舞地として演奏される際には、曲に変化がみられることが多いが、その特徴として、  
「冒頭からある部分までを省略する」「手事や合の手などの器楽部分を省略する」「もとは

独吟ではない箇所を独吟で演奏する（舞手が独吟をする場合もある）」などが挙げられ、《海女》と《珠取り》を比較すると、その変化がこれらの特徴と一致しており、詞章が一致している部分は、旋律も似ている、またはほぼ一致しているため、《海女》を原型とした舞地の作品の可能性が高い。「かくて浮かびは出たれども」以降は《海女》にはない補作部分となるが、能《海人》の「玉の段」以降の内容を歌っており、詞章も一部引用されている。

詞章が一致している部分はほぼ同じ曲とみてよいが、傍線部……………で示した部分が独吟に変化しており、《海女》では（◆）の位置にある長い合の手が省略されているなどの変化がみられる。詳しい曲調やハコビにおける能との関連については、《海女》の項と同じ内容となるため割愛する。

《海女》にはない「かくて浮かびは出たれども」以降は、他の地歌作品にはみられない独特の節となっているが、舞地のために補作したと仮定すれば、他の三味線音楽の影響を受けていると考えることができる。

「謡物」は、能の詞章を引用しているものの、物語性が薄い内容になっている作品がほとんどだが、この《珠取り》は、《海女》以上に、能のおおよその物語が辿れる内容という意味で貴重な作品である。

なお、次の詞章の比較は、《海女》にはない「かくて浮かびは出たれども」以降のみ行う。

《珠取り》詞章の比較（《海女》にはない部分のみ）

| 地歌                                                                                                                                                                                                           | 能                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                    |
|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>（前略）かくて浮かびは出でたれども<br/>         五体はつづかず朱になりて 主は空しく<br/>         なりにけり 宝珠は難なく取り上げて<br/>         治まる国の氏寺や 氏の長者の御世継ぎ<br/>         その名もここに房前の 御身の母は我な<br/>         りと 言ふ声ばかり 面影は 波に揺ら<br/>         れて入りにける</p> | <p>（「玉の段」の後）かくて浮ひは出でたれ<br/>         ども 悪龍の業と見えて 五体もつづか<br/>         ず朱になりたり 珠もいたづらになり<br/>         主も空しくなりけるよと 大臣なげき給<br/>         ふ 其時息の下より申すやう 我が乳の<br/>         あたりを御覽ぜとあり げにも劍のあた<br/>         りたる痕あり その中より光明赫奕たる<br/>         珠を取りいだす さてこそ御身も約束の<br/>         ごとく 此浦の名に寄せて 房前の大<br/>         臣とは申せ 今は何をかつつむべき これ<br/>         こそ御身の母海士人の幽霊よ</p> |

A・10 《放下僧》

作曲…岸野次郎三

作詞…不詳

初出…『歌舞伎事始』（一七六二）、『地歌箏曲研究』では『松の葉』（一七〇三）としている。

能…《放下僧》

調絃…二上り

（詞章）

面白の花の都や 筆に書くとも尽きすまじ 東には祇園清水 落ちくる滝の 「合の手①」  
音羽の嵐に 地主の桜は散りぢりに、西は法輪嵯峨の御寺 廻らば廻れ 「合の手②」 水  
車の輪の 臨川堰の川波 川柳は水に揉まるる 野辺の薄は風に揉まるる ふくら雀は竹  
に揉まるる 都の牛は 「合の手③」 車に揉まるる 茶臼は挽木に揉まるる 実にまこと  
忘れたりとよ 子切子は放下にもまるる 小切子の二つの竹の 節よを重ねて うち治ま  
りたる御代ぞめでたき

詞章は、能《放下僧》の「小歌」とよばれる部分の詞章とほぼ同じである。

蒲生氏によって、詞章に観世流のみにあつて他の四流にはない「しだり柳は風に揉まるる」を含んでいると指摘されているが<sup>42</sup>、筆者の参考とした楽譜と音源では、この句を含んでいるものはなかった。おそらく、能にはない「野辺の薄は風に揉まるる」の句を指していると思われるが、詳細は不明である。この「小歌」は『閑吟集』（一五一八）<sup>43</sup>にも収められており、ここには「野辺の薄は風に揉まるる」の句がみられる。蒲生氏はこの曲の初出を『新增大成糸のしらべ』（一八〇一）としているが、別曲のことを述べているのか、詳細は不明である。『地歌箏曲研究』では、初出は『松の葉』とされ、第四卷に半太夫節<sup>44</sup>として収録される二種の詞章の内の一つと詞章がほぼ一致しているが<sup>45</sup>、これには「しだり柳は風に揉まるる」の一文が含まれており、半太夫節である場合、作曲者を岸野次郎三

<sup>42</sup> 蒲生郷昭「地歌が摂取した能詞章」『日本古典音楽探究』前掲、三一七頁。

<sup>43</sup> 小歌の歌謡集。翻刻…新聞進一・志田延義・浅野建二校注『中世近世歌謡集』東京…岩波書店、第二十二刷、一九八八年。

<sup>44</sup> 江戸半太夫（？）寛保三年（一七四三）の創始した浄瑠璃。

<sup>45</sup> 新聞進一・志田延義・浅野建二校注『中世近世歌謡集』前掲、四八六頁。

とする点と矛盾してしまう。『琴線和歌の糸』<sup>46</sup>（二七五一）に掲載されているものは、この作品と調絃が一致しているが、作曲者の記載はなく、「野辺の薄は風に揉まるる」の句を含んでいる。『閑吟集』にのみにあり、能には含まれない「野辺の薄は風に揉まるる」を含んでいることから、能からではなく直接『閑吟集』から引用した可能性も考えられるが、どこかの段階で原文に合わせたとも考えられ、詳細は分からない。詞章もほぼ同じ同名異曲が複数あるとみられ、この作品の初出について探ることは困難を極める。

『歌舞伎事始』巻五の「古人小歌作者」<sup>こじんこつたのさくしや</sup>には、『放下僧』は岸野次郎三作とあり、この作品のことを指しているとみることができ、最古の文献となるため、初出を『歌舞伎事始』とし、A作品に分類した。

冒頭の「譜例1」の旋律が、曲中六回使われており（六回目は前半のみ）、ここまで同じ旋律を多用することは珍しい。また、芝居歌の一つの特徴である「同音の連打」が曲中にみられる（譜例2）。

岸野次郎三の他の作品との共通点は少ないが、これは詞章の内容や調絃によるものと考えることができ、第二部で詳しく述べる。

<sup>46</sup> 松川勾当・安永勾当編集。翻刻…高野辰之『日本歌謡集成』巻七、東京…春秋社、一九二八年、二七九〜三四八頁。



「小切子の二つの竹の」の部分

→

|   |    |   |   |
|---|----|---|---|
| ○ | たー | ー | ー |
| ー | ー  | イ | ー |
| ー | ー  | 四 | ー |
| ー | フー | 五 | ー |
| ー | ー  | 六 | こ |
| ー | のー | 六 | キ |
| 四 | ー  | △ | ー |
| 五 | ー  | 五 | ー |
| ○ | た  | 二 | リ |
| ○ | ー  | 七 | ー |
| ー | ー  | ○ | こ |
| ー | け  | 五 | ラ |
| 四 | エ  | 六 | ラ |
| 五 | の  | 六 | ラ |
| 五 | ー  | 五 | ラ |
| 六 | ラ  | ー | ー |
| ー | ー  | 四 | ー |
| ー | ー  | 五 | の |
| ー | ー  | 四 | ー |
| ー | ー  | 五 | ー |
| ー | ー  | ー | ー |
| ー | ー  | ー | の |

ここから違う旋律となる

譜例 2 曲中にみられる「同音の連打」の例。「落ちくる滝の」の部分。

|   |   |
|---|---|
| ○ | お |
| ○ | ち |
| ー | ー |
| ー | く |
| ー | ー |

《放下僧》詞章の比較

| 地歌                                                                                                                                                                                                                                                                                       | 能（観世流の詞章）                                                                                                                                                                                                                                                                       |
|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>面白の花の都や 筆に書くとも尽きすま<br/>じ 東には祇園清水 落ちくる滝の音羽<br/>の嵐に 地主の桜は散りちりに、西は法<br/>輪嵯峨の御寺 廻らば廻れ 水車の輪の<br/>臨川堰の川波 川柳は水に揉まるる 野<br/>辺の薄は風<small>すすき</small>に揉まるる ふくら雀は竹<br/>に揉まるる 都の牛は 車に揉まるる<br/>茶臼は挽木に揉まるる 実にまこと忘<br/>れたりとよ 子切子は放下にもまるる<br/>小切子の二つの竹の 節<small>ふ</small>よを重ねて う<br/>ち治まりたる御代ぞめでたき</p> | <p>（小歌）面白の花の都や 筆に書くとも<br/>及ばじ 東には祇園清水 落ちくる瀧の<br/>音羽の嵐に 地主の桜は散りちり 西は<br/>法輪 嵯峨の御寺 廻らば廻れ 水車の<br/>輪の 臨川堰の川波 川柳は 水に揉ま<br/>るる 枝垂柳<small>しだり</small>は 風に揉まるる ふく<br/>ら雀は 竹に揉まるる 都の牛は 車に<br/>揉まるる 茶臼は 挽木に揉まるる げ<br/>にまこと 忘れたりとよ こきりこは放<br/>下に揉まるる こきりこの二つの竹の<br/>代々を重ねて 打ち治まりたる御代かな</p> |



## A・11 《石橋》

作曲…芳沢金七・若村藤四郎

作詞…初世瀬川路考

初出…『古今端歌大全』（一七一―一七三六頃）

能…《石橋》

調絃…三下り

### （詞章）

我も迷ふやさまざまに 四季折々の戯れに 蝶よ胡蝶よ せめて暫し<sup>しば</sup>は手に止まれ 見返  
れば 花の木陰に 見えつ隠れつ羽<sup>は</sup>を休め 姿やさしき夏木立<sup>なつこだち</sup> 心づくしのな この年月<sup>としつき</sup>  
を いくつか思いの晴るるやと 心一つにあきらめて よしやよの中〔合の手①〕花による  
蝶連れだちて 追ひ廻り<sup>めぐ</sup>おりつ上りつ そばへあげ羽<sup>は</sup>のしほらしや 追ひめぐり追ひめぐ  
り おりつ上り<sup>あが</sup>つそばへあげ羽<sup>は</sup>のしほらしや 面白や〔合の手②〕時しも今は 牡丹の花  
の咲や<sup>さ</sup>乱れて 散るは散るは散り来るは 散るは散るは散り来るは 散れ散れ散れ散れ  
散りかかる様で おいというて寝られぬ 花見て戻ろ花見て戻ろ 花には憂さをも打ち忘  
れ〔合の手③〕人目忍べば恨みはせまい 為に沈みし恋の淵 心からなる身の憂さを や  
んれそれはそれはえ まこと憂や辛や 思ひまはせば昔なり〔合の手④〕牡丹に戯れ獅子  
の曲 げに石橋の有様は 唱歌の花降り 笙笛琴箏篋<sup>しょうちやんくきんべつ</sup> 夕日の雲に聞ゆべし 目前の奇特  
あらたなり〔合の手⑤〕暫く待たせ給へや 影向の時節も今いくほどに よもつきじ 〔手  
事五段〕獅子とらでんの舞樂のみぎん 獅子とらでんの舞樂のみぎん 牡丹の花房香い<sup>にお</sup>  
満ち満ち 大きんりきんの獅子頭 打てや囃せや牡丹芳牡丹芳 紅金の藝現はれて 花に  
戯れ枝に臥し<sup>ふ</sup>転ろび 実<sup>げ</sup>にも上なき獅子王の勢<sup>いきおい</sup> なびかぬ草木もなき時なれや 万歳千  
秋と舞ひ納む 万歳千秋と舞ひ納む 獅子の座にこそ直りけれ

この曲は歌本や流派によって詞章や演奏箇所<sup>箇所</sup>の異同が大きいが、本論文では研究範囲に  
則り、江戸期に作られ現在まで伝承されている部分のみを扱う。

後歌は、能《石橋》の後半より詞章を引用している。冒頭から「げに石橋の有様は」ま  
では地歌独自の詞章であるが、能《石橋》とは関係のない内容となっている。

曲中の長い器楽部分は「手事」とよばれることが多いが、芝居歌のもつ器楽部分として  
は特出して長い。「手事」の位置は、能で「獅子」という囃子が演奏される部分にあたる。

改めて検証するまでもなく、この「手事」は、現在歌舞伎の獅子物で演奏される「狂いの合方」の原型であり、その笛の旋律から、能楽囃子の「獅子」と合奏するために作られた旋律であることが分かる。これは、能楽囃子と三味線音楽の直接的なつながりを示している貴重な例である。

地歌は後歌から「大ノリ風」となっているが、能においても同じ部分から「大ノリ」となる。

地歌

（前略）牡丹に戯れ獅子の曲 げに石橋  
の有様は 唱歌の花降り 笙笛琴箏篳  
夕日の雲に聞ゆべし 目前の奇特あらた  
なり 暫く待たせ給へや 影向の時節も  
今いくほどに よもつきじ **手事** 獅子  
とらでんの舞樂のみぎん 獅子とらでん  
の舞樂のみぎん 牡丹の花房香い満ち満  
ち 大きんりきんの獅子頭 打てや囃せ  
や牡丹芳牡丹芳 紅金の薬現はれて 花  
に戯れ枝に臥し転ろび 実にも上なき獅  
子王の勢 なびかぬ草木もなき時なれ  
や 万歳千秋と舞ひ納む 万歳千秋と舞  
ひ納む 獅子の座にこそ直りけれ

能

（クセの上羽より）遙に臨んで谷を見れ  
ば足冷ましく肝消え 進んで渡る人もな  
し 神変仏力にあらずは 誰か此橋を渡  
るべき 向は文殊の浄土にて 常に笙歌  
の花降りて 笙笛琴箏篳夕日の雲に聞え  
き 目前の奇特あらたなり しばらく待  
たせ給へや 影向の時節も今いくほどに  
よも過ぎじ **獅子** 獅子団乱旋の舞樂のみ  
ぎん 獅子団乱旋の舞樂のみぎん 牡丹  
の花房にほひ満ち満ち たいきんりきん  
の獅子頭 打てや囃せや 牡丹芳牡丹芳  
黄金の蕊現れて 花に戯れ枝に伏し転び  
げにも上なき獅子王の勢ひ 靡かぬ草木  
もなき時なれや 万歳千秋と舞ひ納め  
万歳千秋と舞ひ納めて 獅子の座にこそ  
なほりけれ

A・12 《貴船》

作曲…藤林検校

作詞…小谷立静

初出…『若緑』(一七〇六)

能…《鉄輪》

調絃…本調子↓二上り↓三下り↓本調子(二、一、三の順に一音上げていく)

(詞章)

蜘蛛の網に 荒れたる駒は繋ぐとも 二道かくるその人の 如何で頼まん化野の 仇しこの身は儘にはならぬ 月日程経て昔の訳を 思うも濡るる我が袖の 港に帰る徒波の 寄る夜毎に立ち出て 降りさけ見れば大原や 御室に近き小塩山 糺の森の木の間分け 通い車の黄昏見れば 車の車の黄昏見れば 包む辛さを袂に余り 訳を友禅 左の腕 ものの助様命と彫りし その睦言も何時しかに 変わる淵瀬と嘆いた海士の捨舟我独り 漕がれ焦がれて行く水の 影さえ清き加茂川の 「合の手①」(二上り) 寔れ果てたよ我が顔形斯くは見捨てそ よしやよし 三尺袖の 歳が寄りたら 肩降りもしよんがいな 「合の手②」 振れや振れ 古夫愛し我古夫を後に御菩薩の池波に ひよひよひよと鳴くは 鴨御池に住むは鴛鴦 「合の手③」 浜千鳥のちりりん な ちりりん な ちりりや ちりりやりりりつとしてさえな えりくりえんじよの岩間岩間と伝うて 足は千鳥足 西は田の畦危ない危ない 危ない危ない 危のうてならぬえ 細道畦道を 潜り潜り潜って 潜り潜り潜って 松の嵐に(三下り) 颯々と 漲り落つる鞍馬川 「合の手④」(本調子) 恋の淵瀬と身は辿れども 猶も思いは丑の時 撞きだす鐘と諸共に 貴船の社に着き給う

能《鉄輪》のシテのサシ謡の一部を引用している。一六五〇年九月初演の歌舞伎「貴船道行」の地としてつかわれたというが<sup>47</sup>、比較すると、能《鉄輪》のサシ謡を参考に流行歌等を取り入れて内容を増幅させた形であることが分かる。引用元がシテのサシ謡のみである曲は他に例がない。

「合の手③」の後「浜千鳥の」から、能を思わせる独特の節となるが、どのノリ型にも分類できない「特殊な型」である。

<sup>47</sup> 久保田敏子『地歌箏曲研究』前掲、楽曲編上、一八六頁。

《貴船》詞章の比較

地歌

蜘蛛の網に荒れたる駒は繫ぐとも 二道  
 かくるその人の 如何で頼まん化野の  
 仇しこの身は儘にはならぬ 月日程経て  
 昔の訳を 思うも濡るる我が袖の 港に  
 帰る徒波の 寄る夜毎に立ち出て 降り  
 さけ見れば大原や 御室に近き小塩山  
 糺の森の木の間分け 通い車の黄昏見  
 れば 車の車の黄昏見れば 包む辛さを  
 袂に余り 訳を友禅 左の腕 ももの  
 助様命と彫りし その睦言も何時しかに  
 変わる淵瀬と嘆いた海士の捨舟我独り  
 漕がれ焦がれて行く水の 影さえ清き加  
 茂川の 合の手① 寒れ果てたよ我が  
 顔形 斯くは見捨てそ よしやよし  
 三尺袖の 歳が寄りたら 肩降りもしよ  
 んがいな 合の手② 振れや振れ 古夫愛  
 し我が古夫を 後に御菩薩の池波 ひよ  
 ひよひよひと鳴くは 鴨 御池に住む  
 は鴛鴦 合の手③ 浜千鳥のちりりんな  
 ちりりんな ちりりや ちりりや りり  
 りっとしてさえな えりくりえんじよの  
 岩間岩間と伝うて 足は千鳥足 西は田  
 の畦 危ない危ない 危ない危ない 危  
 ない危ない 危のうてならぬえ 細道畦  
 道を 潜り潜り潜って 潜り潜り潜って  
 松の嵐に颯々と 漲り落つる鞍馬川 合  
 の手④ 恋の淵瀬と身は辿れども 猶も  
 思ひは丑の時 撞きだす鐘と諸共に 貴  
 船の社に着き給う

能（シテのサシ謡より）

げにや蜘蛛の家に荒れたる駒は繫ぐとも  
 二道かくるあだ人を 頼まじとこそ 思  
 ひしに 人の偽 未知らで 契りそめけ  
 ん悔しさも 唯我からの心なり 餘り思  
 ふも苦しさに 貴船の宮に詣でつつ 住  
 むかひもなき同じ世の うちに報を見せ  
 給へと たのみを懸けて貴船川 早く歩  
 を運ばん 通ひなれたる道の末 通ひな  
 れたる道の末 夜も糺のかはらぬは  
 思ひに沈む御泥池 生けるかひなき憂き  
 身の

消えん程とや草深き市原野辺の露分けて  
 月遅き夜の鞍馬川 橋を過ぐれば程もな  
 く 貴船の宮に着きにけり 貴船の宮に  
 着きにけり（後略）

A・13 《葵の上》

作曲…木の本屋巴遊

作詞…不詳

初出…『大成系の節』（一七九四）

能…《葵上》

調絃…三下り

（詞章）

実に世に在りし古は 雲上うんしやうの花の宴 春の朝あしたの御遊に慣れ 仙洞の紅葉も秋の夜は  
月に戯れ色香に染み 華やかなりし身なれども 衰えぬれば朝顔の 日影待つ間の有様は  
ただ何時いつとなき我が心 物憂き野辺の早蕨の 萌え出で初めし思いの露 「小合の手①」  
かかる恨みは憂き人の 何を嘆くぞ葛の葉や「合の手①」 纏れ纏れてナ 逢う夜はほん  
に「小合の手②」 憎や憎やと鳥鐘ばかり 他に妬みは無きそな鳴きそ なんなん菜種の飯  
寝の夢に われは胡蝶の 花すり衣 袖にちりちり露涙の 「小合の手③」 ぴんと拗ねて  
も離れぬ番い おおそれが誠の離れぬ番い 辛気昔の仇枕 「小合の手④」 この上はとて立  
ち寄りて 今の恨みはありし報い 瞋恚ほむらの炎は身を焦がす 思い知らずや思い知れ 「小合  
の手⑤」 怨めしの心やな あら怨めしの心やな 人の恨みの深くして 憂き音に泣かせ  
給うとも 生きてこの世に在しまさば 水暗き沢辺の螢の影よりも 光君とも契らん 「合  
の手②」 妾は蓬生よもぎうの 元あらざりし身となりて 葉末の露と消えもせば それさえ殊に  
怨めしや 夢にだに返らぬものは 我が契り 昔語りとなりぬれば 「合の手③」 猶も思  
いは増澄ますかみ鏡 その面影の恥かしや枕に立つる破れ車 打ち乗せ隠れ行かんとぞ 「小合の手  
⑥」 云う声ばかりは松吹く風 云う声ばかりは松吹く風 覚めて儂なまくなりにつけり

作曲者の木の本屋巴遊についての詳細は不詳であるが、曲調は芝居歌作品に近く、A作  
品に分類した。

詞章後半に、能《葵上》の「枕の段」の前から段の終わりまでをほぼそのまま引用して  
いる。曲尾の「云う声ばかりは松吹く風 云う声ばかりは松吹く風 覚めて儂なまくなりにつけ  
る」は、地歌独自の詞章であるが、引用している部分の終わりが能の曲尾でないため、終  
止感を出すために創作したとも考えられる。「枕の段」を引用する直前の詞章が、「辛気昔  
の仇枕」と「枕」で終わる点に工夫がみられる。

冒頭は情緒的だが、「萌え出で初めし思いの露」から雰囲気が変わり「中ノリ風」となる。その後「合の手①」の後再び情緒的になる。能からの引用となる「この上はとて立ち寄りて」の直前に「同音合わせ撥」の連続があり、その後「中ノリ風」となり、「怨めしの心やな」から「平ノリ風」、「小合の手⑥」の後の「云う声ばかりは松吹く風」より再び「中ノリ風」となり、曲尾は「謡物終了定型」が若干変化した旋律である。能では「枕の段」の出だしは「拍子不合」で、「うらめしの心や」からは「平ノリ」である。

この曲の「平ノリ風」の部分は、他の曲と比較しても能の「平ノリ」にかなり近いリズム型をとっている。

「小合の手④」は、独自の詞章から能の詞章となる変わり目に、「小合の手⑤」は、能においてシテとツレの掛け合いから地謡に変わる部分に、「合の手②」は、地謡からシテ謡にかわる部分に、「小合の手⑥」は、能の引用から独自の詞章に変わる部分に挿入されている。

| 地歌                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                      | 能                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                   |
|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>(前略) 辛気昔の仇枕 <span style="border: 1px solid black;">小合の手④</span> この<br/> 上はとて立ち寄りて 今の恨みはありし<br/> 報い 瞋恚の炎は身を焦がす 思い知<br/> らずや思い知れ <span style="border: 1px solid black;">小合の手⑤</span> 怨めしの<br/> 心やな あら怨めしの心やな 人の恨み<br/> の深くして 憂き音に泣かせ給うとも<br/> 生きてこの世に在しまさば 水暗き沢辺<br/> の螢の影よりも 光君とも契らん <span style="border: 1px solid black;">合の手②</span> 妾は蓬生の 元あらざりし身とな<br/> りて 葉末の露と消えもせば それさえ<br/> 殊に怨めしや 夢にだに返らぬものは<br/> 我が契り 昔語りとなりぬれば <span style="border: 1px solid black;">合の手③</span> 猶も思いの増澄鏡 その面影の恥<br/> かしや枕に立つる破れ車 打ち乗せ隠れ<br/> 行かんとぞ <span style="border: 1px solid black;">小合の手⑥</span> 云う声ばかり<br/> は松吹く風 云う声ばかりは松吹く風<br/> 覚めて儂くなりけり</p> | <p>(「枕の段」の前より段の終わりまで) こ<br/> の上はとて立ち寄りて わらははあとに<br/> て苦を見する(枕の段) 今の恨みは有り<br/> し報い 瞋恚のほむらは 身を焦がす<br/> おもひ知らずや 思ひ知れ 恨めしの心<br/> や あら恨めしの心や 人の恨みの深く<br/> して 憂き寝に泣かせ給ふとも 生きて<br/> 此世にましまさば 水暗き沢辺の螢の影<br/> よりも 光る君とぞ契らん わらはは蓬<br/> 生の もとあらざりし身となりて 葉末<br/> の露と消えもせば それさへ殊に恨めし<br/> や 夢にだにかへらぬものをわが契 昔<br/> 語りになりぬれば なほも思ひは増す鏡<br/> その面影も恥かしや 枕に立てる破れ<br/> うち乗せ隠れ行かうよ うち乗せ隠れ行<br/> かうよ</p> |



## B 十八世紀に名古屋で作曲されたと思われる作品

### B・1 《八嶋》

作曲…藤尾勾当

作詞…不詳

初出…曲名は『歌系図』（二七八二）、詞章は『新大成系のしらべ』（二七八八）

能…《八嶋》

調絃…三下り

#### （詞章）

釣りの暇いしまも波の上 霞渡りて沖行くや 海人の小舟のほのぼのと 見えてぞ残る夕暮に  
浦風さえも長閑のどかにて しかも今宵は照りもせず 曇りもやらぬ春の夜の 朧月夜に如くも  
のはなし 「合の手①」 西行法師は嘆けとて 月やは物を思わする 闇は忍ぶによかよか  
汝何故出たぞ きそぎそ曇れ 「合の手②」 また修羅道の関かたきの声 矢叫びの音振動して  
「合の手③」 今日の修羅の敵かたきは誰そ 何 能登守教経のとのかみのりつねとや あら物々しや手並みは知り  
ぬ 思いぞ出ずる壇の浦の その船戦今は早 演武に帰る生き死にの 海山一同に振動し  
て 「合の手④」 舟よりは関かたきの声 陸くわには波の楯 月に白むは剣つるぎの光 潮うしおに映るは兜の  
星の影 水や空 空行くもまた雲の波の 打ち合い刺し違うる 舟戦の駆引き 浮き沈む  
とせし程に 春の夜の波より明けて 敵と見えしは群れ居る鷗 関かたきの声と聞こえしは 浦  
風なりけり高松の 浦風なりけり高松の 朝風とぞなりにける

冒頭の詞章は、能《八嶋》の前半のシテとツレの謡から引用しているが、「浦風さえも長閑のどかにて」と「しかも今宵は照りもせず」の間の詞章を大幅に省略し、一つの意味になる様につなげており、作詞者が能の詞章を熟知していたことがうかがえる。「西行法師は」から「合の手②」の前までは地歌独自の詞章で、「また修羅道の」より曲尾までは、能の「カケリ」の手前から曲尾までの詞章をほぼそのまま引用している。

冒頭は情緒的に始まる。「修羅道の」より「中ノリ風」となるが、能では「また修羅道の」からは拍子不合であり、「その船戦今は早」から「中ノリ」となる。能において「水や空空」の部分を一文字一拍（地歌の小間でとると二拍）ずつで謡うという変化が、地歌においてもみられる（譜例1）。

曲尾は「謡物終了定型」である。

|   |   |
|---|---|
| シ | ミ |
| ワ |   |
| 一 | ヅ |
| 〇 |   |
| 三 | ヤ |
| 〇 |   |
|   | リ |
| ニ | ネ |
| 〇 |   |
| 一 | ス |
| 〇 |   |
| ニ | ネ |
| 〇 |   |
| 一 | ス |
| 〇 |   |
| 五 |   |
| 七 |   |

《八島》詞章の比較

| 地歌                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                 | 能                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                         |
|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>釣りの暇も波の上 霞渡りて沖行くや<br/> <small>いしづま</small><br/>         海人の小舟のほのぼのと 見えてぞ残る<br/>         夕暮に 浦風さえも長閑にて しかも今<br/> <small>のどやか</small><br/>         宵は照りもせず 曇りもやらぬ春の夜の<br/>         朧月夜に如くものはなし <b>合の手①</b> 西行<br/>         法師は嘆けとて 月やは物を思わする<br/>         闇は忍ぶによかよか 汝何故出たぞ き<br/> <small>うななせ</small><br/>         そぎそ曇れ <b>合の手②</b></p> <p>また修羅道の関の声 矢叫びの音振動<br/> <small>しや</small><br/>         して <b>合の手③</b> 今日の修羅の敵は誰<br/> <small>いかたき</small><br/>         そ何 能登守教経とや あら物々しや<br/> <small>のりのかみかみりつね</small><br/>         手並みは知りぬ 思いぞ出ずる壇の浦の<br/>         その船戦今は早 演武に帰る生き死にの<br/>         海山一に振動して <b>合の手④</b> 舟よりは<br/> <small>しづま</small><br/>         関の声 陸には波の楯 月に白むは剣<br/> <small>つちか</small><br/>         の光 潮に映るは兜の星の影 水や空<br/>         空行くもまた雲の波の 打ち合い刺し違<br/>         うる 舟戦の駆引き 浮き沈むとせし程<br/>         に 春の夜の波より明けて 敵と見えし<br/>         は群れ居る鷗 関の声と聞こえしは 浦<br/>         風なりけり高松の 浦風なりけり高松の<br/>         朝風とぞなりにける</p> | <p>(前半 シテの上歌) 釣のいとまも波の上<br/>         釣のいとまも波の上 霞渡りて沖行くや<br/>         あまの小舟のほのぼのと 見えて残る夕<br/>         暮れ 浦風までも長閑なる 春や心を誘<br/>         うらん 春や心を誘うらん (中略)<br/>         げに痛はしき御事かな さらばお宿を貸<br/>         し申さん もとより住み家も芦の屋の<br/>         ただ草枕と思召せ しかも今宵は照りも<br/>         せず 曇りもやらぬ春の夜の 朧月夜に<br/>         しく物もなき 海人のとま (中略)</p> <p>(「カケリ」の前) また修羅道のときの声<br/>         矢叫びの音 震動せり <b>カケリ</b> 今日の修<br/>         羅の 敵は誰そ 何能登の守 教経とや<br/>         あら物々しや 手並みは知りぬ 思いぞ<br/>         出ずる壇の浦の 其の船戦今ははや 其<br/>         の船戦今ははや 闇浮に帰る生死の海山<br/>         一同に震動して ◆ 船よりはときの<br/>         声 陸には 波の楯 月にしらむは 剣<br/>         の光 湖にうつるは 兜の星の影 ◆<br/>         水やそらそら行くもまた雲の波の 打ち<br/>         合い刺し違ごうる 船戦のかけひき 浮<br/>         き沈むとせし程に 春の夜の波より明け<br/>         て 敵とみえしは群れいる鷗 関の声と<br/>         聞こえしは 浦風なりけり高松の 浦風<br/>         なりけり高松の 朝風とぞなりにける</p> |

※◆から◆までは地とシテの掛け合い

## B・2 《富士太鼓》

作曲…藤尾勾当

作詞…不詳

初出…『琴線和歌の糸』（一七五一）

能…《富士太鼓》《梅枝》

調絃…三下り

### （詞章）

思いぞ積もる胸の花 涙にしおる藤葛 女心の乱れ髪 結い甲斐なくも恋衣 そのうつり香を後朝の 形見と今は鳥兜 重き思いを頂きて狂い出するぞ 儚く消えし草葉の露の残るこの身を如何にせん 恋いしや床しや愛しやと 或いは嘆き笑いつつ 恋し心が狂狂 狂 狂気となつて現なく 「合の手①」 太鼓こそ 太鼓こそ 失せにし人の敵なれ 思えば思えば腹立ちや 後ろに呼ぶは夫の声 前には敵の関の声 打てや打てやと責め鼓 越天楽を舞おうよ 歌えや歌え 梅が枝に風吹かば如何にせん 花に宿る鶯 「合の手②」 持ちたる撥をば剣と定め 持ちたる撥をば剣と定め 瞋恚の炎は太鼓の烽火の天に上がれば雲の上人 まことの富士風に 絶えずもまれて裾野の桜 四方へばつと散るかと思えて花衣さす手も引く手も 伶人の舞なれや 富士が恨みも諸共に 躍り上がってちようど打つ 「合の手③」 嬉しや今こそは 思う敵は討ちおさめ 打たれて音をや出だすらん 実にはや女人の罪深く 五常楽を打とうよ さてまた千代や万代の千秋楽を打とうよ 民も榮えて安穩に太平楽を舞おうよ 日も既に傾きぬ 日も既に傾きぬ これ迄なりや人々よ 伶人の姿 鳥兜 皆脱ぎ捨ててわが心 乱れ傘 乱れ髪 かかる思いを忘れじと たま立ち返り 太鼓こそ 憂き人の形見ぞと 後見置きてぞ帰りける

能《富士太鼓》と、その後日談的内容の能《梅枝》から詞章を引用している。

「梅が枝に風吹かば如何にせん 花に宿る鶯」は、越天楽謡物<sup>48</sup>の歌詞であるが、他の部分にも能《梅枝》からの引用があるため、越天楽謡物からではなく、能《梅枝》からの引用と考えている。

<sup>48</sup> 平安時代末から寺院で行われていた、雅楽曲に歌詞をつけて歌ったもので、《越天楽》に歌を付けたものを指す。

冒頭から「失せにし人の敵なれ」までは地歌独自の詞章だが、能《梅枝》の詞章の一部に引用している。「思えば思えば腹立ちや」以降が、大部分を能から引用した詞章となる。引用されているのは富士の妻が狂乱の舞を舞う場面だが、丸取りではなく、一部省略されていたり、言葉の前後が入れ替わったりしている。

途中、長い合の手が二箇所あり、「合の手①」は、地歌独自の詞章から能の引用を含む部分となる変わり目に入られている。「合の手②」は、能《富士太鼓》《梅枝》において「楽」という囃子が演奏される部分にあたり、太鼓の音を思わせる一音一音をゆつくり聞かせる独特の手で始まる（譜例1）。また、二つの合の手は、どちらも同じ旋律を二回繰り返す形になっている。

「合の手①」の後「太鼓こそ」から雰囲気が変わり、「後ろに呼ぶは」から「平ノリ風」となる。この部分の詞章は独自の詞章と能《富士太鼓》、《梅枝》の引用が混ざっているが、《富士太鼓》の引用されている部分は「拍子不合」から「平ノリ」、《梅枝》の引用されている部分は「平ノリ」である。「合の手②」後「持ちたる撥をば」より「中ノリ風」となるが、能においてもここから「中ノリ」となっている。この「中ノリ風」の部分は、引用元とかなり近いリズム型の歌である。「合の手③」の後、「嬉しや今こそは」以降は「平ノリ風」であるが、能においても、この部分は「平ノリ」である。

曲尾は「謡物終了定型」である。

詞章、曲の構成双方から、能への深い理解が感じられる作品である。

譜例1 太鼓の音を思わせる一音一音をゆつくり聞かせる独特の手

矢印から矢印まで

《富士太鼓》詞章の比較（次頁まで）

| 地歌                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                     | 能                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                     |
|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>             思いぞ積もる胸の花 涙にしおる藤葛<br/>             女心の乱れ髪 結い甲斐なくも恋衣<br/>             そのうつり香を後朝の形見と今は鳥兜<br/>             重き思いを頂きて狂い出ずるぞ 儚く消<br/>             えし草葉の露の 残るこの身を如何にせ<br/>             ん 恋いしや床しや愛しやと 或いは嘆<br/>             き笑いつつ 恋し心が狂狂狂 狂気とな<br/>             って現なく <b>合の手①</b> 太鼓こそ 太<br/>             鼓こそ 失せにし人の 敵なれ 思えば<br/>             思えば腹立ちや 後ろに呼ぶは夫の声<br/>             前には敵の関の声 打てや打てやと責め<br/>             鼓 越天楽を舞おうよ 歌えや歌え 梅<br/>             が枝に風吹かば如何にせん 花に宿る鶯<br/> <b>合の手②</b> 持ちたる撥をば剣と定め<br/>             持ちたる撥をば剣と定め 瞋恚の炎は太<br/>             鼓の烽火の天に上がれば雲の上人 まこ<br/>             との富士風に 絶えずもまれて裾野の<br/>             桜 四方へばつと散るかと思えて<br/>             花衣さす手も引く手も 伶人の舞なれ<br/>             や 富士が恨みも諸共に 躍り上がって<br/>             ちようど打つ<br/> <b>合の手③</b> 嬉しや今こそは 思う敵は討<br/>             ちおさめ 打たれて音をや出だすらん<br/>             実にや女人の罪深く 五常楽を打とうよ<br/>             さてまた千代や万代の千秋楽を打とうよ<br/>             民も榮えて安穩に太平楽を舞おうよ           </p> | <p>             《梅枝》（クセ）うかりし身の昔を 懺悔<br/>             に語り申さん さるにても我ながら よ<br/>             しなき恋路に犯されて 長く悪趣に堕し<br/>             けるよ さればにや 女心の乱れ髪 ゆ<br/>             ひかいなくも 恋衣の 夫の形見を戴き<br/>             この狩衣を着しつつ（中略）<br/>             さなくや花の越殿楽 唄えや謡へ 梅が<br/>             枝 梅が枝にこそ 鶯は巢をくへ 風吹<br/>             かばいかにせん花に宿る鶯 <b>楽</b>（後略）<br/>             《富士太鼓》（後半途中より）打て打てや<br/>             とせめつづみ あらさてこりの 泣く音や<br/>             な なほも思へば腹たちや なほも思へ<br/>             ば腹たちや 怪したる姿に引きかへて<br/>             心言葉も及ばれぬ 富士が幽霊来ると見<br/>             えて よしなの恨みや もどかしと太鼓<br/>             打ちたるや <b>楽</b> 持ちたる撥をば剣と定<br/>             め 持ちたる撥をば剣と定め 瞋恚の焰<br/>             は太鼓の烽火の 天にあがれば雲の上人<br/>             誠に富士風に絶えず揉まれて裾野の桜<br/>             四方へばつと散るかと思えて 花衣さす<br/>             手も引く手も 伶人の舞なれば 太鼓の<br/>             役は 本より聞ゆる 名の下空しからず<br/>             たぐひなやなつかしや げにや女人の悪<br/>             心は 煩惱の雲晴れて五常楽を打ち給へ<br/>             修羅の太鼓は打ちやみぬ 此君の御命<br/>             千秋楽を打たうよ さてまた千代や万代<br/>             と 民も榮えて安穩に 太平楽を打たう<br/>             よ           </p> |

|                                                                                                                                             |                                                                                                                                                                                                                                                                                            |
|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>地歌</p> <p>日も既に傾きぬ 日も既に傾きぬ</p> <p>これ迄なりや人々よ 伶人の姿 鳥兜<br/> 皆脱ぎ捨ててわが心 乱れ傘 乱れ髪<br/> かかる思いを忘れじと たま立ち返り<br/> 太鼓こそ 憂き人の形見ぞと 後見置き<br/> てぞ帰りける</p> | <p>能</p> <p>日も既に傾きぬ 日も既に傾きぬ 山の<br/> 端をながめやりて 招きかへす舞の手の<br/> うれしや今こそは思ふ敵は打ちたれ<br/> 打たれて音を出すらん 我には晴るる<br/> 胸の煙 富士が恨を晴らせば 涙こそ上<br/> なかりけれ これまでなりや人々よ こ<br/> れまでなりや人々よ 暇申してさらばと<br/> 伶人の姿鳥甲 皆ぬぎすてて我が心<br/> 乱れ髪乱れ笠 かかる思は忘れじと ま<br/> た立ちかへり 太鼓こそ憂き人の形見な<br/> りけれと 見置きてぞ帰りける 跡見置<br/> きてぞ帰りける</p> |
|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

### B・3 《虫の音》

作曲…藤尾勾当

作詞…不詳

初出…曲名は『歌系図』（二七八二）、詞章は『今古集成琴曲新歌袋』（二七八九）

能…《松虫》

調絃…三下り

#### （詞章）

思いにや 焦がれて集く<sup>すだ</sup> 虫の声々小夜更<sup>さよ</sup>けて いとど淋しき 野菊に独り 道は白菊辿りて此処に 誰を松虫亡き面影を 慕う心の穂に現れて 萩よ薄よ寝乱れ髪<sup>かみ</sup>の 解けて零るる涙の露の かかる思いをいつさて忘りよ とかく輪廻の拙きこの身 晴るる間もなき 胸の闇 雨の降る夜も降らぬ夜も 通い車の夜毎<sup>よごと</sup>に來れど 逢うて戻れば一夜が千夜 逢わで戻ればまた千夜 それそれぞれじゃ それが誠にさ ほんに浮世が儘ならば 何を恨みんよしなしごとよ 桔梗<sup>ききよう</sup> 刈萱<sup>かりかや</sup> 女郎花<sup>おみなえし</sup> われは恋路に名は立ちながら 独り丸寝<sup>まるね</sup>の長き夜に 「手事」 面白や 千草<sup>すだ</sup>に集く虫の音の 機織る音はきりはたりちよう きりはたりちよう 綴れさせちよう茅蜩<sup>ひぐらし</sup> きりぎりす いろいろの色音の中に 別きて我が偲ぶ松虫の声 りんりりんりんりんとして 夜の声冥々たり すわや難波の鐘も明け方の朝間にやなりぬべし さらによとものと名残の袖を 招く尾花<sup>ほの</sup>の仄かに見えし跡絶えて 草茫々たる阿倍野の原に 虫の音ばかりや残るらん 虫の音ばかりや残るらん

「手事」の後「面白や」以降の詞章は、能《松虫》のキリの詞章をほぼそのまま引用している。それ以前は地歌独自の詞章となるが、「虫の声々」や「誰を松虫」など「虫」に関する言葉が散りばめられている。恋心を歌った内容とみられるが、能《松虫》ではシテが男性なのに対し、『虫の音』では「寝乱れ髪」 解けて零るる涙の露の」などから読み取れるように、主観が女性に置き換えられている。

曲中の長い器楽部分を「手事」と表したが、この時代はまだ手事<sup>てし</sup>の概念が確立しておらず、現在もこの部分を「手事」とするか「合の手」とするかは、流派や演奏者によって意見が分かれている。「手事」の出だしは、「譜例1」の旋律で始まり、複数の奏者で演奏する場合、奏者のいずれかが「手事」の終わりまでこの旋律を地<sup>4</sup>として繰り返すことがある。

<sup>4</sup> 本手の旋律に対し、短い音型を繰り返すなどして伴奏をするもの。



るが、この音型は長唄など他の三味線音楽においても「虫の合方」の出だしなど、虫の声を表わす旋律として伝承されている。

「手事」は、能における「中ノ舞」と同じ位置に挿入されている。

能では「面白や」からは「拍子不合」、「きりはたりちよう」から「大ノリ」となるが、地歌では「面白や 思いにすだく」から「大ノリ風」となり、引用元のリズムとかなり近いリズム型の歌となる。

譜例 1 手事の出だしの旋律。

|   |  |
|---|--|
| 7 |  |
| 7 |  |
| ス |  |
| ハ |  |
|   |  |
| ○ |  |
|   |  |

《虫の音》詞章の比較

| 地歌                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                          | 能                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                         |
|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>             思いにや 焦がれて集く 虫の声々小夜<br/>             更けて いとど淋しき 野菊に独り 道<br/>             は白菊辿りて此処に 誰を松虫亡き面影<br/>             を 慕う心の穂に現れて 荻よ薄よ寝乱<br/>             れ髪を 解けて零るる涙の露の かかる<br/>             思いをいつさて忘りよ とかく輪廻の拙<br/>             きこの身 晴るる間もなき胸の闇 雨の<br/>             降る夜も降らぬ夜も 通い車の夜毎に来<br/>             れど 逢うて戻れば一夜が千夜 逢わで<br/>             戻ればまた千夜 それそれそれじゃ そ<br/>             れが誠にさ ほんに浮世が儘ならば 何<br/>             を恨みんよしなしごとよ 桔梗 刈萱<br/>             女郎花 われは恋路に名は立ちながら<br/>             独り丸寝の長き夜に 手事 面白や 千<br/>             草に集く虫の音の 機織る音はきりはた<br/>             りちよう きりはたりちよう 綴れさせ<br/>             ちよう茅蜩 きりぎりす いろいろの色<br/>             音の中に 別きて我が偲ぶ 松虫の声<br/>             りんりんりんりんとして 夜の声<br/>             冥々たり すわや難波の鐘も明け方の<br/>             朝間にやなりぬべし さらばよとものと<br/>             名残の袖を 招く尾花の仄かに見えし跡<br/>             絶えて 草茫々たる阿倍野の原に 虫の<br/>             音ばかりや残るらん 虫の音ばかりや残<br/>             るらん           </p> | <p>             (中ノ舞より) 中ノ舞 おもしろや 千草<br/>             にすだく虫の音の 機織る音は きりは<br/>             たりちやう きりはたりちやう つづり<br/>             刺せてふ きりぎりす 蜩 いろいろの<br/>             色音のなかに わきて我がしのぶ松虫の<br/>             声 りんりんりんりんとして 夜の声<br/>             冥々たり すはや難波の鐘の明方の あ<br/>             さまにもなりぬべし さらばよ友人なご<br/>             りの袖を 招く尾花のほのかに見えし<br/>             跡絶えて 草茫茫たるあしたの原の 草<br/>             茫茫たるあしたの原 虫の音ばかりや<br/>             残るらん虫の音ばかりや残るらん           </p> |

## B・4 《鉄輪》

作曲…尾州某。一説に藤尾勾当

作詞…不詳

初出…『新撰詞曲よしの山』（一七八四）

能…《鉄輪》

調絃…三下り

### （詞章）

忘らるる 身はいつしかに浮草の 根から思いの無いならほんに 誰を恨みんうら菊の  
霜に移ろう枯野の原に 散りも果てなで今は世に ありてぞ辛き我が夫の〔合の手①〕  
悪しかれと 思わぬ山の峰にだに 〔小合の手①〕 人の嘆きも生うなるに 況んや年月  
思いに沈む恨みの数 つもりて執心の鬼となるも理や〔合の手②〕 いでいで恨みを成さん  
と 咎振り上げ後妻の〔小合の手②〕 髪を手に絡巻いて 打つや宇つの山野 夢うつつ  
とも 別かざる浮世に 〔小合の手③〕 因果は巡り合いたり 今更さこそ悔しかるらめ さ  
て懲りや思い知れ 〔合の手③〕 ことさら恨めしき 仇し男を取って行かんと 臥したる枕  
に立ち寄り見れば 恐ろしや御幣に 三十番神在して 魍魎鬼神の穢らわしや 出よ出  
よと責め給うぞや 腹立ちや 思う夫をば とらで剩さえ 神々の責めを蒙る悪鬼の神通  
通力自在の勢い絶えて 力も弱々と 足弱車の巡り逢うべき 〔合の手④〕 時節を待つべ  
しや 先ず此の度は帰るべしと 言う声ばかりは定かに聞こえ 言う声ばかりは聞こえて  
姿は 目に見えぬ鬼とぞなりにける

「悪しかれと」以降は、能《鉄輪》の後半部分、悪鬼となった女性が男性を打ち取ろうとする場面を、ほぼそのまま引用している。冒頭の地歌独自の詞章は、シテとなる女性の心情を歌ったものとみられる。

「前弾き」がついている楽譜や音源が存在するが、これは舞地として演奏する際に便宜上つけられたもので、本来はなかったものとみられる。

「合の手①」は、能からの引用となる部分の前に、「合の手②」「合の手③」は、能において、地謡からシテ謡に変わる部分に入れられており、長い合の手に関しては能で区切りとなる部分に挿入した意図が感じられる。「合の手④」の位置は能との関連はみられない。「小合の手①」は、「打切」の部分に入れられている。

「況んや年月思いに」より「平ノリ風」となり、「いでいで恨みを成さんと」から「中ノリ風」となるが、能においても同じ個所が「平ノリ」、「中ノリ」となっている。  
ノリ型の一致や、曲の構成などから、能への理解が感じられる作品である。

《鉄輪》詞章の比較

| 地歌                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                            | 能                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                 |
|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>忘らるる 身はいつしかに浮草の 根から<br/>         思いの無いならほんに 誰を恨みんう<br/>         ら菊の 霜に移ろう枯野の原に 散りも<br/>         果てなで今は世に ありてぞ辛き我が夫<br/>         の <b>合の手①</b> 悪しかれと 思わぬ山の<br/>         峰にだに <b>小合の手①</b> 人の嘆きも生う<br/>         なるに 況んや年月 思いに沈む恨みの<br/>         数 つもりて執心の鬼となるも理や<br/> <b>合の手②</b> いでいで恨みを成さんと<br/>         咎振り上げ後妻の <b>小合の手②</b> 髪を手<br/>         に絡巻いて 打つや宇つの山野 夢うつ<br/>         つとも別かざる浮世に <b>小合の手③</b> 因<br/>         果は巡り合いたり 今更さこそ悔しかる<br/>         らめ さて懲りや思ひ知れ <b>合の手③</b><br/>         ことさら恨めしき 仇し男を取って行か<br/>         んと 臥したる枕に立ち寄り見れば 恐<br/>         ろしや御幣に 三十番神在して 魍魎<br/>         鬼神の穢らわしや 出よ出よと責め給う<br/>         ぞや 腹立ちや 思う夫をば とらで剩<br/>         さえ 神々の責めを蒙る悪鬼の神通 通<br/>         力自在の勢い絶えて 力も弱々と<br/>         足弱車の巡り逢うべき <b>合の手④</b> 時節<br/>         を待つべしや 先ず此の度は帰るべしと<br/>         言う声ばかりは定かに聞こえ 言う声ば<br/>         かりは聞こえて 姿は 目に見えぬ鬼と<br/>         ぞなりにける</p> | <p>(後半の地謡から)<br/>         悪しかれと 思はぬ山の峰にだに 思は<br/>         ぬ山の峰にだに <b>打切</b> 人のなげきはお<br/>         ふなるに いはんや年月 思にしづむ恨<br/>         の数 積つて執心の鬼となるも理や<br/>         いでいで命を取らん いでいで命を取ら<br/>         んと しもとを振り上げうはなりの 髪<br/>         を手にかまいて 打つやうつの山の<br/>         夢現とも 分かざるうき世に 因果はめ<br/>         ぐりあひたり 今さらさこそくやしかる<br/>         らめ さて懲りや思ひ知れ ことさら恨<br/>         めしき ことさら恨めしき あだし男を<br/>         取つて行かんと 臥したる枕に立ち寄り<br/>         見れば 恐ろしや御幣に 三十番神まし<br/>         まして 魍魎鬼神は穢らはしや 出でよ<br/>         出でよと責め給ふぞや 腹立ちや思ふ夫を<br/>         ば 取らであまさへ神々の 責を蒙る悪<br/>         鬼の神通通力自在の勢ひ絶えて 力もた<br/>         よたよと 足弱車の廻り逢ふべき時節を<br/>         待つべしや まづこの度は帰るべしと<br/>         いふ声ばかりはさだかに聞え いふ声ば<br/>         かり聞えて 姿は目に見えぬ鬼とぞなり<br/>         にける 目に見えぬ鬼となりにけり</p> |

## B・5 《梓》

作曲…藤尾勾当。尾州某とも

作詞…不詳。尾州某とも

初出…『大成糸の節』（一七九四）

能…《葵上》

調絃…三下り

### （詞章）

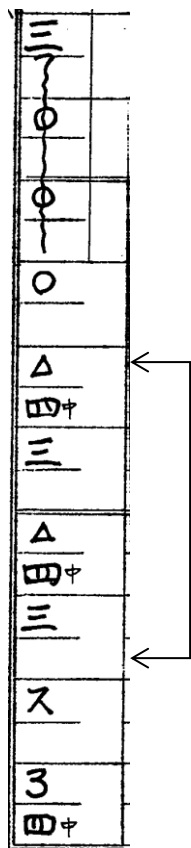
三つの車に法の道　夕顔の宿の破れ車　あら恥ずかしや我が姿　梓の弓の末弭に　現れ出  
でし面影の　昔忘れぬ取成りを　あれ　あれを見や　蝶は菜種に　菜種は蝶に　番い離れ  
ぬ妹背の中を見るに妬まし　また羨まし　われは磯辺の友無し千鳥　病葉に病葉に　訪う  
は嬉しやさりとては　訪われて今は恥かしの　漏れて浮名の手束弓　射いた白羽の矢は伊  
達姿　人の目に付く悪戯髪の　何ぼ言われし仲なれど今は秋田の落とし水　五月　雨ほど  
恋しのばれて　サユエ　猶々つきぬ恨みぞや　共に奈落の苦しみ見せんと　彼方へ引けば  
こなたへ引く　生きては帰り帰りては　あら名残惜しや〔合の手①〕　恋は曲者　いろいろ  
ろの花や紅葉に移り気の　男は厭よ　さりとては　ほんに辛苦も厭わぬ悪性　底の心は水  
臭い流れの私が辛抱を思うてみさんせ　あた胴欲な　厭とよそれは空言よ　袖のしぐれは  
誠の血潮　染めし誓いも偽りならず　二人交わさせし契りも今は　仇になり行く妬みの程  
を　思い知らずや思い知れと　鉄杖振り上げ丁々々〔合の手②〕　打つや現に手にも取られ  
ず　露か　蛭か　ちらちらちら　兎手柏手に結びし水の　笹の葉また立ち寄るを　幣おつ  
とつて　謹請東方南方北方西方　各々守りの冥府の神仏坐せば　怨霊何処に止まるべきと  
祈り祈られかっぱと転び見えけるが　今より後は来るまじと　言う声ばかりは雲に響き  
言う声ばかりは雲に残つて姿は見えずなりにけり　この暁にそら吹く風　この暁に空吹く  
風　夜は白々と明けにけり

この曲は、能《葵上》からの直接の引用はきわめて少ないが、「梓の弓に誘われて登場した怨霊が、念仏によつて退けられる」という筋書きが能と一致している。また傍線……の部分、能《葵上》の詞章の念仏の内容を略したものとみることができる。

冒頭の地歌独自の詞章がかなり世話に砕けた印象を受ける。

「猶々つきぬ恨みぞや」から「中ノリ風」となり、「恋は曲者」から再び緩徐になる。「思い知らずや思い知れと」から雰囲気が変わり「合の手②」に入る。その後「打つや現」から能を思わせる独特の節回しとなるが、地歌独自の詞章であるためか、三つのノリ型が入り混じっているようなりズムの歌であり、三つのノリ型風いずれかに分類することが困難な「特殊な型」である。「怨霊何処に止まるべきと」から「姿は見えずなりにけり」までは「中ノリ風」である。

譜例 1 合の手の始まりにみられる音型の繰り返し



《梓》詞章の比較

| 地歌                                                                                                                                                                                                                                                | <p>三つの車に法の道 夕顔の宿の破れ車<br/>あら恥ずかしや我が姿 梓の弓の末弭に<br/>現れ出でし面影の 昔忘れぬ取成りを<br/>あれ あれを見や 蝶は菜種に 菜種は<br/>蝶に 番い離れぬ妹背の中を見るに妬ま<br/>し また羨まし われは磯辺の友無し千<br/>鳥（中略）</p>                                                                                                                                                                                                             |
|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 能                                                                                                                                                                                                                                                 | <p>（一声の後より）三つの車に法の道 火<br/>宅のうちをや出でぬらん 夕顔の宿の<br/>破車 やる方なきこそ悲しけれ 浮世<br/>は牛の小車の 浮世は牛の小車の 廻る<br/>や報なるらん およそ輪廻は車の輪の如<br/>く 六趣四生を出でやらず 人間の不定<br/>芭蕉泡沫の世の習ひ 昨日の花は今日の<br/>夢と 驚かぬこそ愚かなれ 身の憂きに<br/>人の恨みのなほ添ひて 忘れもやらぬ我<br/>が思ひ せめてや暫し慰むと 梓の弓に<br/>怨霊のこれまで現れ出でたるなり あら<br/>恥かしや今とても 忍車のわが姿 月を<br/>ば眺め明かすとも 月をば眺め明かすと<br/>も 月には見えじかげろふの 梓の弓の<br/>うらはずに 立ち寄り憂きを語らん（後<br/>略）</p> |
| <p>打つや現に手にも取られず 露か 螢<br/>か ちらちらちら 兎手柏手に結びし<br/>水の 笹の葉また立ち寄るを 幣おつと<br/>つて 謹請東方南方北方西方 各々守り<br/>の冥府の神仏坐せば 怨霊何処に止ま<br/>るべきと 祈り祈られかつぱと転び見え<br/>けるが 今より後は来るまじと 言う声<br/>ばかりは雲に響き 言う声ばかりは雲に<br/>残つて姿は見えずなりにけり この暁に<br/>そら吹く風 この暁に空吹く風 夜は<br/>白々と明けにけり</p> | <p>（イノリの後より）<br/>如何に行者早帰り給へ 帰らで不覚し給<br/>ふなよ たとひ如何なる悪霊なりとも<br/>行者の法力尽くべきかと 重ねて珠数を<br/>押しもんで 東方に降三世明王 東方<br/>に降三世明王 南方軍荼利夜叉 西方<br/>大威徳明王 北方金剛 夜叉明王<br/>中央大聖 不動明王 莫三曼多縛<br/>日羅赦戰拏摩訶路灑拏破多耶吽怛羅吨<br/>干曼 聴 我説者得大知恵 知我心者<br/>即身成仏（後略）</p>                                                                                                                                |



## B・6 《藤戸》

作曲…尾州某

作詞…不詳

初出…『増補大成系のしらべ』（一八二二）

能…《藤戸》

調絃…三下り

### （詞章）

憂しや古を忘れんと思う心こそ 忘れぬよりは思いなれ 然るにても身は徒波の定めな  
くとも 「小合の手①」 科に寄る辺の水にこそ 濁れる心の罪あらば 重き罪科もあるべき  
に 由なかりける海路の標 思えは三途の瀬踏なり 「合の手①」 然るにても忘れ難や  
あれなる浮洲の岩の上に 我を連れて行く水の 氷のごとくなる刀を抜いて 胸の辺りを  
刺し通し 刺し通さるれば 肝魂も 消え消えとなる所を そのまま海へ押し入れられ  
て 千尋のそこに沈みしに 「小合の手②」 折節引く汐に 折節引く汐に 引かれて行く  
水の 浮きぬ沈みぬ埋れ木の 岩の狭間に流れかかつて 藤戸の水底の悪龍の水神となつ  
て 恨みを成さんと思いに 「合の手②」 思わざるに御弔いの 御法の御舟に法を得て  
「小合の手③」 即ち弘誓の舟に浮かべば 水馴れ棹 「小合の手④」 生死の海を渡り渡り  
て 願いのままに易々と 彼の岸に至りつつ 彼の岸に着きにけり

能《藤戸》の後シテのサシ謡から曲尾より詞章を引用しているが、ワキ謡から問答の少し後までが省略されている。傍線……で示した部分は独吟である。

尾州某の作曲とされるが、《梓》と同様、曲調には芝居歌作品と通ずる部分が多く、曲調、形式からはA作品に分類できる作品である。

「合の手①」は、詞章の引用を中略している部分にあたる。「小合の手②」の位置は、能において地謡からシテ謡に変わる部分にあたる。「合の手②」「小合の手①」「小合の手③」、独吟の位置には、特に能との関連はみられない。

「然るにても忘れ難や あれなる」の独吟の後より、「平ノリ」や「中ノリ」のリズムで歌う部分と母音を長く伸ばす部分が入り交った「特殊な型」となる。能では「然るにても」から「平ノリ」、「刀を抜いて」のあたりから「中ノリ」となっている。曲の大部分が「ノ

リ型風」になっではいるが、能と比較するとリズムの差異が大きく、能のリズムを意識しつつ独自に作曲したとみることができる。

「同音合わせ撥の連続」や「同音の連打」など、芝居歌独特の旋律が随所にみられる。

《藤戸》詞章の比較

| 地歌                                                                                                      | 能                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                             |
|---------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>憂しや古を忘れんと思う心こそ 忘れぬよりは思いなれ 然るにても身は徒波の定めなくとも 科に寄る辺の水にこそ 濁れる心の罪あらば 重き罪科もあるべきに 由なかりける海路の標 思えは三途の瀬踏なり</p> | <p>(後シテサシ謡) 憂しや思ひ出でじ 忘れんと思ふ心こそ 忘れぬよりは思ひなれ ざるにても 身はあだ波の 定めなくとも科によるべの水にこそ 濁る心の罪もあらば 重き罪科も有るべきに よしなかりける 海路のしるべ 思へば 三途の瀬踏なり 不思議やな早明方の水上より 怪したる 人の見えたるは 彼の亡者もや見ゆらんと 奇異の思をな しなければ (中略) 思の外に一命を 召されし事は馬にて 海を渡すよりも これぞ稀代の例なる ざるにても忘れがたや あれなる浮洲の 岩の上に我を連れて行く水の 氷の如くなる刀を抜いて 胸のあたりを刺し通し 刺し通さるれば 肝魂も 消え消えと なる所を 其まま海に押し入れられて 千尋の底に沈みしに をりふし引く汐に をりふし引く汐に 引かれて行く波の 浮きぬ沈みぬ埋木の 岩のはさまに 流れかかつて 藤戸の水底の 悪竜の水 神となつて恨みを為さんと思ひしに 思はざるに 御弔の 御法の御船に法を得て 即ち弘誓の船に浮べば 水馴棹さし 引きて行く程に 生死の海を渡りて願ひの如くにやすやすと 彼の岸に至りいたりて 彼の岸に至り至りて 成仏得脱の 身となりぬ 成仏の身とぞなりにける</p> |

C その他・手事物

C・1 《融》

作曲…石川勾当

作詞…不詳

初出…『歌曲時習考』（一八八〇）

能…《融》

調絃…本調子↓二上り↓三下り↓本調子（二、一、三の順に一音ずつ上げていく）

詞章

〔前弾〕あの籬が島の松蔭に 名月に舟を浮かべ 月宮殿の白衣の袖も 三五夜中の新月の色 千重振るや 雪を廻らす雲の袖 （二上り） 射すや桂の枝々に 光を花と散らす粧い ここにも名に立つ白河の波の あら面白の曲水の盃 うけたりうけたり 遊舞の袖（三下り）〔手事①〕 あら面白の遊樂や そも明月の其の中に まだ初月の宵々に 影も姿も少なきは いかなる謂なるらん それは西岫に 入日の未だ近ければ その影に隠さるる たとえば月のある夜は 星の薄きが如くなり 青陽の春の始めには 霞む夕べの遠山 黛の色に三日月の 影を舟にも例えたり 又水中の遊魚は 釣針と疑い 雲上の飛鳥は 弓の影とも驚く 一輪も降らず 萬水も上らず 鳥は池辺の樹に宿し 魚は月下の波に臥す 聞くともあかじ秋の夜の 鳥も鳴き 〔手事②〕（二段から本調子） 鐘も聞こえて 月もはや 影かたむきて明方の 雲となり雨となる この光陰に誘われて 月の都に入り給う粧い あら名残惜しの面影や 名残惜しの面影

「石川の三つ物」と称される作品の一つで、手事を二つもつ京風手事物形式の作品である。詞章は、能《融》の後シテのサシ謡の途中から曲尾までをそのまま引用しており、詞章の組み替えや省略等もされていない。サシ謡の引用されていない部分は、融の亡霊が名乗りをする場面であり、手事物の詞章にそぐわないとされた可能性がある。「あの籬が島の」以降は、融の大臣の亡霊が昔語りをし、遊樂を見せたり、月を賞したりという美しい場面が描写されている。

手事物の中でも特出して長い前弾きをもつが、九州系では演奏せず、短い前弾きが伝承されている。能では、サシの前に「出羽」という囃子によりシテが登場するが、それを前弾きで表現したと考えることもできる。能では「さすや桂の」よりシテ謡から地謡に変わ

るが、地歌ではここから「二上り」に転調している。「手事①」は、能で「早舞」が舞われる箇所にあたる。能では「早舞」の後、地謡となるが、「それは西岫に」よりシテ謡となり、地歌ではここが独吟となっている。

ここまでは、能と地歌の構成に関連がみられるが、「手事②」の箇所は、特に関連がみいだせない。「手事②」は「初段」と「二段」に分けて捉える場合もあり、序盤（初段）の三下りで演奏する部分は、非常に転調が激しく特徴的であるが、この部分は九州系では演奏されない。

《融》詞章の比較

地歌

能（出羽より）

前弾 あはがきの籬が島の松蔭に 名月に舟を  
 浮かべ 月宮殿の白衣はくやくの袖も 三五夜中  
 の新月の色 千重振るや 雪を廻らす雲  
 の袖（二上り）射すや桂の枝々に 光を  
 花と散らす粧はない ここにも名に立つ白河  
 の波の あら面白の曲水の盃 うけたり  
 うけたり 遊舞の袖（三下り）  
 手事① あ  
 ら面白の遊樂や そも明月の其の中に  
 まだ初月の宵々に 影も姿も少なきは  
 いかなる謂なるらん それは西岫さいうに  
 入日の未だ近ければ その影に隠さる  
 たとえば月のある夜は 星の薄きが如く  
 なり 青陽せいようの春の始めには 霞む夕べの  
 遠山 黛まいの色に三日月の 影を舟にも  
 例えたり 又水中の遊魚は 釣針と疑い  
 雲上の飛鳥は 弓の影とも驚く 一輪  
 も降らず 萬水も上らず 鳥は池辺ちべの樹  
 に宿し 魚は月下の波に臥す 聞くとも  
 あかじ秋の夜の 鳥も鳴き  
 手事②（二  
 段から本調子）鐘も聞こえて 月もはや  
 影かたむきて明方あけがたの 雲となり雨となる  
 この光陰こういんに誘われて 月の都に入り給う  
 粧はない あら名残惜しの面影や 名残惜  
 しの面影

出羽 忘れて年を経し物を 又いにしへ  
 に帰る波の 満つ塩釜の浦人の今宵の月  
 を陸奥の 千賀の浦曲うらわも遠き世に 其名  
 を残すまうちきみ 融おとの大臣とは我が事  
 なり 我塩釜の浦に心を寄せ あはがきの籬が  
 島の松蔭に 名月に舟を浮かめ 月宮殿  
 の白衣の袖も 三五夜中の新月の色 千  
 重ふるや 雪を廻らす雲の袖 さすや桂  
 の枝々に 光を花と散らす粧はなひ ここに  
 も名に立つ白河の波の あら面白や曲水  
 の盃 浮けたり浮けたり遊舞の袖  
 早舞  
 あら面白の遊樂や そも名月の其中に  
 まだ初月の宵々に 影も姿も少なきは  
 如何なる謂なるらん それは西岫さいうに 入  
 日のいまだ近ければ 其影に隠さる  
 たとへば月のある夜は 星の薄きが如く  
 なり 青陽せいようの春の始めには 霞む夕の遠  
 山 黛まいの色に三日月の 影を舟にも譬へ  
 たり 又水中の遊魚は 釣針と疑ひ 雲  
 上の飛鳥は 弓の影とも驚く 一輪も降  
 らず 万水も昇らず 鳥は地辺の樹に宿  
 し 魚は月下の波に伏す 聞くとも飽か  
 じ秋の夜の 鳥も鳴き 鐘も聞えて 月  
 も早 影傾きて明方あけがたの 雲となり雨とな  
 る 此光陰こういんに誘はれて 月の都に 入り  
 給ふ粧はなひ あら名残惜しの面影や名残惜  
 しの面影

## C・2 《神楽》

作曲…津山検校

作詞…不詳

初出…『新曲糸の節』（一七五七）

能…《室君》

調絃…二上り

### （詞章）

裁ち縫わん 衣着し人も無きものを なに山姫の布晒すらん 棹の嵐の 長閑にて 日陰  
も匂う天地の開けしも 挿し下ろす棹の滴りなるとかや 「手事」 さる程に さる程に 春  
過ぎ夏長けて 秋既に暮れゆくや 時雨の雲も重なりて 峰白妙に降り積もる 越路の雪  
の深さをも 知るや印の棹立てて 豊年尽きぬ行く末を 図るも棹の唄歌いていざや遊ば  
ん 此処とんていや此処とんていや 室山陰の神神楽 加茂の宮居は幾久し

能《室君》の、「棹の歌」とよばれる部分と詞章の一致する部分が多いが、これは、現在も加茂神社の「小五月祭」で奉納演奏が行われている「棹の歌」が典拠とみられる。この曲のみ、次に《室君》と「棹の歌」の詞章を挙げ比較を行う。

### ◆能《室君》「棹の歌」の詞章

たち縫わぬ 衣きし人もなきものを なに山姫の 布さらすらん 棹の山風のどかにて  
日影も匂う天地の ひらけしもさしおろす 棹のしたたりなるとかや 然れば春すぎ夏た  
けて 秋すでに暮れゆくや 時雨の雲もかさなりて 嶺白妙に降りつもる 越路の雪の深  
さをも 知るやしるしの棹たてて 豊年月の行く末を はかるも棹の歌 うたいていざや  
遊ばん 棹の歌御うたい一段めでとう候 いつもの如く神前にて神楽を参らせられ候え  
こことてや 室山陰の神垣の 加茂の宮居は ありがたや

### ◆「小五月祭」における「棹の歌」の詞章<sup>50</sup>

- （一）たち縫わん たち縫わん 衣きし人も無きものを 何山姫の 布さらすらん
- （二）棹のあらし 棹のあらし 長閑にて 日かげも匂ふ 天地ひらけしも さしおろす

<sup>50</sup> 柏山泰訓執筆担当『室の祭礼』兵庫…御津町教育委員会、第二版、一九九七年、十八頁。

棹のしたたりなるとかや

(三) さる程に さる程に 春過ぎて夏たけて 秋すでに暮れゆくや 時雨の雲の重なり  
て 峰しろたへに降りつもる 越路の雪の ふかさをも

(四) しるやしるしの 棹たてて 豊年月の行末を はかるも棹の歌 うたひて いざや  
遊ばん

(五) こことてや こことてや 室山かげの神かつら 賀茂の宮居は幾久し

「小五月祭」における「棹の歌」をみると、各歌の最初の句の繰り返しの有無を除けば、地歌《神楽》の詞章とほぼ一致していることが分かり、《室君》よりもその一致度合いは高い。地歌の曲名《神楽》についても、能《室君》では「神楽」という囃子が奏されるが、典拠の「棹の歌」が神事で演奏されるものであるため、《室君》で「神楽」が奏されること、曲名の由来と断定することはできない。

このような理由から、この曲の詞章が能からの引用であるかどうかは、現段階では判断できない。詞章が「棹の歌」とほぼ一致しているにもかかわらず、《神楽》を「謡物」として扱っていない歌本が多いのは、詞章が能ではなく典拠である「棹の歌」からの引用だという認識があったためと考えることもできる。

曲は「マクラ」や「チラシ」、それに準ずる部分を持たない古い手事物形式で、ほぼ同じ旋律が二回演奏される点が特徴的である。

全曲を通して、同じC作品の《鳥追》との「打合せ」<sup>51</sup>が可能である。

<sup>51</sup> 別の曲や、同じ曲の別の部分を同時に演奏すること。



### C・3 《鳥追》

作曲…松浦検校

作詞…南枝

初出…『大成糸の節』（一七九四）

能…《鳥追》

調絃…二上り

#### （詞章）

君が住む 辺りの草に宿りても 見せばや袖に あまる白露 晩稲おくての小田も刈りし穂に  
色づく秋の群鳥むらとりを 苧生おうの浦舟漕ぎ連れて あれあれ見よや よその舟にも 「手事」 打  
つ鼓 打つ鼓 しどろに声立てて 日を暮らし夜を明かし 思い乱るる我が心 空に鳴子  
の群雀むらすめ 稲葉の雲と立ち去りて 行方も知らぬ身の程を 哀れとだにも云う人の 涙の数  
添えて 卑しき業わざを忍び音に 笛と鼓の声諸共に 追いつ追われつ 幾たびか 鳥追舟の  
浮き沈み

能《鳥追》の「鳴子の段」とよばれる部分と、その少し前のシテ、ワキ、ワキヅレ、子  
方の詞から詞章を引用している。人名の「花若」や、「家を離れて三五の月の」の等、具  
体的な描写を省略するなどの再構成をしており、能《鳥追》の物語を知らなくとも鑑賞しや  
すい内容となっている。詞章の「日を暮らし」は、ワキヅレの「日暮」を振ったものとみ  
られる。

作詞の「南枝」とは、歌舞伎役者の初代中山よしを（一七七六～一八一八）、の俳名では  
ないかと思われる<sup>52</sup>。

手事物形式で、全曲を通して《神楽》との「打合せ」が可能であり、明らかに《神楽》  
を意識した作曲となっている。前述の様に《神楽》は能からの引用であると断定できない  
が、《神楽》と「打合せ」が可能な曲の題材を能にしたのは、《神楽》が能とかかわりのあ  
る作品であることへの意識があったためと考えることもできる。地歌《神楽》《鳥追》の詞  
章を比較すると、「舟に乗っている」という状況が同じでありながら、《神楽》は祝いの神

<sup>52</sup> 国立劇場調査養成部 調査記録課『歌舞伎俳優名跡便覧』〔第四次修訂版〕前掲、三七四  
頁。なお、三代目中山よしを（一七九〇～一八五八）も後に「南枝」を名乗っているが、  
時代が一致しない。

事の場面、《鳥追》は母子が悲しみながら鳥追いをする場面と、対照的でもある点に興味深い。

「手事」は、能において「鳴子の段」に入る箇所に入っている。「手事」では《神楽》と同様に、ほぼ同じ旋律が二回演奏されるが、これは《神楽》との打合せを意識した結果とみられる。

《鳥追い》詞章の比較

| 地歌 | <p>君が住む 辺りの草に宿りても 見せば<br/>や袖に あまる白露 晩稻<small>おおくて</small>の小田<small>おくだ</small>も刈り<br/>し穂に 色づく秋の群鳥<small>むらトリ</small>を 苧生<small>おとう</small>の浦舟<br/>漕ぎ連れて あれあれ見よや よその舟<br/>にも <b>手事</b> 打つ鼓 打つ鼓 しどろに声<br/>立てて 日を暮らし夜を明かし 思い乱<br/>る我が心 空に鳴子の群雀<small>むかしすめ</small></p>                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                           |
|----|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 能  | <p>(前略) 悲しやな家人にだにも恐るれば<br/>身の果さらに白露の 晩稻<small>おおくて</small>の小田<small>おくだ</small>も刈り<br/>しほに 色づく秋の群鳥<small>むらトリ</small>を おふの浦舟<br/>漕ぎつれて 思ひ思ひの囃子物 あれあ<br/>れ見よや よその舟にも (鳴子の段)<br/>打つ鼓 打つ鼓 空に鳴子の群雀 追ふ<br/>声はほうほうさて いつも太鼓はどうと<br/>うど風の打つや夕波の 花若よ悲しくと<br/>も追へや追へや水鳥 いとせめて 恋し<br/>き時は鳥羽玉<small>うば</small>の 夜の衣をうちかへし<br/>夢にも見るやとて まどろめばよしなや<br/>夜寒の砧打つとかや 恨<small>うらみ</small>は日々に増さ<br/>れども 恨<small>うらみ</small>は日々に増されども 哀と<br/>だにもいふ人の 涙の数そへて 思ひ乱<br/>れて我が心 しどろもどろになる鼓の<br/>條<small>すじ</small>なき拍子とも人や聞くらん 恥かしや<br/>家を離れて三五の月の 隈なき影とても<br/>待ち恨みとことには 心の闇はまだ晴れ<br/>ず すはすは群鳥の すはすは群鳥の<br/>稻葉の雲と立ち去りぬ 又いつかあふ坂<br/>の 木綿<small>いうづけどり</small>附鳥か別れの声 鼓太鼓打ち連<br/>れて猶もいざや追おうよ<br/>(後略)</p> |

C・4 《三津山》

作曲…光崎検校

作詞…五代目三井次郎右衛門高英

初出…曲名は『箏曲示例』所収「乱曲箏譜目録」(一八三五)

詞章は『琴曲新千代の寿』(一八四二)

能…《三山》

調絃…三下り↓本調子↓二上り↓三下り↓本調子 (三→二→一↓三の順に一音ずつ上げていく)

(詞章)

足引きの 大和の国 三津山の昔を語るに 世も(本調子) 古へに櫓の葉や 膳夫の公成と  
いふ人ありける その頃耳成の里に 桂子と申す女あり また畝傍の里に 桜子といへる  
遊女ありしに かの膳夫の公成に 契りをこめて 玉櫛笥 二道かくる蜘蛛の いと浅か  
らぬ思ひ夫 月の夜雨の夜半とても 心を染めて通ふ神 「合の手①」住家も二つの里なれ  
ば 月よ花よと争ひしに かの桜子になびきてぞ 耳成の里へは来ざりける 「手事①」

(二上り) そのとき桂子恨み侘び さてはわが身も変わる世の 夢も暫しの桜子に 心を寄  
せてこなたをば 忘れ偲ぶの軒の草 はや離れがれになりぬるは もとよりも頼まれぬ  
二道なればこのままに 住み果つべしと思ひきや 「合の手②」ただ何事も時に従ふ世の習  
いことさら春の頃なれば 盛りなる桜子に 移る人をば恨むまじ 「手事②」(三下り) わ  
れは花なき桂子の わが身を知れば春ながら 秋にならんも 理や さるほどに起きもせず  
寝もせで夜半を明かしては 春のものとして長雨降る 夕暮に立ち出でて 入相もつくづく  
と 南は香具山 西は畝傍の山に咲く 桜子の里見れば さらに他目も花やかに (本調子)羨  
ましくぞ思ほゆる あら恐ろしの山風や われは畝傍の里に住む 桜子といふ者なるが  
かやうに物に狂ふぞや 因果の花につき慕ふ 嵐をよけてたび給へ 「合の手③」光り散る月  
の桂も花ぞかし もとより時ある春の花 咲くは僻事なきものを 花もの言はずと聞きつ  
るに など言の葉を聞かすらん 春いくばくの 身にしありて 影唇を動かすなり さて花  
は散りてもまたもや咲かん 春は年とし 頃は弥生の 雲となり桜子 雲となり桜子 花は  
根に帰り 妬さも妬し後妻を打ち散らし打ち散らす 打てども去らぬは 煩悩の犬桜 花  
に伏して泣き叫ぶ 悩み乱るる花心 有明桜光り添ふ 月の桂子 一つ夜に 二道かくる三  
つの山 争ひ立つや春霞 天の香具山 畝傍山 たなびき染めて耳成山 春の夜満ちてほの  
ぼのと東雲の空となりにけり

能《三山》の初同<sup>53</sup>の一部と、地クリより曲尾の間から、詞章を適宜抽出して引用している。

詞章のほとんど能《三山》からの引用であるが、詞章の組み替えや抜粋、表現の変化が多く、再構成をした形といえる。能の前半部分である初同の詞章「一つ世に二道かけて三山の」を終盤に引用して終わりにつなげている。このような引用のしかたや、再構成をしていることなどから、作詞者が能の詞章を熟知していたことがうかがえる。手事物としては特出して詞章が長大であり、能《三山》の物語の中心となる部分、シテの語りから最後まで物語の筋書きが辿れる内容となっている。それと関連し、引用されている範囲が非常に広いことが一つの特徴である。また、手事を二つもつ曲において、詞章の半分以上が後歌にあてられていることも他に例がない。

最後部分「争ひ立つや春霞」以降は地歌独自の詞章だが、この部分は能では「西に生るる一声の 御法を受くるなり あと吊いてたび給へ」となっており、おそらく、地歌の詞章にはシテが十念を授かる場面が引用されていないため、矛盾しない詞章に作り替えたと考えられる。地歌独自の詞章ではあるが、夜明けに浮かぶ三つの山の景色で終わり、夢幻の空気を感ぜさせる内容である。

手事や合の手、独吟の位置などの構成からみると、能の構成は意識していないとみて良い。唯一、「合の手③」と「一声」の位置が対応しているが、他に構成において能との関連が感じられる点がないため、偶然である可能性が高い。手事は京風手事物風に作られているが、歌の部分は、「同音合わせ撥の連続」や、「同音のスクイ撥の連続」がみられるなど、芝居歌に通ずる雰囲気をもっている部分が多い。中歌の「合の手②」の後の「ただ何事も」からは「大ノリ風」、「光散る」からは「大ノリ風」だが、一部に「中ノリ」に近い歌い方も混ざっている独特の歌である。

<sup>53</sup> 能の中で、初めて地謡が謡う部分。

《三津山》詞章の比較（全三頁）

| 地歌                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                        | 能（地クリより）                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                         |
|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>足引きの 大和の国 三津山の昔を語る<br/> に 世も古へに檜の葉や 膳夫の公成と<br/> いふ人ありける その頃耳成の里に<br/> 桂子と申す女あり また畝傍の里に 桜<br/> 子といへる遊女ありしに かの膳夫の公<br/> 成に 契りをこめて 玉櫛笥 二道かく<br/> る蜘蛛の いと浅からぬ思ひ夫 月の夜<br/> 雨の夜半とても 心を染めて通ふ神 合の<br/> 手 住家も二つの里なれば 月よ花よと<br/> 争ひしに かの桜子になびきてぞ 耳<br/> 成の里へは来ざりける 手事① そのとき<br/> 桂子恨み侘び さてはわが身も変わる世<br/> の 夢も暫しの桜子に 心を寄せてこな<br/> たをば 忘れ偲ぶの軒の草 はや離れが<br/> れになりぬるはもとよりも頼まれぬ<br/> 二道なればこのままに 住み果つべしと<br/> 思ひきや 合の手② ただ何事も時に従ふ<br/> 世の習い ことさら春の頃なれば 盛り<br/> なる桜子に 移る人をば恨むまじ 手事<br/> ② われは花なき桂子の わが身を知れ<br/> ば春ながら 秋にならんも理や さる<br/> ほどに起きもせず 寝もせで夜半を明か<br/> しては 春のものとて長雨降る 夕暮に<br/> 立ち出でて 入相もつくつくと 南は香<br/> 具山 西は畝傍の山に咲く 桜子の里見れ<br/> ば さらに他目も花やかに 羨ましくぞ<br/> 思ほゆる</p> | <p>そもそも大和の国三山の物語 世も古に<br/> ならの葉や かしはでの公成といふ人あ<br/> り（シテサシ謡）又其頃桂子桜子とて 二<br/> 人の遊女ありしに 彼のかしはでの公成<br/> に 契をこめて 玉手箱 二道かくるさ<br/> さがにの いと浅からぬ思夫の 月の夜<br/> まぜに行き通ふ 住家はうねみ耳無山<br/> 里も二つの采女のきぬ 花よ月よと 争<br/> ひしに 男うつろふ花心 かの桜子に靡<br/> き移りて 耳無の里へは来ざりけり<br/> 其時桂子恨みわび さては我には変る世<br/> の 夢も暫しの桜子に 心を染めて此方<br/> をば 忘れ忍ぶの軒の草 はや枯れ枯れ<br/> になりぬるぞや（クセ）桂子思ふやう も<br/> とよりも頼まれぬ 二道なればそのまま<br/> に 有り果つべしと思ひきや其うへ何事<br/> も 時に随ふ世の習 ことさら春の頃な<br/> れば 盛なる桜子に うつる人をば恨む<br/> まじ 我は花なき桂子の 身を知れば春<br/> ながら 秋にならんも理や さるほどに<br/> 起きもせず 寝もせで夜半を明かして<br/> は 春のものとて長雨降る 夕暮に立ち<br/> いでて 入相もつくつくと 南は香久山<br/> や 西はうねみの山に咲く さくら子の<br/> 里見れば よそも花やかに 羨ましく<br/> ぞ覚ゆる</p> |

|                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                              |                                                                                                                                        |
|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>地歌</p> <p>あら恐ろしの山風や われは畝傍の里に住む 桜子といふ者なるが かやうに物に狂ふぞや 因果の花につき慕ふ 嵐をよけてたび給へ</p>                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                               |                                                                                                                                        |
| <p>能（中略）</p> <p>なう上人 此みみなしの山嵐に 吹きさそはれて来りたり これこれ助けたび給へ 我はあのうねみ山に住む 桜子といはれし女なるが 風の狂ずる心乱に かやうに狂ひさぶらふなり さりとは上人よ 因果の花につき崇る 嵐をのけてたび給へ あら羨ましの桜子や 又花の春になるよなう 詞忘れて年を経しものを 見よかし顔に桜子の 花のよそ目も妬ましや 一声 光散る 月の桂も花ぞかし たれ桜子に 移るらん カケリ盛とて 光を埋む花心 争ひかねて桂子が恨みぞまさる 桜子の 花も散りなば青葉ぞかし などや桂をへだつらん 恥かしやなほ妄執は有明の 俤きぬ恨みを御前にて懺悔の姿を現すなり あれ御らんぜよ桜子の よそめにあまる花心 ことわり過ぐる景色かな もとより時ある春の花咲くは僻事なきものを 花ものいはずと聞きつるに など言の葉を聞かすらん 春いくばくの身にしあれば 影唇を動かすなり さて花は散りても 又も咲かん 春は年々 頃は弥生に</p> | <p>合の手③</p> <p>光り散る月の桂も花ぞかし</p> <p>もとより時ある春の花 咲くは僻事なきものを 花もの言はずと聞きつるになど言の葉を聞かすらん 春いくばくの身にしありて 影唇を動かすなり さて花は散りてもまたもや咲かん 春は年どし 頃は弥生の</p> |

| 地歌 | <p>雲となり桜子 雲となり桜子 花は根に<br/>         帰り 妬<small>ねた</small>さも妬<small>ねた</small>し後妻<small>のちつま</small>を打ち散らし打ち<br/>         散らす 打てども去らぬは 煩惱<small>ぼんぼ</small>の犬桜<br/>         花に伏して泣き叫ぶ 悩み乱るる花心<br/>         有明桜光り添ふ 月の桂子 一つ夜に<br/>         二道<small>ふたみち</small>かくる三つの山 争ひ立つや春霞<br/>         天の香具山 畝傍山 かなやま うねび<br/>         たなびき染めて耳成<br/>         山 春の夜満ちてほのぼのと 東雲<small>しのめ</small>の空<br/>         となりにけり</p>                                                                                                                                                                                                                                                                |
|----|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 能  | <p>又花の咲くぞや 又花の咲くぞや 見れ<br/>         ばよそめも妬ましき 花のうはなり打た<br/>         んとて桂の立枝を折り持ちて みみなし<br/>         の山風 松風春風も 吹き寄せて吹き寄<br/>         せて 雪と散れ桜子 雲となれ桜子 花<br/>         は根に帰れ われも人知れず 妬さも妬<br/>         し後妻を 打ち散らし打ち散らす 中に<br/>         打てども去らぬは家の 犬桜花に伏して<br/>         吠え叫び悩み乱るる花心 そねみの病と<br/>         なりし 因果の焰の緋ざくら子 さて懲<br/>         りやさて懲りや あらよそめをかしや<br/>         因果の報はこれまでなり 花の春一時の<br/>         恨を晴れて速に 有明桜光そふ 月の桂<br/>         子もろともに 西に生るる一声の 御法<br/>         を受くるなり あと弔いてたび給へ<br/>         (初同) 一つ世に二道かけて三山の 二<br/>         道かけて三山の 名を聞くだにも久方の<br/>         天の香久山いつしかに 語るもよそなら<br/>         ず わが耳無やうねみ山争ひかねて池水<br/>         に 捨てし桂の身の果を弔ひ給へ上人よ<br/>         弔ひ給へ上人よ</p> |



## C・5 《西行桜》

作曲…菊崎検校

作詞…絆屋孫八<sup>えきぬや</sup>

初出…『新大成系のしらべ』（一七八八）

能…《西行桜》

調絃…本調子↓二上り↓三下り

### （詞章）

九重に咲けども花の八重桜 幾代<sup>いくよ</sup>の春を重ぬらん しかるに花の名高きは 先ず<sup>ま</sup>初花を急  
 ぐなる 近衛殿<sup>このえどの</sup>の糸桜 「合の手①」 見渡せば柳桜を扱<sup>く</sup>き混せて 都は春の錦燦爛たり  
 千本の桜を植え置き その色所名に見する 千本<sup>せんぼん</sup>の花盛り雲路<sup>くもじ</sup>や雪に残るらん 「合の手  
 ②」 毘沙門道の花盛り 四王天<sup>しおうてん</sup>の栄華も これにはいかで優<sup>まさ</sup>るべき 上なる黒谷下河原  
 昔遍昭僧正の 「手事①」（二上り） 憂き世を厭<sup>いと</sup>いし華頂山<sup>からようざん</sup> 鷲<sup>み</sup>の御山の花の色 枯れにし  
 鶴の林まで 思い知られて哀れなり 「合の手③」 清水寺<sup>せいすいじ</sup>の地主の花 松吹く風の音羽山<sup>おとわやま</sup>  
 「手事②」（三下り） ここはまた嵐山<sup>となせ</sup> 戸無瀬<sup>となせ</sup>に落つる滝つ波までも 花は大堰川<sup>おおいがわ</sup> 井堰<sup>いせき</sup>に  
 雪や懸<sup>か</sup>かるらん

能《西行桜》のシテのサシ謡からクセの終わりまでをそのまま詞章としている。作詞者の絆屋孫八<sup>えきぬや</sup>は、大坂の両替商の一族とみられ、代々糸割符商人であつたらしいが、詳しい人物像は未詳である<sup>54</sup>。全文が能からの引用にもかかわらず作詞者として名前が伝わっていることから、この詞章を用いることを提案したなど、何らかの形で作曲にかかわっていた可能性がある。

「合の手①」は、能ではクセが始まる直前の「打切」に、「合の手②」は「打切」に、「手事①」は、「上羽」<sup>55</sup>の部分にそれぞれあたり、ここまでは能の構成とのかかわりが感じられる。「手事②」、「合の手③」の位置は特に能とのかかわりがみいだせないが、ある程度能の構成を意識した作品とみることができる。

<sup>54</sup> 石本かおり『地歌箏曲《西行桜》の研究』前掲、二四～二五頁。

<sup>55</sup> 能の用語で、クセの中ほどで役謡（主にシテ）が謡う一、二句。クセの一つの区切りとなる部分。

| 地歌                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                            | 能                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                       |
|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>九重に咲けども花の八重桜 幾代の春を<br/>重ぬらん しかるに花の名高きは 先ず<br/>初花を急ぐなる 近衛殿の糸桜 <b>合の手</b><br/><b>①</b> 見渡せば柳桜を扱き混せて 都は春<br/>の錦燦爛たり 千本の桜を植え置き そ<br/>の色所名に見する 千本の花盛り雲路や<br/>雪に残るらん <b>合の手②</b> 毘沙門道の花盛<br/>り 四王天の栄華も これにはいかで優<br/>るべき 上なる黒谷下河原 昔遍昭僧正<br/>の <b>手事①</b> 憂き世を厭いし華頂山 鷲<br/>の御山の花の色 枯れにし鶴の林まで<br/>思い知られて哀れなり <b>合の手③</b> 清水寺<br/>の地主の花 松吹く風の音羽山 <b>手事②</b><br/>ここはまた嵐山 戸無瀬に落つる滝つ波<br/>までも 花は大堰川 井堰に雪や懸かる<br/>らん</p> | <p>(シテサシ謡より) 九重に咲けども花の<br/>八重桜 幾代の春を重ぬらん 然るに花<br/>の名高きは まづ初花を急ぐなる 近衛<br/>殿の糸桜 <b>打切</b> (クセ) 見渡せば 柳桜<br/>をこき交せて 都は春の錦 燦爛たり<br/>千本の桜を植ゑ置き其色を 所の名に見<br/>する 千本の花盛り 雲路や雪に残るら<br/>ん <b>打切</b> 毘沙門堂の花盛り 四王天の<br/>栄花もこれにはいかで勝るべき 上なる<br/>黒谷下河原 むかし遍昭僧正の (上羽)<br/>浮世を厭ひし華頂山 鷲の御山の花の色<br/>枯れにし鶴の林まで 思ひ知られてあは<br/>れなり 清水寺の地主の花 松吹く風の<br/>音羽山 ここはまた嵐山 戸無瀬に落つ<br/>る 滝つ波までも 花は大井河井堰に雪<br/>やかかるらん</p> |

C・6 《新青柳》

作曲…石川勾当

作詞…不詳

初出…曲名は『箏曲示例』所収「乱曲箏譜目録」(二八三五)

詞章は『新增大成系の節』(二八三六)

能…《遊行柳》

調絃…本調子↓二上り↓三下り

(詞章)

されば都の花ざかり 大宮人の御遊ぎょいうにも 蹴鞠しゅうきくの庭の面 四本よもとの木蔭枝垂れて 暮れに数  
ある杳くうの音 柳桜をこきまぜて 錦を飾る諸人もろびとの 華やかなるや小簾こすのひま もれくる風  
の匂ひ来て「手事①」(二上り) 手飼の虎の引綱も 長き思ひに檜の葉の その柏木もおよ  
びなき 恋路はよしなしや 是は老ひたる柳の色の 狩衣かりぎぬもかざおりも「手事②」(三下り)  
風に漂よふ足もとの たよたよとしてなよやかに 立ち舞ふ振ふりの面白や 実げに夢人を現に  
ぞ見ん 実げに夢人を現にぞ見る

詞章ほぼ全文を能《遊行柳》のクセの「打切」の後から引用している。最後部分のみわずかに違いがあるが、ほぼ同じ内容を歌っている。

二つの手事それぞれにチラシをもつ完成された京風手事物形式をとっている。詞章の引用が、「打切」の後と区切りといえる部分から始まっているが、構成や曲調には能との関連はみられない。

| 地歌                                                                                                                                                                                                                                                                                                                      | 能                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                               |
|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>されば都の花ざかり 大宮人の御遊にも<br/>蹴鞠の庭の面 四本の木蔭枝垂れて<br/>暮れに数ある杳の音 柳桜をこきまぜて<br/>錦を飾る諸人の 華やかなるや小簾のひ<br/>ま もれくる風の匂ひ来て <b>手事①</b> 手飼<br/>の虎の引綱も 長き思ひに櫓の葉の そ<br/>の柏木もおよびなき 恋路はよしなしや<br/>是は老ひたる柳の色の 狩衣もかざおり<br/>も <b>手事②</b> 風に漂よふ足もとの たよた<br/>よとしてなよやかに 立ち舞ふ振の面白<br/>や 実<small>げ</small>に夢人を現にぞ見ん 実<small>げ</small>に夢人を<br/>現にぞ見る</p> | <p>(クセ)そのかみ洛陽や 清水寺の古へ<br/>五色に見えし瀧浪を 尋ね上りし水上に<br/>金色の光さす 朽木の柳たちまちに 揚<small>よう</small><br/>柳観音と現われ 今に絶えせぬ跡とめ<br/>て 利生あらたなる 歩みを運ぶ霊地な<br/>り <b>打切</b> されば都の花盛り 大宮人の<br/>御遊にも 蹴鞠の庭の面 四本の木蔭枝<br/>たれて 暮れに数ある 杳の音(上羽)<br/>柳桜をこきまぜて 錦をかざる諸人の<br/>花やかなるや小簾の隙 洩りくる風の匂<br/>いより 手飼いの虎の引き綱も ながき<br/>思ひにならの葉の その柏木の及びなき<br/>恋路もよしなや これは老いたる柳色の<br/>狩衣も風折りも 風に漂う足もとの 弱<br/>きもよしや老木の柳気力なうして よわ<br/>よわと立ちもうも夢人を現と見るぞはか<br/>なき</p> |

C・7 《翁》

作曲…峰崎勾当

作詞…不詳

初出…『新增大成系のしらべ』（一八〇一）

能…《翁》

調絃…本調子↓二上り

（詞章）

とうとうたらりたらりら たらりあがりららりとう ちりやたらりたらりら たらりあがりららりとう 所千代まで在しませ 我らも千秋侍<sup>せうろう</sup>うや 鶴と亀との齡にて 幸い心に任せたり 君が千歳を経んことを 天津乙女の羽衣よ 鳴るは滝の水 鳴るは滝の水 日は照るとも絶えずとうたり ありうどうどう 絶えずとうたり 常にとうたり 総角<sup>あけまき</sup>やとんどうや 尋ばかりやとんどうや 座して居たれど 参<sup>まゐ</sup>ろうれんげりやとんどうや 千早振る神の彦さの昔より 久しかれとぞ祝いぞや およそ千年の鶴は 万歳樂を謡うたり また万代<sup>ばんだい</sup>の池の亀は 甲に三極を備え 渚の砂策々として 朝の日の色を朗し 滝の水は冷々と落ちて 夜の月鮮やかに浮かんだり 「手事」（途中で二上り） 天下泰平国土安穩 今日のご祈禱なり 在原やなじよの翁共よ あれはなじよの翁共よ 何処<sup>いずく</sup>の翁どうどう そよや千秋万歳喜びの舞なれば 一舞<sup>ひとまい</sup>舞おうよ万歳樂 万歳樂 万歳樂

詞章全文を、能《翁》から引用している。《翁》は、能の中では特殊な演目であり、雑誌『宝生』二〇〇七年一月号<sup>56</sup>の「《翁》について」に掲載されている文<sup>57</sup>を次に引用する。

ほかの謡曲とは全く別趣なはるかに古い作ですがその作者は特定できません。世阿弥は、次のように花伝書神儀篇に書き残しています。「申樂舞を奏すれば国穩やかに民静か寿命長遠なりと、聖徳太子がいわれたので村上天皇は申樂を天下の御祈禱となすべしと定めました。その頃、かの秦河勝以来、この申樂の芸を伝える子孫に秦氏あり。

<sup>56</sup> 小林俊雄「《翁》について」『宝生』東京…わんや書店、二〇〇七年一月号、二四～二七頁。

<sup>57</sup> 佐成謙太郎『謡曲大観』第一巻 東京…明治書院、一九六三年、三～四頁の文を意識したものの。

六十六番の申樂を紫宸殿にて演奏した。そのころ氏安の妹婿で、紀この守という人も才知の人で共に演じました。その後、六十六番までは一日には勤めがたしとて、特に稻積の翁（翁）、世継ぎの翁（三番申樂）、父の助、の三曲を選定しました。今の式三番はこれになります。すなわち、法報応の三身の如来を象り奉る所なり」。

能《翁》は、江戸時代までは一日の演能の最初にかならず演じられていたが、現在では正月の初会は舞台披きなどの特別な催しでしか演じられず<sup>58</sup>、詞章、囃子、舞など全てにおいて独自の様式をもっている。

地歌《翁》は、手事物形式で作曲されている。傍線……で示した部分がすべて独吟であり、独吟が非常に多いことが一つの特徴である。合の手や手事の挿入されている箇所については、能との関連はみられない。「手事」は途中「二上り」に転調する前後で大きく二つに分かれており、「二上り」になってからはほぼ同じ旋律を二回繰り返す点が特徴的である。後歌「何処の翁」より、「大ノリ風」となるが、能《翁》は常に「拍子不合」であり、能ではなく、A、B作品の影響を受けていると考えることができる。

《翁》詞章の比較

| 地歌 | <p>とうとうたりたりら たりあがり<br/>らりとう ちりやたりたりら た<br/>らりあがりらりとう 所千代まで在し<br/>ませ 我らも千秋侍うや 鶴と亀との<br/>齢にて 幸い心に任せたり</p>                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                    |
|----|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 能  | <p>とうとうたりたりら たりあがり<br/>らりどう ちりやたりたりら た<br/>らりあがりらりどう 所千代までおは<br/>しませ 我等も千秋さむらはふ 鶴と亀<br/>との齢にて 幸心に任せたり とうど<br/>うたりたりら ちりやたりたり<br/>ら たりあがりらりどう 鳴るは<br/>滝の水 鳴るは滝の水 日は照るとも絶<br/>えずとうたり ありうどうどう 絶<br/>えずとうたり 常にとうたり 舞 君の<br/>千歳を経んことも 天津をとめの羽衣よ<br/>鳴るは瀧の水 日は照るとも 絶えずと<br/>うたり ありうどうどう 総角やと<br/>んどや ひろばかりやとんどや 座して<br/>居たれども 参ろうれんげりやとんどや<br/>千早振る神のひこさの昔より 久しかれ<br/>とぞ祝い そよやりちや およそ千年の<br/>鶴は 万歳樂と歌うたり また万代の池<br/>の亀は 甲に三極を戴き 渚の砂さくさ<br/>くとして 朝の日の色を朗じ 瀧の水<br/>冷々と落ちて 夜の月鮮やかに浮かんだ<br/>り 天下泰平国土安穩 今日御祈禱な<br/>り ありはらや なじよの翁共 あれは<br/>なじよの翁共 何処の翁どうどう そよ<br/>や 舞 千秋万歳の喜びの舞なれば 一<br/>舞舞おうよ万歳樂 万歳樂 万歳樂 万<br/>歳樂</p> |
| 手事 | <p>天下泰平国土安穩 今日のご祈禱<br/>なり 在原やなじよの翁共よ あれはな<br/>じよの翁共よ 何処の翁どうどう そよ<br/>や千秋万歳喜びの舞なれば 一舞舞おう<br/>よ万歳樂 万歳樂 万歳樂</p>                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                               |

## C・8 《嵯峨の春》

作曲…松浦検校

作詞…不詳

初出…『増補大成系のしらべ』（一八二二）

能…《放下僧》

調絃…本調子↓三下り↓本調子

（詞章）

去年こぞに見し 弥生半ばの嵯峨の春 嵐の山の山桜 色香妙なる花の宴 散りてぞ残る心の  
花に 思い乱るる憂き身にも また繰り返す此の春を 汲むや泉の大堰川 浮かぶ筏の行  
く末は 人の手活けとなる花を 恨むや己おのが迷いをば 払うは法の御誓のりい（三下り）嵯峨  
の寺々 廻らば廻れ 水車の輪りせんせきの臨川堰の川波 川柳は水に揉まるる ふくら雀は竹に揉  
まるる 都の牛は車に揉まるる 茶臼は挽木に揉まるる（本調子）「手事」 我は色香に揉  
まれ揉まれて玉の緒も 絶えぬばかりに思い川 床に淵よわなす夜半きぬぎぬの後朝

能《放下僧》の「小歌」より詞章を引用している。「しだり柳は風に揉まるる」の句がないことから、能からの引用と考えて良い。「小歌」と句の異同についてはA・10《放下僧》の項（本論文四七頁）に記述している。

冒頭の地歌独自の詞章は、嵯峨の春景色を織り込みながら恋心を歌った内容であると思われる。「小歌」も冒頭は京都の春景色を歌った内容で始まっており、能の詞章を意識した作詞といえる。

途中、「小歌」の引用となる部分から「三下り」となり曲調が変化する。「川柳は水に揉まるる」から「手事」の前まで「大ノリ風」となるが、「小歌」も「大ノリ」である。能から引用している部分のみを「三下り」にし、「大ノリ風」を交えたA、B作品にも通じる曲調としていることから、この部分が能からの引用であることへの意識が感じられる。

「手事」は掛け合いを含む典型的な京風手事物風であり、目立った特徴はみられない。後歌は能にはない地歌独自の詞章であるが、「色香に揉まれ揉まれて」と、揉まれる物を並べた「小歌」の詞章を意識した内容となっている。

京風手事物形式の作品の中に、A、B作品の曲調を挟んだ構成となっており、非常に特徴的である。



| 地歌                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                      | 能                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                            |
|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>去年<small>こぞ</small>に見し 弥生半ばの嵯峨の春 嵐の<br/>         山の山桜 色香妙なる花の宴 散りてぞ<br/>         残る心の花に 思い乱るる憂き身にも<br/>         また繰り返す此の春を 汲むや泉の大堰<br/>         川 浮かぶ筏の行く末は 人の手活けと<br/>         なる花を 恨むや己<small>おの</small>が迷いをば 払うは<br/>         法の御誓<small>のり</small>い（三下り）嵯峨の寺々 廻ら<br/>         ば廻れ 水車の輪の臨川堰<small>りせんせき</small>の川波 川柳<br/>         は水に揉まるる ふくら雀は竹に揉まる<br/>         る 都の牛は車に揉まるる 茶臼は挽木<br/>         に揉まるる（本調子）<b>手事</b> 我は色香に<br/>         揉まれ揉まれて玉の緒も 絶えぬばかり<br/>         に思い川 床に淵なす夜半<small>よわ</small>の後朝<small>きぬぎぬ</small></p> | <p>（小歌）面白の花の都や 筆に書くとも<br/>         及ばじ 東には祇園清水 落ちくる瀧の<br/>         音羽の嵐に 地主の桜は散りぢり 西は<br/>         法輪 嵯峨の御寺 廻らば廻れ 水車の<br/>         輪の 臨川堰の川波 川柳は 水に揉ま<br/>         るる ふくら雀は 竹に揉まるる 都の<br/>         牛は 車に揉まるる 茶臼は 挽木に揉<br/>         まるる げにまこと 忘れたりとよ こ<br/>         きりこは放下に揉まるる こきりこの二<br/>         つの竹の 代々を重ねて 打ち治まりた<br/>         る御代かな</p> |

C・9 《老松》

作曲…菊岡検校

作詞…不詳

初出…『新うたのはやし』（一八七〇）

能…《老松》

調絃…二上り↓本調子（一と三を同時に上げる）

（詞章）

そもそも松のめでたきこと万木に優れ 十八公の粧い 千秋の緑を成して 古今の色を見  
す 秦の始皇の御狩の時 天俄かに掻き曇り 大雨頻りに降りしかば 帝は雨を凌がんと  
小松の陰に寄り給えば この松忽ち大木となり 枝を垂れ葉を重ね 木の間隙間を塞ぎて  
「手事」（本調子）その雨を漏らさざりしかばや 帝は太夫と言ふ爵を 贈り下し給いてよ  
り 松を太夫と申すとかや 斯様に目出度き松ヶ枝に 巢を構う田鶴の齢をば 君に捧げ  
て御子孫は 亀の万劫 古河の流れ絶えせぬ 金銀珠玉滔々と 御倉の内に納まる御代こ  
そ目出たけれ

『地歌箏曲研究』楽曲編上では、初出を『大成糸の節』（一七九四）としているが、同名異曲であり、作曲が菊岡検校（一七九二〜一八四七）であるため、時代的にも一致しない。

この詞章は、常磐津の《老松》の詞章と全文が一致しており、常磐津《老松》の方が古くに成立したため<sup>59</sup>、常磐津《老松》の詞章を用いて新たに作曲をした作品とみられる。

能《老松》のクセの途中から詞章を引用している。

京風手事物形式で作曲されている。冒頭「そもそも松の」が独吟であるが、常磐津《老松》も歌い出しが独吟であり<sup>60</sup>、そのことを意識したとも考えられる。また、京風手事物

<sup>59</sup> 常磐津節最古の曲といわれ、延享四年（一七四七）頃にできた作品と伝えられる（『常磐津節全集』EMIミュージックジャパン、TOCF-9031~9050（CD二十枚組）解説三七頁）。また、清元にも同じ曲題・詞章の作品があるが、常磐津の方が古い。

<sup>60</sup> 参考音源『常磐津節全集』前掲、ディスク2、トラック7〜9《老松》浄瑠璃…常磐津千東勢太夫、常磐津千勢太夫、常磐津勢寿太夫、三味線…常磐津菊三郎、常磐津菊寿郎、上調子…常磐津菊雄、笛…福原百之助、鳴物…田中伝一朗、望月佐吉、堅田喜三久、望月長左久。

はほとんどの場合、手事に入る際に緩急をつけ区切りをつけるが、この曲は「手事」に入る際にほとんど緩急がつかない点が特徴的である<sup>61</sup>。

「天俄かに」から「手事」の前まで「大ノリ風」となるが、この部分は能では「平ノリ」である。

---

<sup>61</sup> 参考音源『京地歌々昭和後期の名人達』DOOEM06101, DOOEM06111(CD二枚組)、ディスク2、トラック5、《老松》三絃：峰内吟彰、箏：野田秀琴。他、複数の演奏家の証言による。

《老松》詞章の比較

| 地歌                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                             | 能                                                                                                                                                                                                                                                                                                       |
|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>             そもそも松のめでたきこと万木に優れ<br/>             十八公の粧い 千秋の緑を成して 古今<br/>             の色を見す 秦の始皇の御狩の時 天俄<br/>             かに掻き曇り 大雨頻りに降りしかば<br/>             帝は雨を凌がんと 小松の陰に寄り給え<br/>             ば この松忽ち大木となり 枝を垂れ葉<br/>             を重ね 木の間隙間を塞ぎて <b>手事</b> その<br/>             雨を漏らさざりしかばや 帝は 太夫と<br/>             言ふ爵を贈り下し給いてより 松を太夫<br/>             と申すとかや 斯様に目出度き松ヶ枝に<br/>             巢を構う田鶴の齡をばに捧げて御子孫<br/>             は 亀の万劫 古河の流れ絶えせぬ 金<br/>             銀珠玉滔々と 御倉の内に納まる御代こ<br/>             そ目出たけれ           </p> | <p>             (クセの途中) さて松を太夫という事は<br/>             秦の始皇の御狩の時 天俄にかき曇り<br/>             大雨頻りに降りしかば 帝雨を凌がんと<br/>             小松の陰に寄り給う 此の松俄に大木と<br/>             なり 枝を垂れ葉を並べ 木の間すさま<br/>             をふさぎて その雨を漏らさざりしかば<br/>             帝太夫という爵を贈り給いしより 松を<br/>             太夫と申すなり (後略)           </p> |

## C・10 《新娘道成寺》

作曲…不詳（菊岡検校または石川勾当説あり）

作詞…不詳

初出…『生田流琴曲歌之海』（一八八九）

能…《三井寺》

調絃…本調子↓三下り↓本調子

### （詞章）

鐘に恨みは数々ござる 初夜の鐘をつく時は 諸行無常と響くなり 後夜の鐘をつく時は  
是生滅法と響くなり 晨朝の響きには生滅滅已 入相は寂滅為楽と響けども 聴いて驚く  
人もなし 我も五障の雲晴れて 真如の月を眺め明かさん（三下り）〔合の手①〕言わず語  
らず我が心 乱れし髪 of 乱るるも 情ないはただ移り気な ああどうでも男は悪性な  
桜々と歌われて いうて袂に分け二つ 勤めさえたどうかうかと ああどうでも女子は悪  
性な 東育ちは蓮葉なものじゃえ（本調子）〔手事〕恋の分け里 数え数えりや 武士も  
道具を伏編笠で 張りとき意気地の吉原 花の都は歌で和らぐ 敷島原に 勤めする身は  
たれと伏見の墨染め 煩惱菩提の撞木町より 浪花四筋に 通い木辻の禿立から 室の早  
咲き それがほんに色じや 一い二い三い四う 夜露雪の日 霜の関路も 共に此身を  
馴染み重ねて 中は丸山 ただ丸かれと 思い初めたが縁じゃえ

冒頭に能《三井寺》の「鐘の段」の詞章が引用されている。

多くの解説書等に、能《道成寺》とかかわりがあると著されているが、詞章の引用は《三井寺》からのみであり、《道成寺》と関連している部分はみあたらない。

『地歌箏曲研究』（楽曲編上三三四頁）によれば、宝暦九年（一七五九年）に中村富士郎（初代）が《江戸鹿子娘道成寺》の外題で演じた曲を、深草検校が地歌に編曲した《（古）鐘が岬》があり、これを縮約した三下りの《娘道成寺》があり、これを本調子に移し「手事」を補作、編曲したものがこの曲であるという。他にも娘道成寺系の作品はあり、歌舞伎において、どの段階で《（古）鐘が岬》の基となった曲が作曲されたのかははっきりしないが、現在伝承されている《京鹿子娘道成寺》と詞章がほぼ一致していることを考えると、歌舞伎で用いられていた作品が基となっているとみてよいと考えている。

「手事」が挿入されている場所は、《京鹿子娘道成寺》においても合の手となる部分に当たすが<sup>62</sup>、京風手事物風であり、原曲を参考にしたものではなく独自に作曲したものともみることができる。

「煩惱菩提<sup>ぼんのうぼだい</sup>の」より「大ノリ風」となる。

<sup>62</sup> 参考音源『芳村伊十郎独吟集（二）』コロムビアミュージックエンターテイメント…  
COCJ-33311（CD）、トラック1、二〇〇五年発売。《京鹿子娘道成寺》唄…芳村伊十郎、  
三味線…杵屋栄二、笛…望月長之助、小鼓…田中伝左衛門、田中佐十郎、望月太意之助、  
大鼓…柏扇吉、太鼓…田中凉月。また、「ここは踊り手の見せ場でもあるので、必ず合の手  
が入る」との証言を複数の長唄三味線奏者から得た。

| 地歌                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                            | 能                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                          |
|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>鐘に恨みは数々ござる 初夜の鐘をつく<br/>         時は 諸行無常と響くなり 後夜の鐘を<br/>         つく時は 是生滅法と響くなり 晨朝<br/>         の響きには生滅滅已 入相は寂滅為樂と<br/>         響けども 聴いて驚く人もなし 我も五<br/>         障の雲晴れて 真如の月を眺め明かさん<br/>         言わず語らず我が心 乱れし髪 of 乱るる<br/>         も 情ないはただ移り気な ああどうで<br/>         も男は悪性な 桜々と歌われて いうて<br/>         袂に分け二つ 勤めさえたどうかうかと<br/>         ああどうでも女子は悪性な 東育ちは<br/>         蓮葉なものじやえ <b>手事</b> 恋の分け里 数<br/>         え数えりや 武士も道具を伏編笠で 張<br/>         りと意気地の吉原 花の都は歌で和らぐ<br/>         敷島原に 勤めする身は たれと伏見の<br/>         墨染め 煩惱菩提の撞木町より 浪花<br/>         四筋に 通い木辻の禿立から 室の早<br/>         咲き それがほんに色じや 一い二い三<br/>         い四う 夜露雪の日 霜の関路も 共に<br/>         此身を 馴染み重ねて 中は丸山 ただ<br/>         丸かれと 思い初めたが縁じやえ</p> | <p>(鐘の段) ましてや拙なき狂女なれば<br/>         許し給へや人々よ 煩惱の 夢を覚ます<br/>         や 法の声も静かに 先初夜の鐘を撞く<br/>         時は 諸行無常と響くなり 後夜の鐘を<br/>         撞く時は 是生滅法と響くなり 晨朝の<br/>         響は 生滅滅已 入相は 寂滅 為樂と<br/>         響きて菩提の道の鐘の声 月も数添ひて<br/>         百八煩惱の眠りの 驚く夢の夜の迷ひも<br/>         はやつきたりや後夜の鐘に 我も五障の<br/>         雲晴れて 真如の月の影を眺め居りて明<br/>         かさん</p> |

C・11 《新山姥》

作曲…吉沢検校

作詞…吉沢検校

初出…『沢のなかれ』（一八九〇）

能…《山姥》

調絃…本調子↓二上り

（詞章）

世を空蟬うつせみの唐衣 払わぬ袖に置く霜は 夜寒の月にうづもれ うちすさむ人の絶間にも  
千声万声の 砧たたきに声のしで打つは ただ山姥わさが業なれや 「手事」（二上り） 都に帰り世語  
りに せさせ給えと思ふはなほも 妄執か ただ打ち捨てよ何事も よし足曳あしひきの山姥が  
山めぐりするぞ苦しき よしあしひきの山姥が 山めぐりするぞ苦しき

吉沢検校による作詞と伝えられるが、詞章は能《山姥》のクセの二度目の上羽からクセの終わりまでをほぼそのまま引用している。

京風手事物形式で作曲されているが、中チラシよりも長い「序」（マクラ）をもつ<sup>63</sup>など、独特の雰囲気をもった作品である。

「手事」の位置などの曲の構成や曲調に、能との関連はみられない。

<sup>63</sup> 参考音源『検校三品正保の世界』株式会社エス・ツウ DOOEM03729/DOOEM03739（CD二枚組）ディスク2、トラック1、一九九九年発売。《新山姥》歌・三絃：三品正保、箏：土居崎正富



| 地歌                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                    | 能                                                                                                                                                                                                                                                                                                                         |
|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>世を空蟬<small>うつせみ</small>の唐衣 払<small>はら</small>わぬ袖に置く霜は<br/>         夜寒の月にうづもれ うちすさむ人の絶<br/>         間にも 千声万声の 砧<small>きね</small>に声のしで打つ<br/>         は ただ山姥が業<small>わざ</small>なれや <b>手事</b> 都に帰り<br/>         世語りに せさせ給えと思ふはなほも<br/>         妄執が ただ打ち捨てよ何事も よし足<br/>         曳<small>ひ</small>の山姥が 山めぐりするぞ苦しき よ<br/>         しあしびきの山姥が 山めぐりするぞ苦<br/>         しき</p> | <p>(クセの二度目の上羽より) 世を空蟬<small>うつせみ</small>の<br/>         唐衣 拂<small>はら</small>わぬ袖に置く霜は 夜寒の月に<br/>         埋もれ うちすさむ人の絶え間にも 千<br/>         声万声の 砧<small>きね</small>に声のしで打つは 唯山姥<br/>         が業なれや都に帰<small>かへ</small>りて世語りに せさせ<br/>         給えと思ふはなほも 妄執が 唯うち捨<br/>         てよ何事も よし足引の山姥が 山廻り<br/>         するぞ苦しき (後略)</p> |

C・12 《尾上の松》

作曲…不詳

作詞…不詳

初出…不詳

調絃…本調子↓三下り↓本調子↓二上り

能…《高砂》

(詞章)

やらやらめでたやめでたやと 歌い打ち連れ尉と姥 その名も今に高砂の 尾上の松も年  
経<sup>ふ</sup>りて 老の波も寄り来るや 木の下蔭の落葉搔<sup>か</sup>く なる迄<sup>い</sup>命<sup>き</sup>永らえて 猶<sup>い</sup>いつ迄<sup>き</sup>か生<sup>い</sup>の  
松 千枝<sup>ちえ</sup>に榮えて色深<sup>こ</sup>み 箏の音通<sup>と</sup>う松の風 太平樂の調べかな (三下り) 「手事①」(本  
調子) 豊かに澄める日の本<sup>もと</sup>の 恵<sup>よ</sup>みは四方<sup>よも</sup>に照り渡る 神の教えの跡垂れて 尽きじ尽きせ  
ぬ君が御代 万歳<sup>ばんぜい</sup>祝<sup>い</sup>う神神樂 御神火<sup>みしめ</sup>の前に八乙女の 袖振る鈴や振り鼓 太鼓の音も笛  
の音も 手拍子揃<sup>い</sup>えて潔<sup>いさぎよ</sup>や 「手事②」(二上り) あら面白<sup>おもしろ</sup>や面白<sup>おもしろ</sup>や 鎖<sup>くわ</sup>さぬ御代に相生  
の 松の緑も春来<sup>はるき</sup>れば 今一入<sup>ひとしお</sup>に色増<sup>いろあ</sup>さり 深く契<sup>ちとせ</sup>りて千歳<sup>ちとせ</sup>経<sup>ふ</sup>る 松の齡<sup>よわい</sup>も今日よりは  
君に引かれて万代<sup>よろずよ</sup>の 春に榮<sup>は</sup>えん君が代は 万々<sup>ばんばん</sup>歳<sup>ぜい</sup>と舞<sup>ま</sup>い歌<sup>うた</sup>う

能《高砂》の、前半のシテとツレの上歌より詞章を引用している。引用されている部分  
は少ないが、「歌い打ち連れ尉と姥」の尉と姥とは、《高砂》のシテとツレを指している  
と考えられ、この部分がシテとツレの連吟であることを理解した作詞とみることができ

る。「手事①」は、「楽」ともよばれる独特の器樂部分であるが、能《高砂》で奏されるのは  
「神舞」であり、「楽」ではない。《尾上の松》で「楽」とよばれる部分が挿入されている  
のは、「太平樂の調べかな」という詞章によるものと考えられる。

曲の構成などに、能とのかかわりがみられる点はない。

| 地歌                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                           | 能                                                                                                                                                                                             |
|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>         やらやらめでたやめでたやと 歌い打ち<br/>         連れ尉と姥 その名も今に高砂の 尾上<br/>         の松も年経りて 老の波も寄り来るや<br/>         木の下蔭の落葉搔く なる迄命永らえて<br/>         猶いつ迄か生の松 千枝に栄えて色深み<br/>         箏の音通う松の風 太平楽の調べかな<br/> <b>手事①</b> 豊かに澄める日の本の 恵みは<br/>         四方に照り渡る 神の教への跡垂れて<br/>         尽きじ尽きせぬ君が御代 万歳祝う神<br/>         神楽 御神火の前に八乙女の 袖振る鈴<br/>         や振り鼓 太鼓の音も笛の音も 手拍子<br/>         揃えて潔や <b>手事②</b> あら面白や面白や<br/>         鎖さぬ御代に相生の 松の緑も春来れば<br/>         今一入に色増さり 深く契りて千歳経<br/>         る 松の齢も今日よりは 君に引かれ<br/>         て万代の 春に栄えん君が代は 万々歳<br/>         と舞い歌う       </p> | <p>         (シテとツレの上歌) 所は高砂の 所は<br/>         高砂の 尾上の松も年ふりて 老いの波<br/>         も寄り来るや 木の下蔭の落葉かくなる<br/>         まで命ながらへて 猶いつまでか生きの<br/>         松 それも久しき名所かな それも久し<br/>         き名所かな       </p> |

## C・13 《四季の雪》

作曲…国山勾当

作詞…不詳

初出…『新大成系のしらべ』（一七八八）

謡曲…《雪月花》（闌曲、観世流では《四季》の題）<sup>64</sup>

調絃…本調子↓二上り↓三下り

### （詞章）

そもそも天の潤いに 雨露霜雪の四つを見せ 同じく雪月花の 三つの徳を分かつにも  
雪こそ殊に勝れたり<sup>すぐ</sup> まず春は梅桜「合の手」（二上り）咲くより散るまでも 雪を忘るる  
色は無し 夏は五月雨の 降る家の軒は朽ちながら 庭は曇らぬ卯の花の 垣根や雪に紛<sup>まじ</sup>  
うらん 「手事」（三下り）夜寒忘れて待つ月の 山の端白く影みえて 降らぬ雪かと疑わ  
れ 冬野に残る菊までも また初雪と面白や 山路の憂きを忘るらん 山路の憂きを忘る  
らん

研究対象としている「謡物」の中で唯一、「闌曲」<sup>65</sup>の詞章を引用している作品で、《雪月花》全文とほぼ同じ詞章である。小倉正久『乱曲考』<sup>66</sup>一三七頁より、《雪月花》についての記述を引用する。

同じ内容の謡物を宝生・喜多流は《雪月花》、観世流では《四季》と呼ぶ。《雪月花》の完曲には二種類あり、その一は《雪翁》<sup>ゆきのおきな</sup>《雪女》<sup>ゆきおんな</sup>《雪折竹》<sup>ゆきおりだけ</sup>などと云われるもの。謡物《雪月花》と《四季》は、《雪翁》のクセをさすと考えられている。その二は同名の別曲《雪月花》で、語物風に仕組んだ近世の戯作である。さらに別曲の《雪月花》があったとも云われている。実に紛らわしく、どの曲からとられたものか、あるいは独立した謡物か分らない。

<sup>64</sup> 闌曲であるため、この曲のみ「謡曲」と表記した。

<sup>65</sup> 芸を極めた者が謡うとされ、必ず独吟（一人）で謡うなど、謡曲のなかで特殊な位置づけにある曲。

<sup>66</sup> 小倉正久『乱曲考』東京…檜書店、二〇一一年。

手事物形式であり、「手事」は三段から成るが、初段をそのまま繰り返し返し二段としている。手事の段を繰り返す形は、およそ同じ時代の作品である《八千代獅子》<sup>67</sup>などにもみられる特徴である。また、「手事」の位置は謡曲では「上羽」の位置に当たる。歌の部分は長歌物を思わせる曲調であり、手事の繰り返しなどからも、大阪系の古い手事物の雰囲気を感じられる。

曲尾の旋律は「謡物終了定型」であるが、途中から転調している（譜例1）。

譜例1 曲尾の旋律。「謡物終了定型」であるが、途中から転調している。

（二）から転調している

|                 |                 |
|-----------------|-----------------|
| 3               | 2               |
| ○る <sup>1</sup> | 1               |
| ハ <sup>3</sup>  | ま <sup>1</sup>  |
| ニ               | 六 <sup>4</sup>  |
| ○ <sup>1</sup>  | 5 <sup>2</sup>  |
| クニ              | 7               |
| ー <sup>1</sup>  | の <sup>7</sup>  |
| ー <sup>1</sup>  | う <sup>1</sup>  |
| ○ <sup>1</sup>  | 四 <sup>1</sup>  |
| 四 <sup>1</sup>  | き <sup>1</sup>  |
| ○               | ミ <sup>1</sup>  |
| ○               | 一 <sup>1</sup>  |
| ○               | や <sup>1</sup>  |
| 2 <sup>1</sup>  | 三 <sup>1</sup>  |
| ○               | ○               |
| 伍 <sup>1</sup>  | ○わ <sup>3</sup> |
| ○               | ア <sup>1</sup>  |
| ○               | ア <sup>3</sup>  |
|                 | 三               |
|                 | ○す <sup>3</sup> |
|                 | 一               |
|                 | 4 <sup>4</sup>  |

《四季の雪》詞章の比較

| 地歌                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                       | 謡曲                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                |
|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>             そもそも天の潤いに 雨露霜雪<small>うろさりせつ</small>の四つを<br/>             見せ 同じく雪月花の 三つの徳を分か<br/>             つにも 雪こそ殊<small>すく</small>に勝れたり ます春は<br/>             梅桜 <b>合の手</b> 咲くより散るまでも 雪<br/>             を忘るる色は無し 夏は五月雨の 降る<br/>             家の軒は朽ちながら 庭は曇らぬ卯の花<br/>             の 垣根や雪に紛<small>まご</small>うらん <b>手事</b> 夜寒忘れ<br/>             て待つ月の 山の端白く影みえて 降ら<br/>             ぬ雪かと疑われ 冬野に残る菊までも<br/>             また初雪と面白や 山路の憂きを忘るら<br/>             ん 山路の憂きを忘るらん           </p> | <p>             そもそも天の潤<small>うる</small>ひに 雨露霜雪<small>うろさりせつ</small>の四つを<br/>             うけ 同じく雪月花の 三つの徳を誉む<br/>             るにも 雪こそ殊<small>すく</small>に勝れたれ ます春は<br/>             梅桜 咲くより散るまでも 雪を忘るる<br/>             色はなし 夏は五月雨の 降る家の軒端<br/>             暮れながら 庭は曇らぬ卯の花の 垣根<br/>             や雪に紛<small>まご</small>うらん <b>(上羽)</b> 夜寒忘れて待<br/>             つ月の 山の端白き影までも 降らぬ雪<br/>             かと疑はれ 冬野に残る菊までも すは<br/>             初雪と面白さに 山路の憂きを忘るらん<br/>             山路の憂きや忘るらん           </p> |

C その他・長歌物

C・14 《梅が枝》

作曲…戸川勾当

作詞…不詳

初出…『大成系の節』（一七九四）

能…《梅枝》

調絃…二上り↓三下り↓二上り（二度目の調絃替えでは二と三を同時に一音上げる）

（詞章）

憂かりし身の昔を 懺悔に語り申さん〔合〕然るにても我ながら 由なき恋路に侵されて  
長く悪趣に成しけるは さればにや 女心の乱れ髪 結い甲斐無くも恋衣の 夫の形見を  
戴き この狩衣を着しつつ 常には打ちしこの太鼓の 寝もせず起きもせず 涙敷妙の  
枕上に 残る執心も晴らせつつ 仏所に到るべし 嬉しの今の教えや 〔小合の手①〕（三  
下り） 思い出たる一念の 残るは病うとなりつつ 続がざるは これ葉なりと 古人の教  
えなれば 思わじ思わじ 恋忘れ草も住吉の 〔合〕 岸に生うちよう花なれば 手折れや  
せまじ我心 契り麻衣の片思い 執心を晴らせ給えや 〔小合の手②〕 実に面白や 同じ  
くは 懺悔の舞を奏でて 愛着の心を捨て給え いざいざさらば 妄執の雲霧を払う夜の  
月も半ばなれ 夜半樂を奏でん 心も共に住吉の 松の隙より眺むれば 〔合〕 波もて揺  
れる淡路湯 沖も静かに青海の 青海波の波返し 返すや袖の折りをえて 軒端の梅に鶯  
の 来鳴くや花の越天樂 謡えや謡え梅が枝に 梅が枝にこそ鶯は巢を構え 風吹かば  
如何にせん 花に宿る鶯（二上り）〔合の手〕 面白や鶯の 面白や鶯の 声に誘引せられ  
て花の蔭に来たりや 我も御法に引き誘われて 我も御法に引き誘われて 今目前に立ち  
舞う舞の袖 これこそ女の夫を恋うる想夫恋の樂の鼓 現なの我が有様や 〔小合の手③〕  
思えば 古を語るは 猶も執心ぞと申せば 月も入り 音楽の音は松風に類えて 在りし  
姿は暁闇に 面影ばかりや残るらん 面影ばかりや残るらん

能《梅枝》のクセから曲尾までの広範圍をほぼそのまま詞章としている。「小合の手①」は、能では「上羽」の部分に当たり、「小合の手②」は、クセが終わりロンギ<sup>68</sup>に入る箇所

<sup>68</sup> 能の小段名、役と地謡、役と役が交互にうたいあう問答形式の謡『邦楽百科事典』前掲、一〇六六頁。

にあたる。後半の長めの「合の手」は、能において「楽」という囃子が演奏される箇所にあたる。「小合の手③」は、キリの途中で拍子からはずれ、その後シテ謡になり「平ノリ」に変わる箇所に入入されている。ごく短い合の手が多くあることが一つの特徴であり、詞章にその位置を「合」と表したが、それらの位置については能とのかかわりはみられなかった。

冒頭からしばらくは「ノリ型」風とはいえないが、「執心も晴らせつつ」など、「平ノリ」のリズムで歌う箇所が数か所にみられる。「合の手」の後、「面白や鶯の 面白や鶯の 声に誘引せられて花の蔭に來たりや」の部分は「中ノリ風」となるが、能ではここは「平ノリ」である。その後「我も御法に引き誘われて」からは「大ノリ風」となるが、能でもここから「大ノリ」となる。その後「思えば古を語るは」以降は、能では「大ノリ」からはずれ、「平ノリ」となるが、地歌でも「平ノリ風」となる。

構成、曲調共に能を強く意識した作品であることがうかがえる。



《梅が枝》詞章の比較（次頁まで）

地歌

憂かりし身の昔を 懺悔に語り申さん  
 〔合〕 然るにても我ながら 由なき恋路に  
 侵されて 長く悪趣に成しけるは され  
 ばにや 女心の乱れ髪 結い甲斐無くも  
 恋衣の 夫の形見を戴き この狩衣を  
 着しつ 常には打ちしこの太鼓の  
 寝もせず起きもせず 涙敷妙の枕上に  
 残る執心も晴らせつ 仏所に到るべし  
 嬉しの今の教えや 小合の手①（三下り）  
 思い出たる一念の 残るは病うとなりつ  
 つ 続がざるは これ葉なりと 古人の  
 教えなれば 思わじ思わじ 恋忘れ草も  
 住吉の 〔合〕 岸に生うちょう花なれば 手  
 折れやせまじ我心 契り麻衣の片思い  
 執心を晴らせ給えや 小合の手② 実に  
 面白や 同じくは 懺悔の舞を奏でて  
 愛着の心を捨て給え いざいざさらば  
 妄執の雲霧を払う夜の 月も半ばなれ  
 夜半樂を奏でん 心も共に住吉の 松の  
 隙より眺むれば 〔合〕 波もて揺れる淡路  
 潟 沖も静かに青海の 青海波の波返し  
 返すや袖の折りをえて 軒端の梅に鶯の  
 来鳴くや花の越天楽 謡えや謡え梅が枝  
 に 梅が枝にこそ鶯は巢を構え 風吹か  
 ば如何にせん 花に宿る鶯（二上り） 〔合〕  
 の手

能

（クセ）憂かりし身の昔を 懺悔に語り  
 申さん 然るにても我ながら よしなき  
 恋路に犯されて 長く悪趣に墮しけるよ  
 さればにや 女心の乱れ髪 結いかいな  
 くも恋衣の 夫の形見を戴き この狩  
 衣を着しつ 常には打ちしこの太鼓  
 の 寝もせず起きもせず 涙しきたえの  
 枕上に 残る執心を晴らしつ 仏所  
 に至るべし 嬉しの今の教えや（上羽）  
 思い出たる一念の 残るはやもうとなり  
 つ 続がざるは これ葉なりと 古人  
 の教えなれば 思はじ思はじ 恋忘れ草  
 も住吉の 岸に生うてふ花なれば 手折  
 れやせまじ我心 契り麻衣の片思い 執  
 心を晴らせ給えや（ロンギ） 実に面白  
 や同じくは 懺悔の舞を奏でて 愛着の  
 心を捨て給え いざいざさらば 妄執の  
 雲霧を払う夜の 月も半ばなれ 夜半樂  
 を奏でん 心も共に住吉の 松の隙より  
 眺むれば 浪もて結える淡路潟 沖も静  
 かに青海の 青海波の波返し 返すや袖  
 の折りを得て 軒端の梅に鶯の 来鳴く  
 や花の越天楽 唄へや謡へ梅が枝に 梅  
 が枝にこそ鶯は巢を構え 風吹かば如何  
 にせん 花に宿る鶯 〔楽〕

| 地歌 | 面白や鶯の 面白や鶯の 声に誘引せられて花の蔭に來たりや 我も御法に引き誘われて 我も御法に引き誘われて 今目前に立ち舞う舞の袖 これこそ女の夫を恋うる想夫恋の樂の鼓 現なの我が有様や 小合の手③ 思えば古を語るは 猶も執心ぞと申せば 月も入り 音樂の音は松風に類えて 在りし姿は曉闇に 面影ばかりや残るらん 面影ばかりや残るらん |
|----|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 能  | 面白や鶯の 面白や鶯の 声に誘引せられて花の蔭に來たりたり 我も御法に引き誘われて 我も御法に引き誘われて 今目前に立ち舞う舞の袖 これこそ女の夫を恋うる想夫恋の樂の鼓 現なの我が有様やな 思えば古を語るは猶も執心ぞと申せば 月も入り 音樂の音は松風に類えて 在りし姿は明暮れに 面影ばかりや残るらん 面影ばかりや残るらん     |

C その他・端歌物

C・15 《京松風》

作曲…不詳

作詞…不詳

初出…『新曲糸の節』（一七五七）

能…《松風》

調絃…二上り

（詞章）

懐しや行平の中納言 三年はここに須磨の浦 都へ上り給いしに この程の形見とて御立  
烏帽子狩衣を 残し置き給えども これを見るに いや増しの思い草 葉末に結ぶ露の間  
も 忘れればこそ味気なや 「合の手①」 形見こそ今は仇なれ これ無くば 忘るる暇も  
ありなむと 詠みしも 理や 猶思ひこそ深かりし 宵々に脱ぎて我が寝る仮衣 掛けて  
ぞ頼む同じ世に 住む甲斐あらばこそ 忘れ形見もよしなしと 捨ててもおかれず 取れ  
ば面影に立ち増さり 起き伏し分かで 枕より後より恋の責めくれれば 詮方涙に節沈むこ  
そ哀しけれ 「合の手②」 三瀬川の 絶えぬ涙の浮瀬にも 乱るる恋の淵はありける たと  
え暫しは別るるとも 待つに変わらで帰り来ば あら頼もしの御歌や 「合の手③」 立ち別  
れ稲葉の山の峰に生うる 松とし聞かば今帰り来ん それは稲葉の遠山松 これは懐し君  
ここに 須磨の浦曲の松の行平 立ち帰り来ば 我も木陰にいざ立ち寄りて 磯馴松の懐  
しや 「合の手④」 松に吹き来る風も狂じて 須磨の高波激しき夜すがら 妄執の夢に現  
れ見するなり

この曲は《松風》と称する場合もあるが、《古松風》と区別するため、本論文では《京松風》と称する。

《古松風》と同様、能《松風》のクセ以降から詞章を適宜引用しているが、《古松風》は途中、地歌独自の詞章が挿入されているのに対し、《京松風》はほぼ全文が能からの引用となっている。

詞章の傍線……で示した部分は、《古松風》の詞章が同じ部分を完全五度上げて二上がりに移調したものと比較すると、ほぼ同じ旋律であることがわかる（譜例1、2）。また、傍線……で示した「立ち帰り来ば」の部分は、《古松風》の詞章が同じ部分と同じ旋律とな

っている（譜例3）。これらのことから、この曲は《古松風》を原曲としたと考えることができる。

曲全体は、短い合の手が随所にある歌中心の構成となっており、芝居歌の特徴である「同音の連打」がみられる。「合の手②」の前、「面影に立ち増さり 起き伏し分かで 枕より後より恋の責めくれば 詮方涙に節沈むこそ哀しけれ」の部分が「平ノリ風」となっているが、能でもこの部分は「平ノリ」である。曲尾は「謡物終了定型」であるが、出だしが僅かに変化している（譜例4）。

「合の手②」は、能での「物着」、「合の手③」は「中ノ舞」（ただし一句ずれている）、「合の手④」は「破ノ舞」の位置にそれぞれ挿入されており、明らかに能の構成を意識した作曲である。「合の手③」の位置が一句ずれているのは、《新道成寺》の「小合の手①」と同じく、能の通りに区切ると、文章の意味が途中で切れてしまうためとみることができる。

曲の途中の短い一部分のみが「平ノリ風」となっているなど、本論文の研究範囲では他に似ている曲のない独特の作品である。長歌物風とも端歌物風ともつかない曲調で、《古松風》を原曲としたためか、芝居歌の特徴ももちあわせている。大変興味深い作品であるが、作曲者が不詳のため、《古松風》を原曲とした理由やこの曲が作られた背景を探ることは困難である。

譜例1 「行平の中納言 三年はここに須磨の浦 都へ上り給いしが この程の」の部分と、《古松風》の詞章が同じ部分を完全五度上げて「二上り」に移調したものとと比較（右の行が《京松風》、左の行が《古松風》を移調したもの）。旋律がほぼ一致している。拍の増減がある場所は、空白に×印を用いて拍の多い方に場所を合せている。

《京松風》

《古松風》

|      |      |
|------|------|
| 1    | 1    |
| 4272 | 7231 |
| 22   | 22   |
| ○ 72 | △ 2  |
| 2    | 2    |
| 1    | 1    |
| 21   | 21   |
| 1    | 1    |
| ○ 21 | △ 21 |
| 2    | 2    |
| 1    | 1    |
| ○ 21 | ○ 21 |
| 1    | 1    |
| 4    | 4    |
| 4    | 4    |
| 51   | 51   |
| ○    | ○    |
| 21   | 21   |
| ○    | ○    |
| 51   | 51   |
| 21   | 21   |
| ○ 21 | ○ 21 |
| 21   | 21   |

|       |        |
|-------|--------|
| ○エ    | ○エ     |
| は     | は      |
| 五     | 五      |
| 五     | >      |
| 9 7ニ  | ○ =    |
| 7-    | 三      |
| ○ 3伍  | ○ こ伍   |
| - 7-  | ○      |
| - 7-  | -      |
| ○ 2-  | ○ ±    |
| 1     | 1      |
| に 1   | に 1    |
| 四     | 四      |
| c     | c      |
| 1     | 4      |
| ○ す 2 | △ す 1  |
| 5     | 5      |
| 1     | 1      |
| 72 22 | 72 ま 1 |
| 22 72 | 22 2   |
| 3 1   | 1      |
| ○ の 2 | △ の 2  |
| 2     | 2      |
| 1 7 1 | 1      |
|       | ↓      |

|          |                |
|----------|----------------|
| 2        | 2              |
| 32       | 32             |
| 四        | 四              |
| C71      | 1              |
| 1        | 1              |
| 031      | 031            |
|          | 0              |
|          | 8 <del>7</del> |
|          | 7              |
|          | 571            |
|          | 六 <del>中</del> |
|          | 0              |
|          | 五              |
|          | 0              |
| 2        | 5              |
| △        | —              |
| 5        | —              |
| 7        | —7             |
| 0        | 0              |
| 77<br>11 | み              |

|     |     |    |
|-----|-----|----|
| ○や7 | 7ズ  | や7 |
| ○   | ○   |    |
| 7   | 7   | ズ7 |
| △   | △   |    |
| △   | △   | 75 |
| ○え7 | △え7 | え7 |
| △   | △   |    |
| ○   | △   | 7  |
| の7  | の1  |    |
| △   | △   | ほ7 |
| ほ7  | ほ7  |    |
| ○   | ○   |    |
| 775 | 775 |    |
| 77  | 77  |    |
| 5   | 5   |    |
| 5   | 5   |    |
| —   | —   |    |
| ○15 | ○15 | 75 |
| た7  | た8  |    |
| 8   | 8   | 中  |
| ま8  | ま8  |    |
| ○77 | ○77 |    |
| 78  | 78  |    |

|     |     |     |
|-----|-----|-----|
| 2   | 2   | 2   |
| 32  | 32  | 32  |
| △72 | △72 | △72 |
| 5   | 5   | 5   |
| 7   | 7   | 7   |
| 27  | 27  | 27  |
| ○エ5 | ○エ5 | ○エ5 |
| エ5  | エ5  | エ5  |
| 7   | 7   | 7   |
| 127 | 127 | 127 |
| 六   | 六   | 六   |
| 五   | 五   | 五   |
| 五   | 五   | 五   |
| ○   | ○   | ○   |
|     |     |     |

|     |     |     |
|-----|-----|-----|
| 一   | 一   | 一   |
| 77  | 77  | 77  |
| 8   | 8   | 8   |
| お1  | お1  | お1  |
| 7   | 7   | 7   |
| 7   | 7   | 7   |
| ○75 | ○75 | ○75 |
| 77  | 77  | 77  |
| 六   | 六   | 六   |
| ス   | ス   | ス   |
| イ1  | イ1  | イ1  |
| △イ2 | △イ2 | △イ2 |
| 5   | 5   | 5   |
| 六   | 六   | 六   |
|     |     |     |
| 171 | 171 | 171 |
| ○21 | ○21 | ○21 |
| 四   | 四   | 四   |
| 1   | 1   | 1   |
| ○   | ○   | ○   |
| は2  | は2  | は2  |
| 2   | 2   | 2   |
|     |     |     |

|       |       |
|-------|-------|
| 《古松風》 | 《京松風》 |
| 0     | 0     |
| 115   | 115   |
| ○78   | ○78   |
| 8     | 8     |
| 878   | 878   |
| 77    | 77    |
| ○75   | ○75   |
| 77    | 77    |
| ス78   | ス78   |
| 77    | 77    |
| ○78   | ○78   |
| 78    | 78    |
| 3     | 3     |
| の3    | の3    |
| 8     | 8     |
| 78    | 78    |
| 7     | 7     |
| 77    | 77    |
| 5     | 5     |
| 75    | 75    |

譜例2 「いや増しの思い草 葉末に」の部分と、《古松風》の詞章が同じ部分を完全五度上げて「二上り」に移調したものとの比較（方法は譜例1と同じ）。旋律がほぼ一致している。

|     |     |
|-----|-----|
| 7   | 7   |
| 97  | 97  |
| 2   | 2   |
| 72  | 72  |
| 1   | 1   |
| の1  | の1  |
| 四   | 四   |
| 1   | 1   |
| ○72 | ○72 |
| 5   | 5   |

|     |     |
|-----|-----|
| 7   | 7   |
| い7  | い7  |
| ○15 | ○15 |
| 37  | 37  |
| 7   | 7   |
| 7   | 7   |
| 六   | 六   |
| 五   | 五   |
| ○15 | ○15 |
| 四   | 四   |
| 1   | 1   |
| 2   | 2   |
| ○   | ○   |
| 2   | 2   |
| ○の2 | ○の2 |
| 2   | 2   |
| 2   | 2   |
| ○   | ○   |
| は2  | は2  |
| 22  | 22  |
| ○72 | ○72 |
| 71  | 71  |



地歌

懐しや行平の中納言 三年はここに須磨  
 の浦 都へ上り給いしに この程の形見  
 とて御立烏帽子狩衣を 残し置き給えど  
 も これを見るに いや増しの思い草  
 葉末に結ぶ露の間も 忘れればこそ味気  
 なや 合の手① 形見こそ今は仇なれ  
 これ無くば 忘るる暇も ありなむと  
 詠みしも理や 猶思ひこそ深かりし  
 宵々に脱ぎて我が寝る飯衣 掛けてぞ  
 頼む同じ世に 住む甲斐あらばこそ 忘  
 れ形見もよしなしと 捨ててもおかれず  
 取れば面影に立ち増さり 起き伏し分か  
 で 枕より後より恋の責めくれれば 詮方  
 涙に飾沈むこそ哀しけれ 合の手② 三  
 瀬川の絶えぬ涙の浮瀬にも 乱るる恋の  
 淵はありける

能

（クセ） あはれ古へを 思ひ出づればな  
 つかしや 行平の中納言三年はここに須  
 磨の浦 都へ上り給ひしが 此程の形見  
 とて 御立烏帽子狩衣を 残し置き給へ  
 ども これを見る度に いやましの思ひ  
 草葉末に結ぶ露の間も 忘れればこそあ  
 ぢきなや 形見こそ今はあだなれ これ  
 なくは 忘るる隙もありなんと よみし  
 も理や なほ思ひこそ深けれ（上羽）  
 宵々に 脱ぎて我が寝る狩衣 かけてぞ  
 頼む同じ世に 住むかひあらばこそ忘れ  
 れ形見もよしなしと 捨てても置かれず  
 取れば面影に立ちまさり 起き臥しわか  
 で枕より 跡より恋の責め来れば せん  
 かた涙に伏し沈む事ぞ悲しき 物着 三瀬  
 河絶えぬ 涙の憂き瀬にも 乱るる恋の  
 淵はありけり あら嬉しやあれに行平の  
 御立ちあるが 松風と召されさむらふぞ  
 やいで参らう あさましやその御心故に  
 こそ 執心の罪にも沈み給へ 娑婆にて  
 の妄執をなほ忘れ給はぬぞや あれは松  
 にてこそ候へ 行平は御入りもさむらは  
 ぬものを うたての人の言事や あの松  
 こそは行平よ たとひ暫しは別るるとも  
 まつとし聞かば帰りこんと 連ね給ひし  
 言の葉はいかに 実になう忘れてさむら  
 ふぞや



|    |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                          |
|----|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 地歌 | たとえ暫しは別るるとも                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                              |
| 能  | <p>たとひ暫しは別るるとも 待たば来んとの言の葉を 此方は忘れず松風の立ち帰りこん御音信 終にも聞かば雨の袖しばしこそぬるるとも まつに変わで帰りこば あら頼もしの御歌や 立ち別れ 中</p> <p>御歌や 合の手③ 立ち別れ稲葉の山の峰に生うる 松とし聞かば今帰り来んそれは稲葉の遠山松 これは懐し君ここに 須磨の浦曲の松の行平 立ち帰り来ば 我も木陰にいざ立ち寄りて 磯馴松の懐しや 合の手④ 松に吹き来る風も 狂じて 須磨の高波激しき夜すがら 妄執の夢に現れ見するなり</p> <p>稲葉の山の峰に生ふる 松とし聞かば今帰り来ん それはいなばの遠山松 これはなつかし君ここに 須磨の浦曲の松の行平 立ち帰りこば 我も木陰にいざ立ち寄りて 磯馴松の なつかしや 破ノ舞 松に吹き来る風も狂じて 須磨の高波はげしき夜すがら 妄執の夢に見ゆるなり 我が跡弔ひてたび給へ 暇申して 帰る波の音の 須磨の浦かけて吹くや後の山おろし 関路の鳥も 声々に夢も跡なく夜も明けて村雨と聞きしも 今朝見れば松風ばかりや残るらん 松風ばかりや残るらん</p> |

C・16 《鉢の木》

作曲…浪花ばてれん組某

作詞…不詳

初出…『新大成系の節』（二八一四）

能…《鉢木》  
はちのき

調絃…三下り

（詞章）

駒止めて 袖打ち払う影も無し 人か雪かと 「小合の手①」 迷い疲れ給いしに 薫くむ  
軒の侘しきに 一夜を泊めし伽羅の香の 昔恋しき思いでに 鉢の木を折り火に焚いて  
せてめ今宵のおもてなし 寒さを凌ぐ夜もすがら 御身のためになすならば など切ると  
ても 惜しからじ 雪うち払い 見れば面白や如何にせん 「合の手①」 まず窓の梅の北  
面は 雪封じて寒きにも 異木より先たてば 梅を切りや初むべき 「合の手②」 見じと  
いう 人こそ憂けれ山里の 折かけ垣の梅をだに 情けなしと惜しみに 薪になすと思  
いきや 「小合の手②」 桜を見れば春ごとに 花少し遅ければ この木や春と 心を尽く  
し育てしに 今は由なや徒名草 いたづらに折り添えて 緋桜となすぞ悲しき 「小合の手  
③」 さて松はさしもげに 枝を垂れ葉を透かし かかりあれと植え置きし その甲斐今は  
嵐吹く 松はもとより常盤にて 薪となすは梅桜 切り焼べて今ぞ御垣守 衛士の焚く火  
はお為なり よく寄りてあたり給えや

地歌には他にも《鉢の木》という題の作品があるが、本論文では能からの引用のあるこ  
の曲のみを扱う。

能《鉢木》のクセの前の地謡の始まりからクセの終わりまでを引用している。冒頭の「駒  
止めて 袖打ち払う影も無し」は、能の前半でシテ謡に引用されている和歌「駒止めて 袖  
うち払う 影も無し 佐野の渡りの 雪の夕暮」<sup>69</sup>を引用している。その後「御身のため  
になすならば」までは地歌独自の詞章だが、能《鉢木》の筋書きを意識した内容となつて  
いる。

「合の手①」は、能で「打切」の後雰囲気が変わる部分に、「小合の手②」は、クセの始  
まる部分に、「小合の手③」は、「上羽」の部分に入れられている。

<sup>69</sup> 藤原定家（一一六二～一二四一）作。

全体に緩急をつける部分が多く<sup>70</sup>、合の手の旋律も独特で、他の曲にはない雰囲気をもっている。曲の構成に能とのかかわりがみられる興味深い作品であるが、作曲者の浪花ばてれん組某についての情報はほとんどなく、作曲背景等を探ることが困難である。

---

<sup>70</sup> 参考音源『箏曲地歌大系<sup>18</sup>』ビクターエンターテイメント株式会社：VICG-40127（CD）、トラック1、一九五五年録音、一九九六年発売、《鉢の木》歌・三絃・萩原正吟  
『地歌大鑑 中之巻<sup>27</sup>』東芝EMI株式会社：THX-90195-A（LP）、一九八三年発売。《鉢の木》歌・三絃・大村尚子。

《鉢の木》詞章の比較

| 地歌                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                              | 能                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                |
|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>駒止めて 袖打ち払う影も無し 人か雪<br/>かと <b>小合の手①</b> 迷い疲れ給いしに<br/>薫くむ軒の侘しきに 一夜を泊めし伽羅<br/>の香の 昔恋しき思いでに 鉢の木を折<br/>り火に焚いて せてめ今宵のおもてなし<br/>寒さを凌ぐ夜もすがら 御身のためにな<br/>すならば など切るとても 惜しからじ<br/>雪うち払い 見れば面白や如何にせん<br/><b>合の手①</b> まず窓の梅の北面は、雪封じ<br/>て寒きにも 異木より先たてば 梅を<br/>切りや初むべき <b>合の手②</b> 見じという<br/>人こそ憂けれ山里の 折かけ垣の梅をだ<br/>に 情けなしと惜しみに 薪になす<br/>と思いきや <b>小合の手②</b> 桜を見れば春<br/>ごとに 花少し遅ければ この木や侘ぶ<br/>ると 心を尽くし育てしに 今は由なや<br/>徒名草 いたずらに折り添えて 緋桜と<br/>なすぞ悲しき <b>小合の手③</b> さて松はさ<br/>しもげに 枝を矯め葉を透かし かかり<br/>あれと植え置きし その甲斐今は嵐吹く<br/>松はもとより常盤にて 薪となすは梅<br/>桜 切り焼べて今ぞ御垣守衛士の焚く火<br/>はお為なり よく寄りてあたり給えや</p> | <p>(前半のシテ謡の一部) 古歌の心に似た<br/>るぞや 駒止めて 袖うち払う影も無し<br/>佐野の渡りの 雪の夕暮 かように詠み<br/>しは大和路や(中略)</p> <p>(クセの前の地謡) 捨人の為の鉢の木<br/>切るとてもよしや惜からじと 雪打ち払<br/>ひて見れば面白やいかにせん <b>打切</b> 先<br/>づ冬木より咲きそむる 窓の梅の北面は<br/>雪封じて寒きにも 異木よりまづ先だて<br/>ば梅を切りや初むべき 見じといふ 人<br/>こそ憂けれ山里の 折りかけ垣の梅をだ<br/>に 情けなしと惜しみに 今更薪になす<br/>べしとかねて思ひきや (クセ) 桜を見れ<br/>ば春ごとに 花すこし遅ければ 此木や<br/>侘ぶると心をつくし育てしに 今は我の<br/>み侘びて住む 家桜きりくべて 緋桜に<br/>なすぞ悲しき (上羽) さて松はさしもげ<br/>に 枝をため葉をすかして かかりあれ<br/>と植え置きし そのかひ今は嵐吹く 松<br/>はもとより常盤にて 薪となるは梅桜<br/>切りくべて今ぞ御垣守 衛士の焚く火は<br/>お為なり よくよりてあたり給へや</p> |

C・17 《鶴亀》

作曲…二世松崎檢校（ただし二上り）

作詞…不詳

初出…曲名は『新うたのはやし』（二八七〇）ただし、「二上り」の曲として記載されており、同名異曲の可能性がある。

能…《鶴亀》

調絃…三下り

（詞章）

庭の砂は金銀の 玉を連ねて敷妙の 五百重の錦や瑠璃の 樞 碑礫の行桁 瑠璃の橋  
〔合の手〕 池の汀の鶴亀は 蓬萊山も余所ならず 君の恵みぞ有難き 君の恵みぞ有難  
き

『新うたのはやし』では調絃は「二上り」となっており、別の曲であるか、改作がなされた可能性がある。

能《鶴亀》の初同をそのまま引用している。

比較的短い端歌物であるが、独吟で始まり、「合の手」の後の「蓬萊山も」より歌、手共に音数が多くなり、「ノリ型風」とまではいえながたたみ掛けるような印象をうけ、A、B作品に多い、「情緒的な部分↓ノリ型風の部分」を短く構成した様な形である。調絃が「三下り」であること、冒頭が独吟であること、曲の構成から、A、B作品を意識した作品であることが感じられる。

《鶴亀》詞章の比較

| 地歌                                                                                        | 能                                                                                                   |
|-------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 庭の砂は金銀の玉を連ねて敷妙の<br>五百重の錦や瑠璃の樞 碑礫の行桁<br>瑠璃の橋 合の手 池の汀の鶴亀は<br>蓬萊山も余所ならず 君の恵みぞ有難き<br>君の恵みぞ有難き | （初同）庭の砂は金銀の庭の砂は金銀<br>の玉を連ねて敷妙の五百重の錦や瑠<br>璃の樞 碑礫の行桁 瑠璃の橋 池の<br>汀の鶴亀は 蓬萊山も余所ならず 君<br>の恵みぞ有難き 君の恵みぞ有難き |

C・18 《高砂》①

作曲…戸川勾当

作詞…不詳

初出…『新撰詞曲よしの山』(二七八四)

能…《高砂》

調絃…三下り

(詞章)

高砂や 此の浦舟に帆を揚げて 月諸共に出汐いでしおの 浪の淡路の島影や「合の手」 遠く鳴る尾の沖過ぎて 早住之江に着きにけり 早住之江に着きにけり

能《高砂》のワキの待謡をそのまま詞章としている。

比較的短い端歌物であるが、冒頭が独吟で始まり、「合の手」の後「早住之江」から歌も手も音数が多くなり、畳み掛けるような印象を受ける。この特徴は《鶴亀》と共通しており、特に歌と手の手数が増える場所が「合の手」の後の二句目であるという点が共通している点が興味深い。この作品もA、B作品への意識が感じられる作品である。

《高砂》①詞章の比較

| 地歌                                                                                                                                      | 能                                                                                                                |
|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>高砂や 此の浦舟に帆を揚げて 月諸共<br/>に出汐の 浪の淡路の島影や <span style="border: 1px solid black;">合の手</span><br/>遠く鳴る尾の沖過ぎて 早住之江に着き<br/>にけり 早住之江に着きにけり</p> | <p>(ワキの待謡) 高砂や 此の浦舟に帆を<br/>あげて 此の浦舟に帆をあげて 月諸共<br/>に出で汐の 浪の淡路の嶋陰や 遠く鳴<br/>る尾の沖過ぎて はや住の江に着きにけり<br/>はや住の江に着きにけり</p> |



C その他・作物

C・19 《綱》

作曲…不詳（更紗屋新兵衛説あり）

作詞…不詳

初出…『大成糸の節』（一七九四）

能…《羅生門》

調絃…本調子

（詞章）

春雨のざんざと降る夜に 綱は金札首筋につんざいて 二条大宮馬の頭かしらを南の方へ向かし  
て 一杯機嫌で鼻唄一さし わいわいのわい 酔うた酔うたとぶらぶらぶら 道は三  
筋で迷うた 真実しんじつそうかいな とことん うからうからと 羅生門坂へ来れたれば垣の間  
から 白い手がぬつと出た なんの覆面頭巾で後うしろから引っぱるは 庄左衛門の綱もどき  
さあさあいこのえいこのえい 喚わめきちらして酔いもさめざめ 夜も深々と どうやら気味  
が悪いながらも もはや何時なんじきじや今鳴る鐘は 八つか七つか 時の太鼓をどんどんどん  
ん 数を取るに あれはどんどん これはどんどん にわかにかき来る風の音聞  
きや 駒も進まず高嘶いななきし いひひんいひひんびりびりと身震いしてこそ立ったりけ  
れ その時馬をば突っ放し 羅生門の壇上だんじょうに上がりて 印の金札立てて置いて 帰らんと  
するとこを 後ろより兜しころの綴しるひを引つ掴み ひよこつかみ 引つ張りける程に 綱は騒がず  
太刀抜きかざし 退のきやれ放しやれ 首千切らしやんすな 首の千切れたは継がれもしょ  
うが 手手が抜けたら御不自由でござんしょう ただし只乗りが望みかや 童子少しも悪  
びれず お前はわしの心を 知っていながら胴欲な わしや何ぼでもあれまあこれまあ放  
しやせん 綱はびつくりこりやならぬと 今はこれ迄と 持ちたる腕をはつしと打ち切れ  
ば あ痛いたしこ何とした たんたんのたんせつぼう 伯母貴おばきの土産にこれを見せたら いか  
な伯母貴おばきでも 嬉し烏丸三条下り待ちの風呂屋の娘 抱おいてみよ びよこびよこびよん  
殿が見たさに日暮れに門かどに立ちや いかさんさまさま人のちよがら唐傘 甲袋 赤い紙袋  
諸足踏もろあしん込んだ あれ見た般若 これ見た般若 ちよこと助六さん 大仏鉄砲 突つ張はつ  
たといえども どんがらちゃんりきが音もせず それにつけても茨木殿は 折角力かんだ腕うでを  
取られ いかい骨折りご大儀

能《羅生門》の後半部分の筋書きをパロディにした内容となっており、詞章も一部引用している。《羅生門》は渡辺綱<sup>わたなべのつな</sup>の鬼退治の伝説が題材となっているが、《綱》では、鬼が女性に置き換えられており、詞章も「いひひん」「どんどん」などの擬音語を多用している、かなりくだけた印象をうける。

研究対象の作品で唯一の作物である。詞章の傍線……で示した部分は、音程を伴わず歌う部分であり<sup>71</sup>、情緒的に歌う部分や合の手もほとんどなく、次々と言葉を語っていく曲調で、作物の中でも独特の雰囲気をもっている。

能《羅生門》では、「その時馬を乗りはなし」より「大ノリ」となる。《綱》にも、一拍に一文字ずつ歌う箇所は曲を通して多くみられるが、他の作品で「ノリ型風」としている部分とは雰囲気が違う。これは作物風の曲調によるもので、特に能を意識したためではないと考えている。他、曲の構成などにおいて、能との関連はみられない。

地歌

春雨のざんざと降る夜に、綱は金札首筋につんざいて、二条大宮、馬の頭を南の方へ向かして、一杯機嫌で鼻唄一さしわいわいのわい、酔うた酔うたとぶらぶらぶらぶら、道は三筋で迷うた、真実（しんじつ）そうかいな、とことん、うからうからと羅生門坂へ来れたれば垣の間から、白い手がぬつと出た、なんの覆面頭巾（うしろ）で後から引っぱるは、庄左衛門の綱もどきさあさあえいこのえいこのえい、喚（わめ）きちらして酔いもさめざめ、夜も深々とどうやら気味が悪いながらも、もはや何時（なんどき）じゃ今鳴る鐘は、八つか七つか、時の太鼓をどんだんどん、数を取るに、あれはどんだんどん、これはどんだんどんにわかにかき来る風の音聞（き）きや、駒も進まず高嘶（いかなげ）し、いひひんいひひんびりびりびつと身震いしてこそ立ったりけれども、その時馬をば突つ放し、羅生門の壇上（だんじょう）に上がりて、印の金札立てて置いて、帰（か）らんとするところを、後ろより兜の綴（しるし）を引つ掴み、ひよこつかみ、引つ張りける程に

能（後ワキのサシ謡より）

さても渡辺の綱は、唯かりそめの口論により、鬼神の姿を見んために、物の具取つて肩にかけ、同じ毛の兜の緒をしめ、重代の太刀を佩（は）き、たけなる馬に打ち乗つて、舍人（とねり）をも連れず唯一騎、宿所を出でて二条大宮を、南がしらにあゆませけり、春雨の音も頻りに更くる夜の、春雨の音も頻りに更くる夜の、鐘も聞ゆる暁に、東寺の前をうち過ぎ、九条おもてにうつつ出で

羅生門を見渡せば、物すさまじく雨落ちて、俄（さ）かに吹き来る風の音に、駒も進まず高嘶（いかなげ）し、身振ひしてこそ立ったりけれども、その時馬を乗りはなし、その時馬を乗りはなし、羅生門の石段（いしだ）に、あがり標（しるし）の札を取り出だし、段上に立て置き、帰（か）らんとするに、後ろより兜の綴（しるし）を掴んで引き留めければ

| 地歌                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                     | 能                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                       |
|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>綱は騒がず太刀抜きかざし 退きやれ放し<br/> しやれ 首千切らしやんすな 首の千切<br/> れたは継がれましょうが 手手が抜けた<br/> ら御不自由でござんしょう ただし只乗<br/> りが望みかや 童子少しも悪びれず お<br/> 前はわしの心を 知っていながら胴欲な<br/> わしや何ぼでもあれまあこれまあ放しや<br/> せん 綱はびつくりこりやならぬと 今<br/> はこれ迄と 持ちたる腕をはつしと打ち<br/> 切れば あ痛し何とした たんたんの<br/> たんせつぼう 伯母貴の土産にこれを見<br/> せたら いかな伯母貴でも 嬉し烏丸三<br/> 条下り待ちの風呂屋の娘 抱いてみよ<br/> びよこびよこびよん 殿が見たさに日暮<br/> れに門に立ちや いかさんさまごま人の<br/> ちよがら唐傘 甲袋 赤い紙袋諸足踏<br/> ん込んだ あれ見た般若 これ見た般若<br/> ちよこと助六さん 大仏鉄砲 突っ張っ<br/> たといえども どんがらちゃんがら音も<br/> せず それにつけても茨木殿は 折角力<br/> んだ腕を取られ いかい骨折りご大儀</p> | <p>すはや鬼神と太刀抜き持つて 斬らんと<br/> するに 取りたる兜の緒をひきちぎって<br/> おぼえず段より飛び降りたり かくて鬼<br/> 神は怒りをなして かくて鬼神は怒りを<br/> なして 持ちたる兜をかつぱと投げ捨て<br/> その丈臈門の軒にひとしく 両眼月日の<br/> 如くにて 綱をにらんで 立つたりけり<br/> 綱は騒がず太刀さしかざし 綱は騒がず<br/> 太刀さしかざし 汝知らずや王威をおか<br/> す 其の天罰は 遁るまじとてかかりけ<br/> れば 鉄杖を振り上げえいやと打つを<br/> 飛び違いちようどきる 斬られて組み付<br/> くを 払う劍に腕打ち落とされ ひるむ<br/> と見えしが わきつじにのぼり 虚空を<br/> さしてあがりけるを したひ行けども黒<br/> 雲おほい 時節をまちて又取るべしと<br/> 呼ばはる声もかすかに聞ゆる 鬼神より<br/> も恐ろしかりし 綱は名をこそ あげに<br/> けれ</p> |

C その他・上方歌

C・20 《高砂》②

作曲…不詳

作詞…不詳

初出…不詳

能…《高砂》

調絃…六下り

※地歌箏曲研究に記載なし

(詞章)

高砂や 此の浦舟に帆を揚げて 月諸共に出汐いでしおの 浪の淡路の島影や 「合の手」 遠く鳴  
る尾の沖過ぎて 早住之江に着きにけり

《高砂》①同様、能《高砂》のワキの待謡をほぼそのまま詞章としている。「合の手」も  
《高砂》①と同じ位置にあるが、この点以外は《高砂》①と似ている点は見られない。出  
だしの旋律と、手が細かく軽快な「合の手」が印象的である。

曲の構成等に、能との関連は特にみられない。

《高砂》②詞章の比較

| 地歌                                                                                                                           | 能                                                                                                               |
|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>高砂や 此の浦舟に帆を揚げて 月諸共<br/>に出汐の 浪の淡路の島影や <span style="border: 1px solid black;">合の手</span><br/>遠く鳴る尾の沖過ぎて 早住之江に着き<br/>にけり</p> | <p>（ワキの待謡）高砂や 此の浦舟に帆を<br/>あげて 此の浦舟に帆をあげて 月諸共<br/>に出で汐の 浪の淡路の嶋陰や 遠く鳴<br/>る尾の沖過ぎて はや住の江に着きにけり<br/>はや住の江に着きにけり</p> |

C・21 《猩々》

作曲…不詳

作詞…不詳

初出…不詳

能…《猩々》

調絃…本調子

※地歌箏曲研究に記載なし

(詞章)

世も尽きじ 世も尽きじ 万代よろずよまでの 竹の葉の酒 汲めども尽きず 飲めども変わらぬ  
秋の夜の盃 「合の手」 影も傾く 入江に枯れ立つ 足元はよろよると 酔えいに伏したる  
枕の夢を 結ぶと思えば 泉はそのまま 尽きせぬ宿こそ めでたけれ

能《猩々》のキリをそのまま詞章としている。

上方歌らしい明るい曲調であり、合の手の位置や旋律などに能との関連はみられない。

《猩々》詞章の比較

| 地歌 | <p>世も尽きじ 世も尽きじ 万代<small>よろずよ</small>までの<br/> 竹の葉の酒 汲めども尽きず 飲めども<br/> 変わらぬ 秋の夜の盃 <span style="border: 1px solid black;">合の手</span> 影も傾く<br/> 入江に枯れ立つ 足元はよろよと 酔<br/> いに伏したる枕の夢を 結ぶと思へば<br/> 泉はそのまま 尽きせぬ宿こそ めでた<br/> けれ</p> |
|----|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 能  | <p>(キリ) よもつきじ よもつきじ 萬代<br/> までの竹の葉の酒 酌めどもつきず 飲<br/> めども変わらぬ 秋の夜の盃 影も傾く<br/> 入江に枯れ立つ あしもとはよろよと<br/> 酔ひに臥したる枕の夢を 結ぶと思へば<br/> 泉はそのまま つきせぬ宿こそ めでた<br/> けれ</p>                                                                |



### 第三章 謡物の特徴の分析

この章では、第二章での分析を通して、「謡物」の特徴を総合的に分析する。

#### 第一節 詞章の構成・内容

詞章の引用のしかたや構成については、既に蒲生氏によってある程度細かな分類がされているが<sup>72</sup>、本論文では後に曲調と合わせた分析を行うために、改めて独自の方法での分類を試みる。蒲生氏の論文と内容が重なる部分が少なからずあるが、大きな違いは、詞章の構成と内容について別に分類を行っている点である。

#### (一) 詞章の構成

はじめに、詞章全体の中でどの程度の割合が能の詞章となっているかに着目し、その後、引用のしかたや、引用部分と独自の詞章との関係をもとに細分化し、次の十通りに分類した。更に細分化することは可能であるが、つきつめるとほぼ一曲ごとの分類になってしまうため、十通りに絞った後、説明が必要な曲については後の「曲ごとの考察」で述べる。

#### I 詞章ほぼ全文が能からの引用となる作品

a 能全文またはある部分をそのまま引用している

b 能のある部分から引用しているが省略がみられる

b' 複数の能から引用している

#### II 地歌独自の詞章をもつが、比較的まとまった部分を能から引用している作品

c 独自の詞章↓能からの引用

d 独自の詞章↓能からの引用↓独自の詞章

e 能からの引用↓独自の詞章↓能からの引用

f 能からの引用↓独自の詞章

g 独自の詞章と能からの引用が混ざりあっている

h どれにも分類できない

#### III 能からの引用が比較的少ない作品

<sup>72</sup> 蒲生郷昭「地歌が摂取した能詞章」『日本古典音楽探究』前掲、三二一～三四〇頁。

次に、研究対象の作品を右の分類に当てはめていく。曲名の後には、引用されている能の演目と、どの部分が引用されているかを表記し、必要と判断した場合は簡単な注釈を入れている。

#### I 詞章ほぼ全文が能からの引用となる作品

a 能全文またはある部分をほぼそのまま引用している

A 1 《善知鳥》……《善知鳥》クセから曲尾まで。

10 《放下僧》……《放下僧》「小歌」。

C 1 《融》……《融》後シテのサシ謡の途中から曲尾まで。

5 《西行桜》……《西行桜》シテのサシ謡からクセの終わりまで。

6 《新青柳》……《遊行柳》クセの打切からクセの終わりまで。

7 《翁》……《翁》全文。

11 《新山姥》……《山姥》クセの二度目の上羽からクセの終わりまで。

13 《四季の雪》……《雪月花》全文。

14 《梅が枝》……《梅枝》クセから曲尾まで。

17 《鶴亀》……《鶴亀》初同。

18 《高砂》①……《高砂》ワキの待謡。

20 《高砂》②……《高砂》ワキの待謡。

21 《猩々》……《猩々》キリ。

b 能のある部分から引用しているが省略がみられる

B 6 《藤戸》……《藤戸》のクセから曲尾までより抽出。

C 2 《神楽》……《室君》「棹の歌」を引用しているが一部省略。

15 《京松風》……《松風》のクセから曲尾までより抽出。

b' 複数の能から引用している

A 5 《新道成寺》……《道成寺》シテ次第と「乱拍子」の後から中入りまで。

《三井寺》「鐘の段」、一部省略。

#### II 地歌独自の詞章をもつが、比較的まとまった部分を能から引用している作品

c 独自の詞章→能からの引用

A・8 《海女》……《海人》「玉の段」、一部改変。

・11 《石橋》……《石橋》キリ。

B・2 《富士太鼓》……《富士太鼓》の後半、《梅枝》のクセと「楽」の前から抽出。

・3 《虫の音》……《松虫》キリ。

・4 《鉄輪》……《鉄輪》後半の地謡ヨワ吟から曲尾まで。

d 独自の詞章↓能からの引用↓独自の詞章

A・9 《珠取り》……《海人》「玉の段」とその後、一部改変。

・13 《葵の上》……《葵上》「枕の段」の前から段の終わりまで。

C・8 《嵯峨の春》……《放下僧》「小歌」。

・9 《老松》……《老松》クセの途中。

e 能からの引用↓独自の詞章↓能からの引用

A・2 《古松風》……《松風》クセと、後半の「中ノ舞」の直前の句から曲尾まで。

・6 《山姥》……《夕顔》前シテサシ謡の一部。《山姥》の「カケリ」の前から最後まで、《邯鄲》後半の一部。

B・1 《八島》……《八島》前半のシテとツレの謡の一部と、「カケリ」の手前から曲尾まで。

C・16 《鉢の木》……《鉢木》シテ謡に引用されている和歌と、クセの前の地謡の始まりからクセの終わりまで。

f 能からの引用↓独自の詞章

A・7 《邯鄲》……《邯鄲》後半。

C・10 《新娘道成寺》……《三井寺》「鐘の段」、一部省略。

g 独自の詞章と能からの引用が混ざりあっている

A・1 《古道成寺》……《道成寺》ワキの語り。

C・3 《鳥追》……《鳥追》「鳴子の段」。

・19 《綱》……《羅生門》後半。

h どれにも分類できない

C・4 《三津山》……《三山》の初同の一部と、地クリより曲尾の間から、詞章を適宜抽出しているが、表現を変化させた詞章や独自の詞章と入り交じっており、言葉の前後もみられる。

### Ⅲ 能からの引用が比較的少ない作品

A・4 《関寺小町》…《卒塔婆小町》キリ、《芦刈》ロンギ、《鸚鵡小町》シテ上歌から少しずつ引用している。

・12 《貴船》……《鉄輪》シテのサシ謡の一部。

B・5 《梓》……《葵上》「一声」の後のシテ謡の一部。

C・12 《尾上の松》…《高砂》前半のシテとツレの連吟の一部。

I は十七曲、II は十九曲、III は四曲となった。A 作品の詞章は様々な構成をしており、C 作品には I a 型がかなり多いことが分かる。

### 曲ごとの考察

《新青柳》は I a に分類したが、この曲の分類については平野氏と蒲生氏でも意見が分かれている。後歌の詞章に能の詞章と一致していない部分がわずか一句あるが、内容はほぼ同じことを歌っているため、I a とした。

《神楽》については、省略はわずかであるが、「棹の歌御うたい一段めでとう候 いつもの如く神前にて神楽を参らせられ候え」という句の省略は軽くみることができないと判断し I b に分類した。詞章に変化があるにもかかわらず《新青柳》を I a とし、わずかな省略のみの《神楽》を I b とすることについては、反論をされてもやむを得ないと考えている。

《富士太鼓》は、蒲生氏も「すんなり落ちつく先がない」と述べているが、これは「独自の詞章」としている部分に能《梅枝》からの引用を含んでいるためである。しかし、おおかには「独自の詞章→能からの引用」の變形形と判断し II c に分類した。「独自の詞章と能からの引用が混ざりあっている」とした《古道成寺》は、能《道成寺》のワキの語を増補、脚色した形であり、詞章の變形も大きく、能では描かれてない創作された詞章が途中途中に挿入されている。《綱》についても同じことがいえるが、この曲の場合は物語の設定自体も變形している。《三津山》も似た形ではあるが、この曲はほとんどが能《三山》

からの引用であるが詞章を変化させている部分、詞章を前後させている部分もあり、最後にわずかに独自の詞章をもつという特殊な構成で、どの分類にもあてはめることができない。

## (二) 地歌独自の詞章の内容

次に地歌独自の詞章の内容に着目する。

Ⅱ、Ⅲに分類した作品を「①独自の詞章が能の内容とかかわりをもつ作品と」「②独自の詞章と能の関連が薄い作品」に分ける。曲名の後に、独自の詞章の内容等を記載する。

①独自の詞章が能の内容とかかわりをもつ作品

Ⅱ A 1 《古道成寺》…能の詞章を増補、脚色したもの。

2 《古松風》…能《葵上》を思わせる内容。

7 《邯鄲》……栄華を歌った内容で、能《邯鄲》の筋書きとは異なるものの、引用している部分の増補とみることができる。

8 《海女》……冒頭は道行風で、その後は「玉の段」の前の筋書き。

9 《珠取り》……「玉の段」前後の筋書き。

12 《貴船》……貴船神社への道行という設定が一致しているが、内容はかなり脚色、増補されている。

13 《葵の上》……女性の恋心、恨み。

B 2 《富士太鼓》…夫を亡くした女性の物狂いの心情。

4 《鉄輪》……女性の恨み。

C 3 《鳥追》……能《鳥追》の内容と一致している。

4 《三津山》……能《三山》の登場人物三人に例えられる三つの山の名前を用いている。

8 《嵯峨の春》…京都の春景色を織り込んでいる。

9 《老松》……能《老松》同様、祝儀的な内容。

16 《鉢の木》……能《鉢木》の筋書きと一致している。

## Ⅲ

A 4 《関寺小町》…能《卒塔婆小町》の設定と一致した情景や心理描写。

B 5 《梓》……「梓の弓に誘われて登場した怨霊が、念仏によって退けられる」という能《葵上》の筋書きと一致。心情描写も含む。

C・19 《綱》……………能《羅生門》の鬼を女性に置き換えたパロディ的内容。

②独自の詞章と能の関連が薄い作品

II A・6 《山姥》……………「枕尽し」の詞章と「伊勢音頭」の詞章。

・ 11 《石橋》……………恋心。

B・3 《虫の音》……………女性の心情。《松虫》ではシテは男性で、描かれている感情も異なっている。

C・10 《新娘道成寺》…男女の恋、廓尽し。

・ 12 《尾上の松》……………祝儀的な内容だが、能《高砂》と内容がかけ離れている。

独自の詞章と能の関連が薄い作品は五曲と少ない。関連のある作品については、能の筋書きを歌った内容になっている作品は割合少なく、心理描写や増補、脚色のものが多いことが分かる。

#### 曲ごとの考察

独自の詞章が能の筋書きを歌った内容である作品は《海女》《珠取り》《鉢の木》《梓》の四曲と割合少ない。

《富士太鼓》《鉄輪》《葵の上》の独自の詞章はいずれも心理描写であるが、典拠の能における人物設定と照らし合わせ、関連が深いと判断し①に分類した。《虫の音》も心理描写であるが、主観が男性から女性に置き換えられており、能《松虫》においては「恋心」というものは露骨には描かれていないため、②に分類した。

《邯鄲》と《老松》は、独自の詞章の割合が少なく、どちらも祝儀的な内容で引用した詞章の増補と捉えたが、《尾上の松》はシテとツレの人物設定を意識した一文が含まれるが、独自の詞章の割合が多く、《高砂》とはかわりのない内容のため、②に分類した。

《古松風》については、独自の詞章に能《葵上》との関連がみられるため①に分類したが、引用元である能《松風》とは関係がなく、特殊なパターンといえる。

## 第二節 曲の構成・音楽的特徴

この節では、曲の構成や、頻出する旋律や「ノリ型風」の部分などの音楽的特徴に着目し考察をする。

### (一) 調絃

A、B作品は、《新道成寺》《放下僧》を除くすべての作品が、全曲を通して調絃が「三下り」、または「三下り」を含む作品であった。A、B作品の大きな特徴の一つである。

### (二) 曲の構成

分析の結果、A、B作品は、《放下僧》《関寺小町》を除くすべての作品が、冒頭が緩徐（情緒的）な曲調で始まり、曲の終盤が「ノリ型風」となる作品であり、A、B作品に共通する大きな特徴といえる。またC作品では、《三津山》《翁》《新娘道成寺》《梅が枝》《鶴亀》《高砂》①がおおまかにはこの形にあたるが、「手事物」「長歌物」、短い「端歌物」であるため、A、B作品の構成と全く同じということとはできない。

### (三) 器楽部分

次に、それぞれの曲の器楽部分に着目する。

#### 器楽部分 I

まず、「合の手」や「手事」の位置が、囃子事や「打切」など、能において器楽部分といえる箇所と一致している作品をまとめる。曲名の後、どの器楽部分が能における何に対応しているかを記載している。

A 1 《善知鳥》……「小合の手②」・「カケリ」<sup>73</sup>

「小合の手③」・「打切」

5 《新道成寺》……「合の手①」・「乱拍子」

「小合の手」・「急ノ舞」（ただし一句ずれている）

7 《邯鄲》……「合の手①」・「楽」

11 《石橋》……「手事」・「獅子」

B 1 《八島》……「合の手③」・「カケリ」

2 《富士太鼓》……「合の手②」・「楽」

<sup>73</sup> ただし、《善知鳥》の「小合の手②」は極めて短い。

- 3 《虫の音》……「手事」……「中ノ舞」
- 4 《鉄輪》……「小合の手①」……「打切」
- C 1 《融》……「手事①」……「早舞」
- 4 《三津山》……「合の手③」……「一声」
- 5 《西行桜》……「合の手①」……「打切」  
「合の手②」……「打切」
- 14 《梅が枝》……「合の手」……「楽」
- 15 《京松風》……「合の手②」……「物着」  
「合の手③」……「中ノ舞」(ただし一句ずれている)  
「合の手④」……「破ノ舞」
- 16 《鉢の木》……「合の手①」……「打切」

「中ノ舞」などの囃子事と「打切」を全く同じように考えることはできないが、「打切」は能において一つの区切りといえる部分に挿入され、演じる際の緩急にもかかわってくるため、「合の手」等と対応している点は着目すべきである。

B作品は曲数に対して器楽部分と囃子事が一致している曲の割合が多い。ほとんどの曲は、その曲の一番長い囃子事の部分と器楽部分を対応させている。《京松風》は囃子事三か所すべてに「合の手」が対応しているが、これは詞章の構成が「b型」(ある部分から引用しているが省略がみられる作品)であり、詞章全体が長めな上、全文が能からの引用でありかつ複数箇所から引用した結果、複数の囃子事を含む広範囲からの引用となり、それぞれに器楽部分を対応させた結果とみることができる。

いずれにせよ、能の囃子事と地歌の器楽部分が対応している作品については、能への理解がある人間が作曲に携わったとみてよいと考えている。

## 器楽部分Ⅱ

次に、「合の手」や「手事」が、地歌独自の詞章と能からの引用との変わり目や、能において区切り、変わり目といえる部分に挿入されている作品をまとめる。

- A 2 《古松風》……「合の手②」……能の引用↓独自の詞章の変わり目  
「合の手④」……独自の詞章↓能の引用となる変わり目
- 3 《善知鳥》……「小合の手⑤」……地謡↓シテ謡の変わり目



- 5 《新道成寺》…「合の手②」…地謡↓シテ謡の変わり目
- 6 《山姥》…「合の手①」…能の引用を中略している部分
- 7 《邯鄲》…「小合の手①」…地謡↓子方の謡の変わり目  
「合の手②」…能の引用↓独自の詞章の変わり目
- 13 《葵の上》…「小合の手④」…独自の詞章↓能の詞章の変わり目  
「合の手②」…地謡↓シテ謡の変わり目  
「小合の手⑤」…シテとツレの掛け合い↓地謡の変わり目  
「小合の手⑥」…詞章が能の引用↓独自の詞章の変わり目
- B 1 《八島》…「合の手①」…能の引用↓独自の詞章の変わり目  
「合の手②」…独自の詞章↓能の引用の変わり目  
「合の手④」…地謡↓地謡とシテ謡の掛け合いの変わり目
- 2 《富士太鼓》…「合の手①」…独自の詞章↓能の引用の変わり目
- 6 《藤戸》…「合の手①」…能の引用を中略している部分  
「小合の手②」…地謡↓シテ謡の変わり目
- C 3 《鳥追》…「手事」…「鳴子の段」に入る部分
- 5 《西行桜》…「手事①」…上羽の部分
- 13 《四季の雪》…「手事」…上羽の部分
- 14 《梅が枝》…「小合の手①」…上羽の部分  
「小合の手②」…クセ↓ロングの変わり目  
「小合の手③」…大ノリ↓平ノリ、地謡↓シテ謡の変わり目
- 16 《鉢の木》…「小合の手②」…クセの始まる部分  
「小合の手③」…上羽の部分

A、B作品においては、独自の詞章と能の引用との変わり目と、地謡からシテ謡など謡い手の変わる部分に器楽部分が挿入されている場合がとて多いことが分かる。独自の詞章と能の詞章の変わり目については、それぞれの内容や雰囲気が違う場合が多く、能の引用かそうでないかを認識していたと断定することはできない。しかし謡い手の変わる部分やクセ、ロング等に入る部分、「上羽」などについては、詞章の意味が区切れている場合もあるとはいえ、能そのものの理解がないと区切りと判断することは困難と思われる、それらと曲の構成に関連がみられるということは、作曲者もしくは作詞者など作曲にかかわった人物に能への理解があったとみて良い。

C作品は、ここであげた全ての作品において、上羽など、能への理解がなければ区切りとは判断ができない部分に器楽部分が挿入されており、これらの作曲には能への理解があった人物がかかわっていると考えることができる。

#### (四) 調絃替え

ここでは、地歌で調絃替えが行われる箇所が、独自の詞章と能からの引用の変わり目や、能において区切といえる部分と対応している例をまとめる。曲名の後、どの調絃替えが何の変わり目に位置しているかを記載している。

- A・6 《山姥》……「本調子↓三下り」……独自の詞章↓能の引用の変わり目
- ・7 《邯鄲》……「二上り↓三下り」……「楽」↓シテ謡の変わり目
- C・1 《融》……「本調子↓二上り」……地謡↓シテ謡の変わり目
  - 「二上り↓三下り」……「早舞」↓ロンギの変わり目
- ・2 《西行桜》……「本調子↓二上り」……上羽の前
- ・8 《嵯峨の春》……「本調子↓三下り」……独自の詞章↓能の引用の変わり目
  - 「三下り↓本調子」……能の引用↓独自の詞章の変わり目
- ・14 《梅が枝》……「三下り↓二上り」……「楽」に入る部分

地歌においては、手事や長い合の手の出だしや終わりで調絃替えをすることがとても多いため、ここで着目すべきは、《融》の「本調子↓二上り」の調絃替えと、《山姥》の「本調子↓三下り」の調絃替え、《嵯峨の春》の二回の調絃替えである。《融》は能の構成に基づいて作曲されているとみて良く、調絃替えにより雰囲気を変える位置も、地謡↓シテ謡の変わり目を意識して設定したとみて良い。《山姥》の調絃替えは、曲中の「音頭物風」の部分のみが「本調子」となっているためと考えられ、《嵯峨の春》の調絃替えからは、独自の詞章の途中、能の詞章になる部分だけを「三下り」にするという意味が感じられる。

#### (五) 「ノリ型風」の部分

曲中に、「ノリ型風」(「平ノリ風」「中ノリ風」「大ノリ風」「特殊な型」)の部分をもつ作品が多くあった。ここでは、その箇所と引用元の「ノリ型」を記載する(次頁から)。

表1「ノリ型風」の部分一覽（平ノリ風」「中ノリ風」）

| 中ノリ風   |         |         |          |          |             |          |              |          |          |          |       |           |        |          |                          | 平ノリ風      |        |           |                    |                   |          |        |         |       |         |                              | ノリ型     |
|--------|---------|---------|----------|----------|-------------|----------|--------------|----------|----------|----------|-------|-----------|--------|----------|--------------------------|-----------|--------|-----------|--------------------|-------------------|----------|--------|---------|-------|---------|------------------------------|---------|
| C      | B       |         |          |          |             | A        |              |          |          |          |       |           |        |          |                          | C         | B      |           |                    |                   |          | A      |         |       |         |                              | 分類      |
| 14     | 5       | 5       | 4        | 2        | 1           | 13       | 13           | 13       | 9        | 8        | 4     | 3         | 2      | 2        | 1                        | 15        | 14     | 4         | 2                  | 2                 | 13       | 9      | 8       | 7     | 3       | 1                            | 番号      |
| 梅が枝    | 梓       | 梓       | 鉄輪       | 富士太鼓     | 八島          | 葵の上      | 葵の上          | 葵の上      | 珠取り      | 海女       | 関寺小町  | 善知鳥       | 古松風    | 古松風      | 古道成寺                     | 京松風       | 梅が枝    | 鉄輪        | 富士太鼓               | 富士太鼓              | 葵の上      | 珠取り    | 海女      | 邯鄲    | 善知鳥     | 古道成寺                         | 曲名      |
| 面白や鶯のゝ | 怨霊何処にゝ  | 猶々つきぬゝ  | いでいで恨みをゝ | 持ちたる機をばゝ | 修羅道のゝ       | 云う声ばかりはゝ | この上はとて立ち寄りてゝ | 萌え出で初めしゝ | 南無や志度寺のゝ | 南無や志度寺のゝ | 悪心またゝ | 娑婆にてはゝ    | 須磨の浦波ゝ | さはさりながらゝ | 何処までもゝ（地歌独自の詞章と混ざり合っている） | 面影に立ち増さりゝ | 思えば古をゝ | 況んや年月思いにゝ | 嬉しや今こそはゝ（独自の詞章を含む） | 後ろに呼ぶはゝ（独自の詞章を含む） | 怨めしの心やなゝ | かの海底にゝ | 一つの利剣をゝ | 我が宿のゝ | 安方の鳥々にゝ | 彼の客相の傍へ行きゝ（地歌独自の詞章と混ざり合っている） | 部分      |
| 平ノリ    | 地歌独自の詞章 | 地歌独自の詞章 | 中ノリ      | 中ノリ      | 拍子不合<br>中ノリ | 地歌独自の詞章  | 拍子不合         | 地歌独自の詞章  | 中ノリ      | 中ノリ      | 平ノリ   | 平ノリ<br>ノリ | 大ノリ    | 地歌独自の詞章  | 拍子不合                     | 平ノリ       | 平ノリ    | 平ノリ       | 平ノリ                | 拍子不合<br>・平ノリ      | 平ノリ      | 平ノリ    | 平ノリ     | 平ノリ   | 平ノリ     | 拍子不合                         | 引用元のノリ型 |

表2 「ノリ型風」の部分一覧（「大ノリ風」「特殊な型」）

| 特殊         |             |             |                  | 大ノリ風       |             |      |           |      |             |       |          |         |         |      |       |             |           |        |             | ノリ型 |
|------------|-------------|-------------|------------------|------------|-------------|------|-----------|------|-------------|-------|----------|---------|---------|------|-------|-------------|-----------|--------|-------------|-----|
| B          |             | A           |                  | C          |             |      |           |      |             |       |          | B       | A       |      |       |             |           |        |             | 分類  |
| 6          | 5           | 12          | 1                | 14         | 10          | 9    | 8         | 7    | 4           | 4     | 3        | 11      | 7       | 6    | 5     | 4           | 3         | 2      | 番号          |     |
| 藤戸         | 梓           | 貴船          | 古道成寺             | 梅が枝        | 新娘道成寺       | 老松   | 嵯峨の春      | 翁    | 三津山         | 三津山   | 虫の音      | 石橋      | 邯鄲      | 山姥   | 新道成寺  | 関寺小町        | 善知鳥       | 古松風    | 曲名          |     |
| 浮州の岩の上に    | 打つや現に       | 浜千鳥の        | 彼の客僧の            | 我も御法に      | 煩惱菩提の       | 天俄かに | 川柳は水に揉まるる | 何処の翁 | 光散る         | ただ何事も | 面白や千草に集く | 獅子とらでんの | 歌うよもすがら | 山は元山 | さるほどに | 憂きことの数々を    | 親は空にて血の涙を | それは稲葉の | 部分          |     |
| 平ノリ<br>中ノリ | 地歌独自の<br>詞章 | 地歌独自の<br>詞章 | 拍子不合・地<br>歌独自の詞章 | 大ノリ<br>平ノリ | 地歌独自の<br>詞章 | 平ノリ  | 大ノリ       | 拍子不合 | 拍子不合<br>平ノリ | 平ノリ   | 大ノリ      | 大ノリ     | 大ノリ     | 大ノリ※ | 大ノリ   | 地歌独自の<br>詞章 | 大ノリ       | 大ノリ    | 引用元のノリ<br>型 |     |

※「山は元山」からは地歌独自の詞章で、「塵泥積もって」から《山姥》の引用、「春は梢に」から《邯鄲》の引用となるが、いずれも「大ノリ」である。

表をみると、「ノリ型風」の部分をもつ曲は、A、B作品に多いことが分かり、C作品の「ノリ型風」の部分はほぼ「大ノリ風」であることが分かる。また、「拍子不合」から引用している部分と地歌独自の詞章を除くと、引用元のノリ型と一致している部分がとても多いことが分かる。「平ノリ風」に関しては、「中ノリ風」「大ノリ風」以外という意味で分類したため、安直にはいえないが、これほど一致しているという点は大変興味深い。ここから、作曲者が引用元のノリ型を知っていた可能性がみえてくるが、「中ノリ風」「大ノリ風」はそれほど複雑な音型とはいえず、能の雰囲気イメージして作曲した結果、偶然似たリズム型になった可能性も否定できない。このノリ型の一致が能を参考にした結果であるかは、この後第二部の作曲背景と合わせて考察していく必要がある。

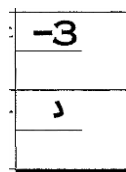
## (六) 旋律

ここでは、いくつかの曲に共通してみられる、本論文で取り上げなかった地歌作品にはあまりみられない特徴的な旋律や音型についてまとめる。

### 旋律①「同音合わせ撥の連続」

「合の手」の終わりなど、曲の区切りとなる部分などに、「譜例1」のような同音の合わせ撥の連続がしばしばみられた。次に、同音の合わせ撥の連続がある曲と、どの部分に使われているかをまとめる。

譜例1 「同音合わせ撥の連続」の例。



A 1 《古道成寺》…「合の手①」の最後。

2 《古松風》…「三年<sup>みとせ</sup>は」の部分。「乱れ髪」の後。「さはさりながら」の前。

「一念の」の後。「合の手④」の中盤(二回)。「合の手⑤」の最後。  
「須磨の浦波どうどう」の部分(二回)。

3 《善知鳥》…「小合の手①」の最後。「娑婆にては」の部分。

5 《新道成寺》…「合の手②」の最後。

7 《邯鄲》…「小合の手②」の最後。

- 8 《海女》……「また」の後。「合の手②」。
- 9 《珠取り》……「また」の後。
- 11 《石橋》……「合の手④」の最後。「手事」の最後。
- 13 《葵の上》……「小合の手④」の最後。
- B 1 《八島》……「合の手②」の最後。「合の手③」の出だし、中盤(二回連続)。
- 5 《梓》……「ましませば」の部分。
- 6 《藤戸》……「小合の手②」の最後。
- C 4 《三津山》……「合の手②」の前。
- 7 《翁》……「ご祈祷なり」の前。
- 10 《新娘道成寺》……「合の手①」の出だし。※1
- 12 《尾上の松》……「手事①」の出だし。※1

※1 但し、非常にゆつくりで、他の「同音合わせ撥の連続」とは雰囲気異なる。

## 旋律②「同音スクイ撥の連続」

ここでの「同音スクイ撥の連続」とは、「譜例2」の様に同じ音で三回以上「スクイ撥」を繰り返す音型を指す。曲名とどの部分に使われているかをまとめる。

譜例2 「同音スクイ撥の連続」の例。

|   |   |
|---|---|
| 一 | ス |
| く | く |
| く | く |

- A 1 《古道成寺》……「居上高に」の部分。
- 2 《古松風》……「小合の手⑤」
- 3 《善知鳥》……「小合の手④」から「鉄くろがね」の部分。
- 8 《海女》……「その隙ひまに宝珠を」、「約束の縄を動かせば」の部分。
- 9 《珠取り》……「その隙ひまに宝珠を」、「約束の縄を動かせば」の部分。
- 13 《葵の上》……「思まいは増澄鏡すかがみ」の部分。
- B 1 《八島》……「合の手③」の中盤。「浦風なりけり高松の」の部分。
- 5 《梓》……「合の手②」の序盤。「児手こゝて」の部分。

6 《藤戸》……………「小合の手④」の中盤。

C 4 《三津山》……………「月よ花よと」、「花は散りてもまたもや咲かん 春は年どし」

「頃は弥生の」の部分。

7 《翁》……………「夜の月」の部分。

### 旋律③ 「同音の連打」

曲中に、「譜例3」の様に同じ音を連続して撥で弾く部分をもつ曲が多くあった。（「スクイ撥」や「ハジキ」を含んでいる場合は除外している<sup>74</sup>）。ここでは四回以上の連続を指し、曲名とどの部分に使われているかをまとめる。

譜例3 「同音の連打」の例。

|                |
|----------------|
| 六 <sup>中</sup> |
| ゝ              |
| ゝ              |
| ゝ              |
| ゝ              |
| ゝ              |

A 1 《古道成寺》……………「夜半に紛れて」の後。「しばらく息をぞ」の部分。

「継ぎいたる」の後。

5 《新道成寺》……………「入相の鐘に」（繰り返しを含む）、「思えばこの鐘」の部分。

6 《山姥》……………「待つ宵は」の後。

7 《邯鄲》……………「昼かと思えば」の後。「合の手②」に二箇所。

9 《珠取り》……………「海女野の」の部分。

10 《放下僧》……………「落ちくる」、「音羽の」、「臨川堰<sup>りせんせき</sup>」、「都の」の部分。

B 1 《八島》……………「合の手④」の出だし。

3 《虫の音》……………「手事」の直前。

4 《鉄輪》……………「散りも果てなで」の後。「合の手②」の後半。

5 《梓》……………「厭<sup>いと</sup>わぬ悪性」の後から「底の水」にかけて。

6 《藤戸》……………「引く汐に」、「藤戸の」の部分。

C 4 《三津山》……………「悩み乱るる」、「有明桜」の部分。

15 《京松風》……………「形見」の部分（二箇所）。

<sup>74</sup> 「スクイ撥」や「ハジキ」を含む同音の連続は、本論文の研究対象の作品に限らず、地歌には多くある。

### 旋律④「謡物終了定型」

次に、曲尾が「謡物終了定型」となっている曲をまとめる。曲尾の十二字の旋律を元に判断している。

- A
- 1 《善知鳥》
  - 4 《関寺小町》前半のみ
  - 5 《新道成寺》
  - 6 《山姥》後半のみ
  - 7 《邯鄲》
  - 8 《海女》後半のみ
  - 13 《葵の上》
- B
- 1 《八島》
  - 2 《富士太鼓》
  - 5 《梓》
- C
- 13 《四季の雪》後半から転調
  - 15 《京松風》

旋律①～④は、特にA、B作品に多く使われていることが分かり、C作品に使用されている例はかなり限られている。

### 第三節 謡物分析のまとめ

第一部第三章で分析した特徴についてまとめた表を次に掲載する。

- ◆この表は多くの作品に共通してみられる特徴をまとめたもので、該当する項目が少なければ能との関連が薄い、という意味ではない。
- ◆「曲名」は地歌の曲名、「能」は引用されている能の曲名を表している。
- ◆「独自の詞章と能の関連」の行は、地歌独自の詞章に能との関連がみられる場合は「○」、みられない場合は「×」、独自の詞章がない場合は斜線となっている。
- ◆調絃は、「本調子」は「本」、「二上り」は「二」、「三下り」は「三」、「六下り」は「六」と略して表記している。

◆「器楽部分Ⅰ」の行には、地歌と能の器楽部分が一致している箇所の数、「器楽部分Ⅱ」の行には、地歌の器楽部分が詞章の構成の区切りや能において区切りといえる部分と対応



している数を記入している。それぞれの曲の長さが違うため、数が多いほど能とのかかわりが深いという意味ではない。

◆「緩徐↓ノリ型」の行は、およそ冒頭が緩徐（情緒的）で曲終盤が「ノリ型風」となっている曲に「○」を記入している。曲の中盤やごく一部のみが「ノリ型風」となっている場合は含まない。また、「ノリ型風とまではいえない」とした部分も含めている。

◆「旋律」の行には、曲中に使用されている、特徴的な旋律①～④の番号を示した。「④前」は、前半のみ「謡物終了定型」、「④後」は、後半のみ「謡物終了定型」であることを表している。

◆「ノリ型風」の行には、含まれるノリ型を略し、「平ノリ風」は「平」、「中ノリ風」は「中」、「大ノリ風」は「大」、「特殊な型」は「特殊」と表記した。

表3 謡物分析表（A・B作品）

| B           |                  |         |         |             |                  | A           |                  |         |        |             |             |             |                  |             |                       |             |         |             | 分類<br>番号       |
|-------------|------------------|---------|---------|-------------|------------------|-------------|------------------|---------|--------|-------------|-------------|-------------|------------------|-------------|-----------------------|-------------|---------|-------------|----------------|
| 6           | 5                | 4       | 3       | 2           | 1                | 13          | 12               | 11      | 10     | 9           | 8           | 7           | 6                | 5           | 4                     | 3           | 2       | 1           | 曲名             |
| 藤戸          | 梓                | 鉄輪      | 虫の音     | 富士太鼓        | 八島               | 葵の上         | 貴舟               | 石橋      | 放下僧    | 珠取り         | 海女          | 邯鄲          | 山姥               | 新道成寺        | 関寺小町                  | 善知鳥         | 古松風     | 古道成寺        | 能              |
| 藤戸          | 葵上               | 鉄輪      | 松虫      | 富士太鼓・<br>梅枝 | 八嶋               | 葵上          | 鉄輪               | 石橋      | 放下僧    | 海人          | 海人          | 邯鄲          | 夕顔・山姥・<br>邯鄲     | 道成寺・<br>三井寺 | 鸚鵡小町・<br>芦刈・卒塔<br>婆小町 | 善知鳥         | 松風      | 道成寺         | 分類詞            |
| I<br>b      | III              | II<br>c | II<br>c | II<br>c     | II<br>e          | II<br>d     | III              | II<br>c | I<br>a | II<br>d     | II<br>c     | II<br>f     | II<br>c          | I<br>b'     | III                   | I<br>a      | II<br>e | II<br>g     | 調絃             |
| 三           | 三                | 三       | 三       | 三           | 三                | 三           | 三<br>本<br>三<br>本 | 三       | 二      | 三           | 三           | 二<br>三      | 三<br>本<br>三<br>本 | 二           | 本<br>三<br>本           | 三           | 三       | 三<br>本      | 独自の詞章<br>と能の関連 |
| /           | ○                | ○       | ×       | ○           | ○                | ○           | ○                | ×       | /      | ○           | ○           | ○           | ×                | /           | ○                     | /           | ○※1     | ○           | 緩徐↓<br>ノリ型     |
| ○           | ○                | ○       | ○       | ○           | ○                | ○           | ○                | ○       |        | ○           | ○           | ○           | ○                | ○           | △※2                   | ○           | ○       | ○           | I 部分<br>器楽     |
|             |                  | 1       | 1       | 1           | 1                |             |                  | 1       |        |             |             | 1           |                  | 2           |                       | 2           |         |             | II 部分<br>器楽    |
| 2           |                  |         |         | 1           | 3                | 4           |                  |         |        |             |             | 2           | 1                | 1           |                       | 1           | 2       |             | 旋律             |
| ①<br>②<br>③ | ①<br>②<br>③<br>④ | ③       | ③       | ④           | ①<br>②<br>③<br>④ | ①<br>②<br>④ |                  | ①       | ③      | ①<br>②<br>③ | ①<br>②<br>④ | ①<br>③<br>④ | ③<br>④<br>後      | ①<br>③<br>④ | ④前                    | ①<br>②<br>④ | ①<br>②  | ①<br>②<br>③ | ノリ型風<br>の部分    |
| 特殊          | 特殊               | 平・中     | 大       | 平・中         | 平・中              | 平・大         | 特殊               | 大       |        | 平・中         | 平・中         | 平・大         | 大                | 大           | 中・大                   | 大           | 中・大     | 特殊・中        |                |

※1 関連があるのは、能《葵上》。

※2 「緩徐↓ノリ型」を二回繰り返すような特殊な形。

表4 謡物分析表（C作品）

| C      |        |         |        |        |         |         |              |               |                     |         |               |         |               |         |               |               |                     |         |        |               | 分類<br>番号    |
|--------|--------|---------|--------|--------|---------|---------|--------------|---------------|---------------------|---------|---------------|---------|---------------|---------|---------------|---------------|---------------------|---------|--------|---------------|-------------|
| 21     | 20     | 19      | 18     | 17     | 16      | 15      | 14           | 13            | 12                  | 11      | 10            | 9       | 8             | 7       | 6             | 5             | 4                   | 3       | 2      | 1             | 曲名          |
| 狸々     | 高砂②    | 綱       | 高砂①    | 鶴亀     | 鉢の木     | 京松風     | 梅が枝          | 四季の雪          | 尾上の松                | 新山姥     | 新娘道成寺         | 老松      | 嵯峨の春          | 翁       | 新青柳           | 西行桜           | 三津山                 | 鳥追      | 神楽     | 融             |             |
| 狸々     | 高砂     | 羅生門     | 高砂     | 鶴亀     | 鉢木      | 松風      | 梅枝           | 雪月花           | 高砂                  | 山姥      | 三井寺           | 老松      | 放下僧           | 翁       | 遊行柳           | 西行桜           | 三山                  | 鳥追      | 室君     | 融             | 能           |
| I<br>a | I<br>a | II<br>g | I<br>a | I<br>a | II<br>e | I<br>b  | I<br>a       | I<br>a        | III                 | I<br>a  | II<br>f       | II<br>d | II<br>d       | I<br>a  | I<br>a        | I<br>a        | II<br>h             | II<br>g | I<br>b | I<br>a        | 分歌<br>類詞    |
| /      | /      | ○       | /      | /      | ○       | /       | /            | /             | ×                   | /       | ×             | ○       | ○             | /       | /             | /             | ○                   | ○       | /      | /             | 能詞独自の<br>連関 |
| 本      | 六      | 本       | 三      | 三      | 三       | 二       | 二<br>↓三<br>↓ | 本<br>↓二<br>↓三 | 本<br>↓二<br>↓三<br>↓本 | 本<br>↓二 | 本<br>↓三<br>↓本 | 二<br>↓本 | 本<br>↓三<br>↓本 | 本<br>↓二 | 本<br>↓三<br>↓二 | 本<br>↓三<br>↓二 | 三<br>↓本<br>↓二<br>↓本 | 二       | 二      | 本<br>↓二<br>↓三 | 調絃          |
|        |        |         | ○      | ○      |         |         |              |               |                     |         | ○             |         |               | ○       |               |               | ○                   |         |        |               | 緩徐<br>ノリ型↓  |
|        |        |         |        |        | 1       | 3       | 1            |               |                     |         |               |         |               |         |               | 2             | 1                   |         |        | 1             | 器楽部<br>分Ⅰ   |
|        |        |         |        |        | 2       |         | 3            | 1             |                     |         |               |         |               |         |               | 1             |                     | 1       |        |               | 器楽部<br>分Ⅱ   |
|        |        |         |        |        |         | ③<br>④後 |              | ④※            |                     |         | ①             |         |               | ①<br>②  |               |               | ①<br>②<br>③         |         |        |               | 旋律          |
|        |        |         |        |        |         | 平       | 平・大          |               |                     |         | 大             | 大       | 大             | 大       |               |               | 中・大                 |         |        |               | ノリ型<br>の部分  |

※ 後半から転調している。

A作品とB作品は共通している特徴がかなり多く、その中では《放下僧》は特殊な作品であることが分かる。

「旋律①」が含まれている十五曲中、十一曲に「旋律②」が含まれており、「旋律②」を含んでいる曲は、必ず「旋律①」を含んでいる。つまり、「同音スクイ撥の連続」がある曲には必ず「同音合わせ撥の連続」があるということになり、この発見は大変興味深い。

## 第二部 謡物の作曲背景と楽曲に与えた影響

第二部では、「謡物」の作曲背景について、時代、土地、作曲者、作詞者など様々な面から追求し、更にそれが第一部で分析した各曲の特徴とどう関連しているかを探っていく。

## 第一章 近世における能の状況と謡物の成立

まず、地歌が成立した時期の民間における謡曲の流行についてと、地歌の成立から「謡物」の概念が成り立つまでの曲種の変遷を簡単にまとめる。

### 第一節 近世における謡曲の流行

能の詞章が地歌に取り入れられた背景の一つとして、「民間での謡曲の流行」が挙げられる。江戸期、「能楽」が武家の式楽とされた一方で、「謡曲」が「能楽」から独立した形で民間に広く流行していたことについては、本研究で詳しく述べる内容ではないが、その裏付けとなる情報をいくつか挙げる。主に京都におけるものとなる。

『日本芸能史5 近世』<sup>75</sup>の「第二章 町人文化の成立」には、当時、能が民間に大いに普及していたと考える根拠となりえる記述が多くある。次に同誌から得た能・謡曲に関する情報を挙げる。

同誌に記載されている順番と前後するが、一二九頁の「近世謡文化の基盤——謡の独立——」では、室町時代の後期に、素人が自ら謡を謡い、舞を舞う習慣が発生したこと、それは素人出身の手猿楽者<sup>76</sup>とよばれる人々の活躍によるところが大きいであろうことが記述されている。

貞享二年（一六八五）に、京案内の地誌である『京羽二重』全六巻が刊行され、その最終巻に掲載された「諸氏諸芸」の一覧に、謡も含まれている。この「諸氏諸芸」は、世人を相手にその芸を教授していた人物の名とみるべきであると考察されている。『京羽二重』の一部の写真が掲載されているが、「能太夫」の項に「観世左近」「喜多七太夫」などの名前があり、能の専門家が芸を教授していたことがうかがえる。

文学作品に目を向けると、『日本永代蔵』<sup>77</sup>に出てくる泉州堺の町人の人物像として、「書は青蓮院流の平野仲庵に教えをうけ、茶の湯は金森宗和の流れをくみ、詩文は深草の元政

<sup>75</sup> 藝能史研究會編『日本芸能史5 近世』東京…法政大学出版局一九八六年。

<sup>76</sup> 素人出身の、大和四座に属さない猿楽師。

<sup>77</sup> 井原西鶴作の浮世草子で、町人物の一つ。貞享五年（一六八八年）に刊行され、各巻五章、六巻三十章の短編からなる。

上人に学び、俳諧は談林の西山宗因の門に入り、能は小島吉右衛門に免許の扇を授けられ」との文が紹介されており、あらゆる芸能を身に付けることが当時の町人像の一つとされており、謡曲も代表的なものの一つであったことがうかがえる。

また、同書の「近世謡文化の諸相」<sup>78</sup>には、新作謡曲についての記述があり、謡曲がいかに民間に浸透していたかがよく分かる部分であるので、次に引用する。

『五尺手拭』だけではない。近世の初期は、一種の新作謡曲ブームとでもいうものにわきかえっていたといつて過言ではない。八百屋のお七を謡った『恋の火』、お夏清十郎の『清十郎』、有名な心中事件をあつかった『曾根崎』、そのほかいわゆる「悪所・遊里」に題材を取った幾多の曲、これらは歌舞伎でも浄瑠璃でもなく、まぎれもない謡曲として今日に残されているのである。

このほか、例を「悪所・遊里」に限らず、真面目な内容のものを数え上げればキリがない。元禄期に限らず、江戸時代前期を通じて考えるなら、現存する謡曲<sup>79</sup>の半分以上は江戸期の作となるのではなからうか。それほどまでに謡曲というものは、能楽から切り離して、独立した文体として駆使されていたのである。『甲斐塚』『平太』は浄土真宗のPRのために、『星降り』『星』は日蓮宗のPRのために、等々、さまざまなもののPRのために利用された。(後略)

他、薬屋や料理屋の宣伝のためとみられる演目も取り上げられているが、実際に新作謡曲の本が出版されていたことは、謡曲が民間に深く浸透していたと考える大きな根拠となる。

同誌では、他にも謡曲を知らなければ理解できない落咄<sup>80</sup>が多く存在していること、「謡うたい」が門付けをしていたこと等が記述されている。

他にも、民間における謡曲に関する逸話を紹介している文献は存在するが、『日本芸能史5 近世』は明確な根拠をもって謡曲の普及度について述べている文献である。

以上から、十六世紀後半には、謡曲が民間へ普及する基盤ができ上がっており、十七世紀中頃には謡曲が民間に深く浸透していたと考えることができる。

<sup>78</sup> 藝能史研究會編『日本芸能史5 近世』前掲、一二四頁。

<sup>79</sup> ここでの「現存する謡曲」とは、現在能のレパートリーとして伝承されているものだけでなく、新作謡曲なども含んでいると考えられる。

<sup>80</sup> おとしばなし。小咄と似た意味。

## 第二節 「謡物」の概念が成り立つまで

本節では、地歌の成立から、「謡物」の概念が成り立つまでの経緯を簡単にまとめる。

地謡における最古の曲種は、「三味線組歌」<sup>8.1</sup>であり、その後さまざまな曲種が生まれた。

現在の「謡物」に相当する曲種が明示されている最古の歌本は、享和元年（一八〇一）刊の『新增大成系のしらべ』である。これには「謡物」を調絃ごとに「うたひ三下りの部」「うたひ二上りの部」「うたひ本てふしの部」の三部に分け、計二十九曲を掲載しており、所収全四二二曲中の約七パーセントを占める<sup>8.2</sup>。それまでの歌本に部の名称として掲載されている曲種は、「二あがり」「三さがり」などの調絃による分類や、「長哥」「手事の部」といった曲の形式による分類、「しげ太夫の部」「半太夫の部」「芝居歌」といった曲の出どころによる分類が中心であり、詞章の内容に関連しているといえる分類は、宝暦八年（一七五八）刊<sup>8.3</sup>の『琴曲松の葎』にある「作物」<sup>8.4</sup>のみである<sup>8.5</sup>。つまり、「謡物」は詞章の内容による部立てとしては「作物」に次いで古い分類といえることができる。

「三味線組歌」は、十七世紀前半には成立していたとみられる<sup>8.6</sup>、地歌最古の曲種である。詞章が当時の流行歌などの短い小歌を複数組み合わせたものであることが、「組歌」という名前の由来となっている。「三味線組歌」は、江戸時代に地歌を伝承してきた当道<sup>8.7</sup>に属する盲人音楽家の必修曲として扱われるなど特殊な位置づけにあり、分類も確固たるものであった。他の曲種とは違い、「三味線組歌」に属する曲が他の曲種にも属するとされることはない。「長歌物」は、詞章が終始一つの事柄を歌った内容であることが、名前の由来といわれているが、古い長歌物には、『万歳』<sup>8.8</sup>や『木遣り』<sup>8.9</sup>等、組歌の様な詞章の構成をもつ作品もある。「端歌物」は、現在でも定義づけが非常に困難であるが、詞章は一つの内容を歌ったものがほとんどである。

つまり、地歌の詞章は「複数の歌を組み合わせたもの」に始まり、その後「詞章が一つの内容を歌ったもの」になっていったという流れがあり、しばらくは流行歌等を撰取する

<sup>8.1</sup> 当時の流行歌などの短い小歌を複数組み合わせた詞章となっている。

<sup>8.2</sup> 蒲生郷昭「地歌が撰取した能詞章」『日本古典音楽探究』前掲、三二六頁。

<sup>8.3</sup> 公刊年のはっきりとは分かっていない。

<sup>8.4</sup> おどけた内容、滑稽な内容の地歌作品。

<sup>8.5</sup> 野川美穂子『地歌における曲種の生成』前掲、四九〇五一頁。

<sup>8.6</sup> 久保田敏子『地歌竿曲研究』前掲、資料編、四一頁。

<sup>8.7</sup> 室町以降、近世を通じての盲人組織の名称。江戸時代には、幕府の保護のもとに強力な自治権をもった。

<sup>8.8</sup> 大和万歳を複数繋げて作曲された曲と考えられている。

<sup>8.9</sup> 木遣歌を集めた詞章であると考えられている。

という習慣が残っていたとみることができる。その中で、当時流行していた謡曲を引用した作品が生まれたことはごく自然なことであったといえる。



## 第二章 A作品について

この章ではA作品の作曲背景などを探っていく。

芝居歌作品の考察をするためには、同時期の歌舞伎の状況を探る必要がある。そのため  
にまず各曲の作曲された時期を探る必要があるが、地歌において作曲年が判明している作  
品はほとんどなく、作曲家や初出の歌本他の資料による推測を行う。その上で、同時期の  
歌舞伎の状況、特に能とのかかわりについて探り、曲にどのような影響を与えたかを考察  
する。

### 第一節 A作品の作曲された時期

はじめにA作品の作曲された時期を探るが、主な手がかりは、初出の文献と、作曲者  
の活躍した時期となる。

#### (一) 初出の文献

まず初出の文献についてまとめる。

初出の歌本は次の通りである。年代順にするため、歌本を上段とした。

『若緑』(一七〇六)・・・『貴船』  
『古今端歌大全』(一七一―三六頃)・・・『古道成寺』『古松風』『石橋』  
『琴線和歌の糸』(一七五一)・・・『善知鳥』『山姥』  
『糸のしらべ』(一七五二)・・・『関寺小町』  
『新大成糸のしらべ』(一七八一)・・・『新道成寺』  
『大成糸の節』(一七九四)・・・『海女』『邯鄲』『葵の上』

『貴船』は、一六五〇年九月初演の歌舞伎につかわれたと伝わっている<sup>90</sup>。『放下僧』に  
ついては、初出は『松の葉』(一七〇三)と考えられていたが、筆者は同名異曲であると判  
断している<sup>91</sup>。どの歌本に記載されているものが現在伝承されている『放下僧』であるか  
は判断できず、初出の歌本は不明とする他ない。

『珠取り』は『海女』を原曲とした舞地の作品とみられるため、この節では除外するが、  
『大成糸の節』(一七九四)以降の作品と考えることができる。

<sup>90</sup> 久保田敏子『地歌箏曲研究』前掲、楽曲編上、一八六頁

<sup>91</sup> 本論文四七―四八頁。

また、歌本とは別の重要な資料として、為永一蝶の『歌舞伎事始』（一七六二）が挙げられる。巻五の「古人小歌の作者」<sup>92</sup>の項に掲載されている中で、本論文でA作品として扱っている作品と思われる曲名と作曲者を次に挙げる。

やまうばのしよき

《山姥所作》（山姥）・・・沢野九郎兵衛

《うとふ》（善知鳥）・・・岸野次郎三

《松風》（古松風）・・・岸野次郎三

《道成寺》（古道成寺）・・・岸野次郎三

《放下僧》・・・岸野次郎三

《新道成寺》・・・二代目杵屋長五郎・芳沢金七

《石橋》・・・芳沢金七・若村藤四郎

《松風》《新道成寺》《放下僧》については同名異曲とみられるものも掲載されている。

芳沢金七作曲の《海女》という曲も掲載されているが、本論文で扱っている《海女》との関係は不明である。

また、項末に「其他古来より残る処の歌の目録あまたあれども、松の葉、又ハ松の落葉ニあるゆへ略す」とある。この記述を考えると、『松の葉』に掲載されている《放下僧》はやはり別曲である可能性が高くなり、現在伝承されている《放下僧》が記載されていると判断できる最古の文献は『歌舞伎事始』となる。《新道成寺》のみ、『歌舞伎事始』への掲載が歌本への初出より早い。以上から、《放下僧》《新道成寺》は宝暦十二年（一七六二）以前の作品と考えられる。

## （二）A作品の作曲者

次に、A作品の作曲者についてまとめる。結果的に、ほとんどの情報について『十八世紀上方歌舞伎音楽の研究―囃子方を中心に―』を参考にすることとなったが、管見ではこれに記載のない情報のある資料や、より詳細な研究がなされている文献は見当たらなかった。

藤林検校・・・《貴船》

生没年等、詳細はほぼ不明である。作曲は他に《雛鶴》《関尽し》が挙げられ、どちらも初出が『琴線唱歌の糸』『糸のしらべ』（いずれも一七五二）である。《貴船》が一六五〇年初演の歌舞伎に使われたという情報が正しいとすれば、十七世紀前期～中期に活躍した人物と推測できる。

岸野次郎三<sup>93</sup>・・・《古道成寺》《古松風》《善知鳥》《関寺小町》

「岸野次郎三」とよばれることが多いが、番付等史料では常に「岸野次郎三郎」と記載されている<sup>94</sup>。歌舞伎への出演記録がみられるのは元禄十二年（一六九九）～享保十二年（一七二八）で、三味線方として出演している。神山小四郎と組んで多くの歌舞伎に出演し、また作曲も多かったことがうかがえる。『歌舞伎事始』巻五には、現行はしていないが、能とかかわりがあつたとみられる《猩々》という作品も掲載されている。

芳沢金七<sup>95</sup>・・・《石橋》《新道成寺》

歌舞伎への出演記録がみられるのは、享保五年（一七〇二）～宝暦二年（一七五二）であり、初見の享保五年は小鼓方として出演、その後は三味線方として出演しており、《石橋》を共作したとされる若村藤四郎の相三味線も務めていた。

若村藤四郎<sup>96</sup>・・・《石橋》

番付等の資料では表記は「和歌村藤四郎」となっている。『歌舞伎事始』巻五に複数の曲の作曲家として名前が挙がっているが、いずれも相三味線と思われる人物との共作となっており、表記は「若村藤四郎」となっているが、《近江八景》にのみ「和歌村藤四郎」と表記されており、理由は不明。歌舞伎への出演記録がみられるのは、宝永四年（一六八七）～延享三年（一七四六）で、一貫して歌方として出演している。約六十年と長期にわたっているため、途中での代替わりも考えられ、「和歌村藤四郎」と「若村藤四郎」が別人物である可能性もある。

<sup>93</sup> 前島美保『十八世紀上方歌舞伎音楽の研究―囃子方を中心に―』前掲、四八～五一頁。

<sup>94</sup> 前島美保『十八世紀上方歌舞伎音楽の研究―囃子方を中心に―』前掲、四九頁。

<sup>95</sup> 前島美保『十八世紀上方歌舞伎音楽の研究―囃子方を中心に―』前掲、五六頁。

<sup>96</sup> 前島美保『十八世紀上方歌舞伎音楽の研究―囃子方を中心に―』前掲、四三～四四頁。

二世杵屋長五郎<sup>97</sup>・・・『新道成寺』

前島氏によれば、初代杵屋長五郎（木根屋長五郎とも）は宝永二年（一七〇五）～延享四年（一七四七）、歌舞伎に出演しており、「この出座中に代替りは認められないようである。」としているが、代替わりについては判然としていない。『歌舞伎事始』には二代目の名前が『新道成寺』他四曲の作曲者として挙がっている。

杉本為三<sup>98</sup>・・・『善知鳥』？

番付史料では「杉本為三郎」と表記されているが、頭取<sup>99</sup>となつてからは「杉本為三」の名を使っていたとみられる<sup>100</sup>。歌舞伎への出演記録がみられるのは享保十六年（一七三二）～寛政十二年（一八〇〇）とかなり長期にわたっており、一貫して三味線方として出演している。前島美保氏により途中で代替わりをしている可能性が提示されているが<sup>101</sup>、確かに約七十年間同じ人物が出演していたとは考えづらい。地歌において「杉本為三」の名前で伝わっているのは、頭取を務めた初代のことを指しているためである可能性もある。

沢野九郎兵衛<sup>102</sup>・・・『山姥』

歌舞伎へは、享保十七年（一七三二）～元文四年（一七三九）、大鼓方として出演の記録がみられる。

木の本屋巴遊・・・『葵の上』

詳細はほぼ不明。『八島』を弾きはやらせたと伝えられる<sup>103</sup>。『葵の上』の初出が『大成糸の節』（一七九四）なので、その前後に活躍した人物と思われる。

以上、文献への初出と作曲者の情報から、『貴船』を除くA作品はおよそ十八世紀に作曲され、上方歌舞伎用いられていたと考えることができる。

<sup>97</sup> 前島美保『十八世紀上方歌舞伎音楽の研究―囃子方を中心に―』前掲、五一～五二頁。  
<sup>98</sup> 前島美保『十八世紀上方歌舞伎音楽の研究―囃子方を中心に―』前掲、五七～五九頁。  
<sup>99</sup> 歌舞伎の楽屋で、芝居に関係する事務・進行の取締りをする職掌。寛永年間に猿若勘三郎が古老を座元の名代として置いたもので、元来は権威のある役職（『邦楽百科事典』前掲、七〇八頁）。

<sup>100</sup> 前島美保『十八世紀上方歌舞伎音楽の研究―囃子方を中心に―』前掲、一四三頁。

<sup>101</sup> 前島美保『十八世紀上方歌舞伎音楽の研究―囃子方を中心に―』前掲、五九頁。

<sup>102</sup> 前島美保『十八世紀上方歌舞伎音楽の研究―囃子方を中心に―』前掲、六一～六二頁。

<sup>103</sup> 久保田敏子『地歌箏曲研究』前掲、資料編、一三六頁。他。

## 第二節 十八世紀の上方歌舞伎の状況

A 作品が作曲されたと思われる十八世紀に至り、歌舞伎は興行体制が確立されるなど、今日に至る歌舞伎の基礎を築いた時代とされるが、この時代は江戸と上方でそれぞれ異なる芸風が確立していた<sup>104</sup>。この節では、特に能とのかかわりと盲人音楽家とのかかわりに着目する。

### (一) 能とのかかわり

歌舞伎が能の影響を多大に受けていることは、既に多くの研究によって指摘されているが<sup>105</sup>、ここでは、特に音楽面に着目したい。

まず、初期の歌舞伎に用いられていた楽器は、能と同じ四拍子であったが、当初は音楽面においてもかなり能と近いものを演奏していたという考察が、複数の研究でなされている。例として、当時の歌舞伎の囃子には、大名お抱えの囃子方や、旗本や御家人などの二、三男が出演したと伝えられているが<sup>106</sup>、これは当時の囃子の手が能の囃子事と近い形であったと推測する一つの根拠となる。更に『歌舞伎事始』巻五に、「歌舞伎三味線は他流と事かはり一切の鳴物に調子を合せ微妙の音色を弾くもくもく」とあり、三味線が歌舞伎に取り入れられてしばらくは、囃子が音楽を主導していたとみられる。四拍子の方が先に歌舞伎に使われていたことを考えれば当然であるが、筆者は、まだ能に近い形の囃子が主導する形で演奏されていた三味線の手が、地歌に現存しているという事に注目したい。残念ながら当時、四拍子と三味線がどのように合奏をしていたかを探ることは困難であるが、『石橋』の好事のように、能の囃子に合わせて三味線の旋律を作り合奏していたと思われる例のこつていることから、A 作品には、能に近い形の囃子の演奏に合わせる形で生まれた旋律が現存していると筆者は考えている。

### (二) 盲人音楽家とのかかわり

三味線が歌舞伎に取り入れられてからある期間は、盲人音楽家がその音楽にかかわっていたと考えられる。A 作品を始め、多くの芝居歌作品が地歌として現存していることもそれを示唆しているが、他にも根拠となる資料がある。

<sup>104</sup> 前島美保『十八世紀上方歌舞伎音楽の研究―囃子方を中心に―』前掲、一頁。

<sup>105</sup> 松崎仁「二 初期歌舞伎における能の継承」『元禄演劇研究』前掲。服部幸雄『歌舞伎成立の研究』東京・風間書房、一九六八年。他。

<sup>106</sup> 蒲生郷昭「能楽が近世芸能に及ぼした影響について」『日本古典音楽探究』前掲、三〇五頁。

『当道大記録』<sup>107</sup>四八頁には、大坂において、寛文十二年（一六七二）に、当道に所属する音楽家が歌舞伎の三味線の指導をすることを許可したとある。また原武太夫「なら柴」<sup>108</sup>には、歌舞伎の三味線方と盲人音楽家の関係について記述した部分があり、次に引用する。

#### 佐山流

##### 七段獅子由来

（前略）又或時語て云、申若勘三郎芝居三絃の元祖杵屋勘五郎といひしものは、我元祖の佐山検校が弟子也。勘三郎先祖、寛永中、城東中橋にて芝居俳優興行せしころ、大樹家のめしありて、猿若新ぼち太鼓という事を勤る。杵屋勘五郎相手たり、かねて佐山検校に七段獅子といふ秘曲を習ひ、其後習ひ伝ふるものなければ、今覚悟したる人もなし。（後略）

杵屋勘五郎という歌舞伎の三味線方が佐山検校の弟子であつたという興味深い記述である。

また、十八世紀前半、上方歌舞伎で三味線の他に箏が演奏されていた記録がある<sup>109</sup>。当時の状況からみて、三味線、箏の演奏に当たっては盲人音楽家の指導を仰いだと考えるのが自然であり、そこから歌舞伎音楽作曲そのものにも盲人音楽家がかかわっていた例があると推測することができる。A作品で一番古いとみられる《貴船》の作曲者が盲人音楽家の藤林検校であることも、その一つの根拠といえるだろう。

以上から、十八世紀の歌舞伎と盲人音楽家の間には浅からぬかわりがあつたとみて良い。

### 第三節 A作品の特徴が生まれた要因―十八世紀の歌舞伎音楽実態からの考察―

この節では、第二部第二章第一節―第二節の考察を踏まえ、第一部で分析したA作品の特徴が生まれた要因について考察をする。

<sup>107</sup> 翻刻…『当道大記録』京都…京都市立盲学校同窓会、一九三〇年。

<sup>108</sup> 翻刻…『燕石十種』第六卷、東京…中央公論社、一九八〇年。二七九―二九八頁。

<sup>109</sup> 前島美保『十八世紀上方歌舞伎音楽の研究―囃子方を中心に―』前掲、三五頁。

## (一) 調絃

A作品は、《放下僧》《新道成寺》を除くすべての作品が「三下り」または「曲中に三下りを含む」作品である。

原武太夫の「なら柴」には、歌舞伎における三味線の調絃について、次のような記述がある<sup>110</sup>。

又、近世の歌も皆三下り也。芝居などの賑やかに繁昌なる場にては、三下りの調子<sup>はなはだ</sup>嫌ひたる事也。故いかんといふに、本調子二上りと違ひて、三下りは恨ねたむ吟にして、こんくわい、猫杯の類、皆々此類ひ、三下り也。芝居など繁昌なる場にては、古来本調子二上りを第一とするに（以下略）

つまり、当時の歌舞伎において「三下り」という調絃は「怨霊」「獣類」などが登場する際や、「恨み」が主題となっている場面に使われる特別な調絃であり、前島氏によって、おむねその傾向があつたことが証明されている<sup>111</sup>。A作品をみると、《放下僧》以外は、引用元の能の主役（シテ）が怨霊等の人外のものであり、《新道成寺》においては、引用されている部分はシテが異形の蛇体となる前の白拍子の場面のみである。また、《関寺小町》は、主役が年老いた小野小町であり怨霊ではなく、調絃も「本調子」で始まるが、深草少将の怨念が出てくる部分から「三下り」になっており、このことから「三下り」という調絃は場面や設定をかなり意識して使われている調絃であることが分かる。

これらのことから、多くのA作品は、主役（シテ）が現世になにかしらの思いをのこした幽霊、怨霊や霊獣であるという能の設定を引き継いだ歌舞伎に使用されたため、「三下り」という調絃が選択されたと推測することができる。

興味深い点は、この調絃が「三下り」であるか否かの違いが、能における「太鼓が入るか入らないか」の違いと似ている点である。能において太鼓が入る演目、「太鼓物」について説明した文を、『横道萬里雄の能楽講義ノート【謡編】』<sup>112</sup>より引用する。

<sup>110</sup> 『燕石十種』第六卷、前掲、二九三～二九四頁。

<sup>111</sup> 前島美保『十八世紀上方歌舞伎音楽の研究―囃子方を中心に―』前掲、二二〇頁。

<sup>112</sup> 「横道萬里雄の能楽講義ノート」出版委員会『横道萬里雄の能楽講義ノート【謡編】』東京：株式会社檜書店、二〇一三年。

（前略）重要なのは、太鼓があるかないかという区別です。ある能には太鼓をしていますが、別の能には使いません。大まかに言えば、神・鬼畜・天仙・精といった、人間でないものが行動する場面には太鼓が入ります。これを太鼓物と言います。太鼓は原則として一拍に二つ打ちますから、太鼓が入るとリズムがはっきりします。区切りで大きく打つところは一拍に一つ打つだけですが、それ以外は裏間（拍と拍の間のこと）にも音が入ってくるので全体としてリズムがはっきりするわけです。大鼓や小鼓は原則として一拍に一つしか打ちませんし、一句の前半は間を大きくとって後半は短めに取る、というように拍が伸び縮みます。それに対して太鼓は、原則的には等拍に打ちます。

ふつうの人間は拍子に合わせて仕草をしません。たとえば道を歩くときに一、二、三……と等拍には歩かず、リズムに合わないような歩き方をします。等拍にすることで、神や鬼、祭りに登場する役柄といった人間でない役や日常ではない場面とむすびつきやすい、という解釈になったのでしょうか。

（中略）《船弁慶》の前半、静御前は生きた人間ですから大小で囃します。後半になって知盛の怨霊が登場するところから太鼓入りになります。知盛の怨霊は神や鬼に近い恐ろしい形相なので、太鼓が入るのです。（後略）

例として《善知鳥》は太鼓物ではなく、芝居歌作品において「三下り」であるか否かと、能における「太鼓物か否か」の基準は厳密には一致していない。おそらく、当時の歌舞伎において能の太鼓物のイメージが拡大し、霊や怨霊が登場する演目には太鼓物の音楽や雰囲気を取り入れ、細かい旋律を演奏するのに適した「三下り」という調絃が、大小物に比べリズムカルな太鼓物の囃子事と結びつき、そのうちに「三下り」という調絃そのもののイメージが能における「太鼓物」に近いイメージで定着したと、筆者は考えている。

## （二）曲の構成

《放下僧》《関寺小町》以外のA作品は、おおまかには「情緒的な部分↓ノリ型風の部分」という構成をとっているが、これは、当時の歌舞伎の構成によるものと推測できる。

元禄歌舞伎では、「怨霊事」という、死霊や生霊が恨みを述べる演出が多く行われ、軽業やケレンを伴った所作であったとされる<sup>113</sup>。前島氏の脚本の分析や、詞章の内容から、おそらくA作品が使われた歌舞伎もこれに準ずる形が多かったと推測できる。これらの歌舞

<sup>113</sup> 前島美保『十八世紀上方歌舞伎音楽の研究―囃子方を中心に―』前掲、一八四頁。



伎に使われた作品は、多くの部分を役者が歌っていたと松崎氏は述べており<sup>114</sup>、時代が少し進むが、初期の長唄正本にも、たびたび「ウタヒ」という節章がみられ、それは役者が歌ったはずであると、蒲生氏も述べている<sup>115</sup>。これらのことから、A作品にも役者が歌っていた部分が含まれている可能性が大いにあるが、おそらく冒頭の「情緒的な部分」を歌っていたのではないかと筆者は考えている。これは、「情緒的な部分」のほとんどが心理描写や感情の吐露など、役者自身が歌うのに適した内容であり、後半の「ノリ型風」の部分は、ほとんどが地謡からの引用であるため詞章が三人称であり、役者自身が歌うには不自然な内容であるためである。また軽業やケレンを伴っていたとすれば、「合の手」もしくは「ノリ型風」の部分でそのような所作を行っていたと考えるのが自然であり、歌いながら激しい所作を行っていたとは考えづらい。

A作品は、もとは歌舞伎で用いられていた作品が、いったん三味線と歌のみで演奏する形にされたという性質上、歌舞伎で演奏されていた形から省略や編曲が行われている可能性が高く、役者が歌う部分、後半の所作の部分と、歌舞伎の見せ場ともいえる部分が伝承されたために、「情緒的な部分」↓ノリ型風の部分」という構成の作品が多くなったと筆者は考えている。

また、これまでの考察を踏まえると、当時の上方歌舞伎における歌、三味線の音楽は地歌と能の影響を受けており、「情緒的な部分」は盲人音楽家の指導を活かした部分、「ノリ型風の部分」は能を参考にした部分ととることもできる。

《放下僧》の曲の構成の違いは、先に述べた主役や場面の設定の違いによるものか、詞章が「小歌」という小段のみを引用しているという詞章の構成の違いによるものと考えられる。《関寺小町》は、主役が怨霊や亡霊ではなく調絃も「本調子」で始まり、詞章の引用のしかたも特殊であることから、他のA作品とは趣向の違う歌舞伎に用いられた作品と推測でき、そのため他のA作品と構成が異なっていると考えられる。

### (三) 旋律①「同音合わせ撥の連続」

A作品には、「合の手」の終わりなどの区切りに、しばしば「同音合わせ撥の連続」がみられるが、これは音型と、「区切りに使用されている」という二点で、太鼓の手の「頭」と類似している。「頭」とは、太鼓の手で最後に大きく二つの音を「テンテン」と出す手

<sup>114</sup> 松崎仁「歌舞伎における歌謡―万治・寛文・元禄期―『舞台の光と影―近世演劇新攷』東京・森話社、二〇〇四年、七八頁。

<sup>115</sup> 蒲生郷昭「能楽が近世に及ぼした影響について」『日本古典音楽探究』前掲、三〇七頁。

の通称で、囃子事の始まり、終わりの部分や曲尾などの区切りに用いられる「打込<sup>うちこみ</sup>」の最後部分などにみられる手である。A作品の三味線の手は、能楽囃子と近い形の囃子に合わせる形で作られた可能性が高いと推測した。同じ音型であり、どちらも曲中の区切りで用されていることを考慮すると、「同音合わせ撥の連続」は、「頭」に合わせる形で生まれた音型の可能性が高いと筆者は考えている。

#### (四) 旋律②「同音スクイ撥の連続」

A作品にしばしばみられる「同音スクイ撥の連続」であるが、この旋律がある曲には必ず「同音合わせ撥の連続」があることが分かった。「同音合わせ撥の連続」が、太鼓の「頭」に合わせて弾いていたとすれば、「同音スクイ撥の連続」も太鼓の手と関連がある可能性がみえてくる。リズムの面では「刻<sup>きざみ</sup>」の類と一致しているが、通常の「刻」に丸々「スクイ撥」を合わせると、七、八回は連続することになり、そのような例はみられない。「上ヨリ打切」など、刻みの中で大きな音を数回出す手があるが、これは一クサリの頭六つの音を強く出すことが多く、それとスクイ撥を合せると三回となり、頻出するパターンと一致する。「同音スクイ撥の連続」が太鼓の手と関連しているとすれば、この類の手に合わせていたのではないかと推測した。音型としては非常に単純であるため、これ以上の考察に至らなかった。

#### (五)「ノリ型風」(「大ノリ風」「中ノリ風」「平ノリ風」「特殊な型」)の部分

A作品には、能のノリ型を取り入れた部分をもつ作品が多くあり、またそれらのノリ型が、引用元のノリ型と一致している場合が多いことが、第一部第三章第二節で分かった。

元禄期から寛永期になると、上方の顔見世番付には「小歌」「三味線」と四拍子以外の肩書きがなくなるが、実際には謡を含む他の音楽も使用されていたと考えられる<sup>116</sup>。能を題材とした歌舞伎を演じる際に謡を用いたとすれば、それは当然能の謡にかなり近いものであったか、もとの謡そのものであった可能性が高く、当時の歌舞伎では、歌においても能の影響を大いに受けていた可能性が高い。これを考慮すると、A作品の「ノリ型風」の部分は、もとの能を参考にして作曲されたか、謡にかなり近い形の歌に合わせるために三味線の手を作曲した部分であると考えることができる。

### 第三章 B作品について

この章では、B作品の作曲背景などを探っていく。第一部第三章の考察を通して、B作品は、A作品と共通する特徴が多くあることが分かり、第二部第二章の考察を通して、A作品の特徴が生まれた要因はある程度特定することができた。つまり、B作品はA作品の影響を受けて作曲されたと考えられる。そのため、この章では名古屋の能、地歌の状況に加え、歌舞伎の状況も踏まえた考察をしていく。B作品はA作品以上に資料に乏しく、作者についての情報もほとんどないが、当時の名古屋の能、地歌の状況や、A作品との共通性などを手掛かりとする。

#### 第一節 B作品の作曲された年代

この節ではB作品の作曲された年代を探る。B作品の作曲者は「藤尾勾当」もしくは「尾州某」だが、どちらについても情報はほぼなく、初出の歌本から推測する。

B作品分初出の歌本は次の通りである。

藤尾勾当作品

『琴線和歌の糸』（一七五二）……《富士太鼓》

『歌系図』（二七八二）……《八島》《虫の音》

『大成系の節』（一七九四）……《梓》（一説に尾州某作曲）

尾州某作品

『新撰詞曲よしの山』（一七八四）……《鉄輪》（一説に藤尾勾当作曲）

『増補大成系のしらべ』（一八二二）……《藤戸》

これらの情報から、藤尾勾当作品は十八世紀中頃～後期、尾州某の作品は十八世紀後期～十九世紀初期に作曲されたことが分かり、全体にA作品が多く作曲された時代より少し後の時代の作品が多い。

#### 第二節 名古屋開府から十八世紀の能と地歌の状況

この節では、名古屋における、B作品が作曲されたと思われる十八世紀頃の能と地歌、歌舞伎の状況についてまとめる。

## (二) 十八世紀の名古屋における能の状況

先にも述べたように、江戸期に入ると、「能」は武家の式楽とされた。一六〇七年に成立した尾張藩<sup>117</sup>は徳川御三家の筆頭であり、当時の名古屋において「能」が芸能の中でも重要な位置づけにあったことは当然だが、いくつかの資料からその実態を探りたい。

まず、多くの研究の参考資料となっている『名古屋市史』風俗編<sup>118</sup>に目を向けると、藩祖徳川義直（一六〇一―一六五〇）が音楽を好み、小鼓、舞を学んでいたことが記述されている。その後には、光友、綱誠、吉通と歴代藩主が能を嗜んでいたことその他、藩内での能の興行の記録が多く記されている。そして、それをどのような人たちが鑑賞していたかについて記されている部分があり、例えば光友の時代には「萬治二年正月晦日、二月朔日の雨日、御城にて共催あり、金春八左衛門之を勤め、家中諸士竝に町人ども観覧を許さる」とある。また同じく光友の時代、「元禄三年八月十八日より、光友大納言昇進の祝能を興行す、家中諸士烏帽子素袍にて登城し、扶持の職人、領内の百姓等上下を著し、無刀にて拝見す。」とあり、幅広い層が能を鑑賞していたことがうかがえる。十八世紀についてみると、興行として能が行われていた記録が多くあり、やはり幅広い層が能を鑑賞できる環境にあったとみることができる。

尾崎久弥著『名古屋芸能史』前編<sup>119</sup>の「横井也有」の項には、『鶉衣』<sup>120</sup>の「音曲説」が取り上げられているが、そこに当時の謡曲の流行がうかがえる文があり、尾崎氏の注と共に引用する。

いまは、謡といふもの、上中のもてあそびとなりて、はなはだ下へは至らず、法制のそはなり、老若のちがひなく、古今に変なし。されば是を玩ぶは、人品よろしきかたに定（さだ）まりて、たとへ商人のよききぬ着たらんほどのきはは、高砂東北を知らぬは、玉ならずとも盃の底なき心地ぞする。

（久弥曰。謡というものの全盛をいう。人々の上流中流下流のうち、上と中に普及している。商人でも帯刀苗字御免の程度は、謡一つ知らぬは、恥とした。その分にあらずとした。）

<sup>117</sup> 名古屋市編『名古屋市史』政治編第一 愛知…名古屋市、一九一五年、八一頁。

<sup>118</sup> 名古屋市編『名古屋市史』風俗編 愛知…名古屋市、一九一五年。

<sup>119</sup> 名古屋市教育委員会『名古屋芸能史』前編 愛知…名古屋市教育委員会、一九七一年。

<sup>120</sup> 横井也有の俳文集。前編が一七八七（天明七）年、後編が翌一七八八（天明八）年に出版された。

この記述からは、B作品が作曲されたと思われる十八世紀において、「謡曲」が民間にも大いに流行しており、単なる趣味以上の意味をもっていたことがうかがえる。

以上から、当時の名古屋において、「能」は武家に留まらず、幅広い層に浸透していたと考えることができる。

## (二) 十八世紀の名古屋における地歌の状況

筆者の修士論文でも触れているが<sup>121</sup>、十八世紀までの名古屋における地歌の状況については、史料に乏しい。

『名古屋市史』風俗編によれば、上田町に配当所<sup>122</sup>が置かれたのが、承応二年（一六五三）であるので、江戸時代の早い段階に当道座の組織ができあがっていたことが分かる。

地歌と同じく盲人音楽家によって伝承されてきた「平家」<sup>123</sup>については、同じく『名古屋市史』風俗編に次のように記されている。

藩主義直平曲を嗜む。慶安元年、有馬に浴する前田検校を召して、平家を諷はし之を留めしこと数日なりき。藩主光友も平曲を好み、琵琶法師を扶持す。延寶元年五月、吉澤検校<sup>後の吉澤とは別人なり</sup>同朋田中萬阿彌と、平家に関する諍論を為せしことあり。又當地にては、毎年十月初巳日、盲人七ツ寺に會して平家を語ることあり。元禄年間に至り、桐山検校こゝに辯天祠を建營し、毎年四月七日、府下の検校、勾當、紫度四分の琵琶法師相會して、平曲を語り、法樂に供す。（後略）

文中の吉澤検校とは『千鳥の曲』の作曲で有名な吉沢検校とは別人である。七ツ寺での平家の演奏が始まったのがいつなのかはつきりしないが、元禄以前のこととみられる。

この記述から、名古屋には光友の時代から一定数の盲人音楽家があり、平家が盛んであったことがわかる。

また、平家を愛好した九代藩主宗睦<sup>むねちか</sup>が、明和八年（一七七二）に平家の名人とされた荻野検校（一七三一〜一七八一）を名古屋に召したが、この人物は地歌筆曲も伝承していた

<sup>121</sup> 村澤丈児『吉沢検校三味線作品の研究』前掲、三〜四頁。

<sup>122</sup> 江戸時代の各藩をさらに地方ごとに分けた地域におかれた、その地域の盲人を管理するために置かれた組織。呼称は様々である。

<sup>123</sup> 「平曲」「平家琵琶」ともよばれる、琵琶の伴奏で平家物語を語る音楽。

ことが分かっており<sup>124</sup>、『名古屋市史』風俗編の「箏曲」の項は荻野検校の記述から始まっている。

地歌の伝承については、藤尾勾当作曲の《富士太鼓》の初出が一七五一年であるため、その頃には盲人音楽家による地歌の伝承があったことが分かる。

それ以外の情報による地歌の状況については、既に『名古屋における当道の伝統』<sup>125</sup>で研究されており、筆者はそれ以上の新しい発見はできなかったため、その研究を踏襲したい。同書に依れば、光友がかかえていた桐山ゆん一の弟子大野勾当を祖父とする津川検校という人物が、箏曲の伝承をしていたであろうことが述べられている<sup>126</sup>。ここでも箏曲の伝承があったことが分かり、年代ははっきりしないが、十八世紀中頃とみて良いのではないだろうか。

これを踏まえると、『富士太鼓』の初出が名古屋における地歌の伝承にかかわるものとも古い情報であることが分かり、それによつて導き出される「少なくとも十八世紀前半には、盲人音楽家による地歌の伝承があった」という予測以上に時代を溯った考察はできなかった。

### (三) 十七〜十八世紀の名古屋における歌舞伎の状況

『名古屋市史』風俗編によれば、名古屋では古く十七世紀初期から歌舞伎<sup>127</sup>の興行があったとされる。その後、遊女歌舞伎の流行、その禁止、若衆歌舞伎の流行、またその禁止を経て野郎歌舞伎が定着したとあり、歌舞伎に関しては京阪、江戸と同じ動きが名古屋でもあったようである。また、「享保時代に上方より来る役者頗る多く<sup>すこぶ</sup>」とあり、京阪の役者による歌舞伎が多く行われていた。その後、七代藩主宗春（一六九四〜一七六四）は、経済を活性化させようと祭礼や歌舞伎などを奨励した。同時期に、江戸の徳川吉宗（一六八四〜一七五二）は対照的に質素儉約を旨とした政策を打ちたてていたこともあり、名古屋での歌舞伎興行は隆盛を極め、東西から多くの役者がきて歌舞伎を演じたという<sup>128</sup>。し

<sup>124</sup> 名古屋市編『名古屋市史』風俗編、前掲、一九二頁。なお、記述されているのは箏曲についてのみではあるが、当時の状況を考え、三味線も並行して伝承されていたと考えるべきである。

<sup>125</sup> 上参郷祐康（研究代表）『名古屋における当道の伝統——国風会の調査を通して——』（科研報告書）一九九四年。

<sup>126</sup> 上参郷祐康（研究代表）『名古屋における当道の伝統——国風会の調査を通して——』前掲、一八頁。

<sup>127</sup> 『名古屋市史』では一貫して「芝居」と表記されている。

<sup>128</sup> 名古屋市編『名古屋芸能史』前編、前掲、四七頁。

かし、宗春の解放主義的な政策は風紀の乱れを生み、元文三年（一七三八）、歌舞伎興行は一部地域を除いて撤廃された<sup>129</sup>。その後しばらく歌舞伎は盛んではなかったようだが、宝暦頃からまた盛んになったとみられ、「我名府の歌舞伎は、寶暦、明和中より天明年中まで、三ヶ津の役者を呼下して興行せしこと頗る隆盛なりき」とある。主に三都の役者による興行が中心だったようである。その後また天明五年に大芝居が中止され、その後歌舞伎自体が廃れていった。再び盛んになるのは、十九世紀に入ってからのこととみられる。

他の資料では、『名古屋芸能史』前編に、宮古路豊後掾が京都から江戸へ行く途中、享保十七年（一七三二）〜享保十九年（一七三四）滞在し、名古屋の歌舞伎に出演していたことが記述されている。

これらのことから、十八世紀の名古屋では、享保〜元文年間と、宝暦〜天明年間の二つの時期に歌舞伎が興隆したということが分かる。

### 第三節 B作品の特徴が生まれた要因

先にも述べたように、筆者は、B作品はA作品の影響を大きく受けていると考えている。

前節の考察から、名古屋の音楽家が歌舞伎に用いられた作品に触れる機会は多くあったと考えて良い。そして、当時の名古屋において能、謡曲が広く流行しており、単なる趣味以上の意味をもって生活に浸透していたことを踏まえれば、名古屋の音楽家が何かを作曲しようと思った、もしくは作曲を依頼された場合、能を題材とし、歌舞伎で用いられていた作品を参考にしたことは自然であるように思う。《梓》《藤戸》は、ほぼA作品の構成、曲調を踏襲しているが、『八島』『富士太鼓』『虫の音』『鉄輪』は、「ノリ型風」の部分のリズムや詞章の省略のしかた、独自の詞章の内容から、能とのかかわりがより密接であるといえ、当時の名古屋の環境が、A作品をさらに発展させ独自の形式を生み出したといえることができる。また、B作品は、名古屋で独自に生まれた歌舞伎の演目のための作品と考えることもできるが、当時の名古屋の歌舞伎は上方からの来演が多かったという状況を考えると、根拠に乏しい。

## 第四章 C作品について

この章ではC作品について、第一部第三章でまとめた詞章や構成、音楽面での特徴を踏まえ、特筆すべき点を挙げていく。

### 第一節《神楽》《鳥追》について

《神楽》と《鳥追》は、全曲を通して「打合せ」が可能である。《神楽》の作曲が先であるため、《鳥追》が《神楽》を意識して作曲されたことになるが、どちらも能からの引用という共通点があるだけでなく、「舟に乗っている」という状況が同じでありながら、《神楽》は祝いの神事の場面、《鳥追》は母子が悲しみながら鳥追いをする場面と、対照的でもある点が非常に興味深い。《鳥追》の作曲者である松浦検校は、《嵯峨の春》において能から引用している部分のみを「大ノリ風」にしていることから、能への理解がある程度あった人物とみることができる。また、《神楽》の詞章が典拠を少し省略した形で引用されているのに対し、《鳥追》は、抜粋をしたのみならず、登場人物である「日暮」「花若」の名前を織り込んだ詞章を創作している。作詞の「南枝」という人物が初代中山よしをと考えれば、歌舞伎役者であり、能への理解が深いこととも矛盾しない。

### 第二節 C作品の作曲者の能への理解

《梅が枝》は、能への深い理解なしでは作りえない曲調であり、戸川勾当は能への理解が深い人物とみることができる。また松浦検校についても、前節において、ある程度能への理解がある人物であった可能性が示唆された。

他のC作品の中で構成や曲調に能とのかかわりがみられる作品は、《融》《西行桜》《梅が枝》《京松風》《鉢の木》であった。《融》と同じく石川勾当の作品である《新青柳》には能との関連はみられず、どのような経緯で《融》が作曲されたかは分からなかった。他の四曲についても、作曲者がどのようにして能の構成を知ったかなどの要因を考察できた作品はほぼなく、各曲の概要で述べた以上の考察は生まれなかった。ただ、単に詞章を引用しただけでなく、能や謡曲への理解に基づく構成や曲調の作曲が少なからずあることが分かったことは、一つの成果である。

### 第三節 A、B作品と共通する特徴をもった作品

C作品には、A、B作品と共通する特徴をもった作品があった。まず、「ノリ型風」の部分がある曲は《三津山》《翁》《嵯峨の春》《新娘道成寺》《梅が枝》《京松風》であった。《梅が枝》については、前節での考察から能《梅枝》を意識したとみることができる。《京松風》



は、A作品である《古松風》を原曲としてみるとみられる上、曲の構成に能との密接なかわりがあり、作曲者（不詳）に能への理解があったとみることができる。それ以外の作品においては、《三津山》のごく短い「平ノリ風」と「中ノリ風」の部分を除くすべての「ノリ型風」の部分が、リズム型が単純である「大ノリ風」であり、引用元とのノリ型が一致しているのは《嵯峨の春》のみである。これらのことから、筆者は《三津山》《翁》《嵯峨の春》《老松》《新娘道成寺》の「大ノリ風」の部分は、能ではなくA、B作品を参考に作曲されたと考えている。

構成に着目すると、《鶴亀》《高砂》①は短いながらも「情緒的な部分↓たたみかけるように歌う部分↑」と、A、B作品と似た構成をしており、調絃も「三下り」である。A、B作品にこの構成かつ「三下り」の作品が多い理由は第二部第二章第三節で考察したが、《鶴亀》《高砂》①の作曲背景はそれらとは一致しない。おそらく、A、B作品の特徴が、内容とは関係なく「能の詞章を引用した作品」の作曲技法と認識されていたのではないだろうか。つまり、これもA、B作品を意識しての作曲とみることができる。

以上のことから、これらの曲の作曲者には、A、B作品の特徴が「能の詞章を引用した作品」の特徴であるという認識が、ある程度あったことが感じられる。

## 結論

第一部での「謡物」各曲の分析と能との比較、それらのまとめと、第二部の作曲背景の考察を合わせることで生まれた考察について、改めて要点をまとめ、研究の意義と今後の課題について述べる。

### (一) 謡物の特徴とそれらが生まれた要因

A作品は、主に十八世紀の上方歌舞伎に用いられていたと推測できた。当時の歌舞伎は、構成、音楽面において能を参考にした部分が多くあり、能を題材にした演目も多くあった。能への理解の深い人物がかかわっていたためか、A作品は能の詞章の摂取のしかたが多様であり、地歌独自の詞章の内容も能と関連のあるものがほとんどであった。また、器楽部分や緩急、曲の区切りなど、その構成、曲調が能と深く関連している作品が多くあることが分かった。歌舞伎に三味線が取り入れられてしばらくは、まだ能楽囃子に近い形の囃子に合わせる形で三味線が演奏されていたことが分かり、A作品の三味線の手には能楽囃子とのつながりがあることが示唆され、一つの例として、三味線の「同音合わせ撥の連続」と太鼓の「頭<sup>かしこ</sup>」が、音型と使用される場面において共通していることが分かった。それと関連し、「同音スクイ撥の連続」がある曲には必ず「同音合わせ撥の連続」があることから、「同音スクイ撥の連続」も、太鼓の手と関連している可能性がみえてきた。また、「三下り」という調絃が、能における「太鼓物」と近いイメージで定着していたことが推察でき、「大小物」に比べてリズムカルな「太鼓物」の囃子事と、細かい手を奏するのに適した「三下り」という調絃が結びついたと仮説をたてた。ほとんどの作品が「情緒的な部分↓ノリ型風の部分」という構成であるが、これは当時よく行われていた「怨霊事」という演出による演目の構成とつながりがあることが推測できた。

B作品は、A作品と共通する特徴が多くもっていることから、A作品の影響を受けていることが推測できた。当時の名古屋では三都からの歌舞伎の来演が盛んであり、また能、謡曲も身分を問わず深く浸透していた。そのため、名古屋の盲人音楽家は作品の題材を能に求め、また歌舞伎に使われていた作品の曲調を取り入れることができたと推測した。B作品は、「ノリ型風」の部分のリズムが、引用元のリズムとかなり近い作品があるなど、A作品よりも更に能とのかかわりが深いことが感じられた。

C作品にも、能とのかかわりがみられる作品が多くあった。特に、《梅が枝》は能への深い理解なしには作曲しえない曲調であり、戸川勾当が能への理解が深い人物であることが分かった。また、《鳥追》が、《神楽》が能から詞章を摂取していることやその詞章の内容

を理解した上での作曲であることが推測できた。他に、《融》《西行桜》《京松風》《鉢の木》は、曲の構成に能との深いかかわりがみられた。また《嵯峨の春》《鶴亀》《高砂》①の調絃や曲調から、当時の盲人音楽家の間に、A、B作品にみられる特徴が、「能から詞章を引用した作品」の作曲技法として定着していた可能性がみえてきた。

## (二) 本研究の意義

本研究を通して、今までは文学的な研究が主であり、能とは詞章の引用以上の深いかかわりはあまりないという見解もあった「謡物」について、実際は構成、音楽面において能と深くかかわりのある作品がとて多いことが証明できたように思う。これまでも、いくつかの「謡物」の最後の部分が能の「ノリ型」に即したリズム型であること等は演奏家、研究家に認識されていたが、本研究で解明された「謡物」と能とのかかわりは、それよりはるかに深いものであった。今後、本研究で取り上げた作品の演奏や分析を行う際に、その構成等が能と深くかかわっているということ、またそのかわり方は、重要な前提となる。

また、先行研究と大きく違う点は、文献研究だけではなく、伝承されている楽曲と実演をもとにした分析を多く行った点である。これは演奏家ならではの研究であり、演奏する際の緩急や雰囲気の変化にも着目できた点は大きい。それにより、これまで演奏家が「謡らしい」「なんとなく能と似ている」などと感覚的にとらえていた要因がある程度探り、文章化することができた。現在も演奏されている作品に、能とここまでの深いつながりがあることは演奏家、研究家にも認識されておらず、演奏、楽曲研究において重要な知見を示すことができたと考える。

## (三) 今後の課題

誤算であったのは、研究を進めるうち、本論文でA作品と分類した「歌舞伎に用いられていたと思われる作品」が研究の中で重要な位置を占めることが判明し、「能」と「地歌」の研究をするつもりが、「能」「歌舞伎」「地歌」の三つの分野の研究という形に近くなってしまったことである。筆者は歌舞伎について専門外であり、できる限りの調査をしたつもりだが、おそらく不十分な点が多く残っていると感じている。おそらく、より深い研究をするためには、能、歌舞伎、地歌それぞれの専門家が協力した共同研究が必要になるであろう。

本研究において、予想していた以上の成果を出すことができたが、同時に多くの疑問点

を遺した。その中でも、特に筆者が今後解明を強く望んでいる点を列記する。

◆《葵の上》の作曲者、木の本屋巴遊という人物について

◆《鉢の木》の作曲者、浪花ばてれん組某という人物について

◆十八世紀の名古屋における能を題材とした歌舞伎の上演の状況

◆能楽囃子とA作品の器楽部分との直接的な関係

これらの他にも、本文中筆者が「不明である」等とした部分について、今後それに特化した研究が行えること、また行われることを願っている。

## 参考文献

- 石本かおり『地歌箏曲《西行桜》の研究』東京藝術大学大学院音楽研究科修士論文、二〇一五年度。
- 柏山泰訓執筆担当『室の祭礼』兵庫：御津町教育委員会、第二版、一九九七年。
- 上参郷祐康（研究代表）『名古屋における当道の伝統——国風会の調査を通して——』（科  
研報告書）一九九四年。
- 蒲生郷昭『地歌が摂取した能詞章』『日本古典音楽探究』東京：出版芸術社、二〇〇〇年。
- 吉川英史監修『邦楽百科辞典』東京：音楽之友社、一九八四年。
- 久保田敏子『地歌・箏曲の謡い物について』、『龍谷大学論集』No.434,435 龍谷学会、京  
都：文功社、一九八九年十一月。二九七～三一頁
- 久保田敏子編『地歌箏曲研究』楽曲編上、楽曲編下、資料編 京都：京都市立芸術大学  
日本伝統音楽研究センター、二〇一二年。
- 藝能史研究会編『日本芸能史5 近世』、東京：法政大学出版社、一九八六年。
- 国立劇場調査養成部 調査記録課『歌舞伎俳優名跡便覧』第四次修訂版[東京：日本芸術  
文化振興会、二〇一二年。
- 小林俊雄「翁」について』『宝生』二〇〇七年一月号、二四～二七頁。
- 新聞進一・志田延義・浅野建二校注『中世近世歌謡集』東京：株式会社 岩波書店、第二  
十二刷、一九八八年。
- 高野辰之『日本歌謡集成』巻七、東京：春秋社、一九二八年。
- 為永一蝶『歌舞伎事始』翻刻：芸能史研究会編『日本庶民文化史料集成』第六巻歌舞伎、  
東京：三一書房、一九七三年。
- 徳野礼子『地歌〈謡いもの〉に関する一考察』東京藝術大学大学院音楽研究科修士論文、  
一九九四年度。
- 鳥越菜々子『地歌《石橋》伝承の比較』東京藝術大学大学院音楽研究科修士論文、二〇  
一六年度。
- 名古屋市編『名古屋市史』風俗編、政治編第一 愛知：名古屋市、一九一五年。
- 名古屋市編『名古屋市史』人物編1 愛知：川瀬書店、一九三四年。
- 名古屋市教育委員会（尾崎久弥著）『名古屋芸能史』前編 愛知：名古屋市教育委員会、  
一九七一年。
- 野川美穂子『地歌における曲種の生成』東京：第一書房、二〇〇六年。
- 服部幸雄『歌舞伎成立の研究』東京：風間書房、一九六八年。

原武太夫「なら柴」翻刻…『燕石十種』第六卷、東京…中央公論社、一九八〇年、二七九～二九八頁。

日原暢子『地歌《屋島》について―箏手付を中心に―』東京藝術大学大学院音楽研究科修士論文、二〇一四年度。

平野健次解説『三味線音楽事始——京阪芝居歌と地歌の濫觴——』CBS・ソニー…SOJZ31~36 (LP六枚組)、一九七三年発売、解説書。

平野健次『箏曲・地歌の歌謡―その表象文化論―』東京…邦楽社、一九九〇年。

平野健次・上参郷祐康・蒲生郷昭監修『日本音楽大事典』東京…平凡社、第三刷、一九九六年。

平野健次・久保田敏子「寛永以降地歌歌本総合索引」小泉文夫・星旭・山口修責任編集『日本音楽とその周辺』東京…株式会社音楽之友社、一九七三年。

前島美保『十八世紀上方歌舞伎音楽の研究―囃子方を中心に―』東京藝術大学大学院音楽研究科博士論文、二〇一一年度。

松崎仁『元禄歌舞伎研究』東京…財団法人 東京大学出版会、一九七九年。

松崎仁「歌舞伎における歌謡―万治・寛文―元禄期―」『舞台の光と影―近世演劇新攷』東京…森話社、二〇〇四年。

村澤丈児『吉沢検校三味線作品の研究』東京藝術大学大学院音楽研究科修士論文、二〇一五年度。

横道萬里雄『謡リズムの構造と実技——能…地拍子と記号——』東京…檜書店、二〇〇二年。

「横道萬里雄の能楽講義ノート」出版委員会『横道萬里雄の能楽講義ノート【謡編】』、東京…株式会社檜書店、二〇一三年。

『当道大記録』京都…京都市立盲学校同窓会、一九三〇年。

## 参考楽譜

曲名の表記は、論文で使ったものに統一する。

## 地歌（全て三味線譜）

## 公刊譜

《尾上の松》宮城道雄著、東京…邦楽社、第二十六版、二〇〇四年

《融》福岡…大日本家庭音楽会、第二版、一九九五年。

《西行桜》宮城道雄著、東京…邦楽社、第六版、一九七八年。

《石橋》宮城喜代子・宮城数江著、東京…邦楽社、第二十二版、二〇〇五年。  
《新青柳》宮城道雄著、東京…邦楽社、第六版、一九六九年。  
《新娘道成寺》宮城道雄著、東京…邦楽社、第三十五版、二〇〇七年。  
《虫の音》宮城喜代子・宮城数江著、東京…邦楽社、第四版、二〇〇三年。

**私家版**（著者他が不明な楽譜が多く、判明している事実のみを記載）

《葵の上》萩原正吟校閲。  
《海女》中井猛蔵、著者不明。  
《善知鳥》中井猛著。  
《梓》二代富山清琴著。  
《梅が枝》不明。  
《老松》萩原正吟校閲。  
《翁》萩原正吟校閲。  
《神楽》生山之子、田村とし子校閲。  
《神楽》二代富山清琴著。  
《鉄輪》不明。中井猛蔵。  
《邯鄲》萩原正吟校閲。  
《邯鄲》二代富山清琴著。  
《貴船》「箏萩原正吟、三絃中澤真琴、唄大村尚子のテープより校正」との記述あり。  
《京松風》不明、中井猛蔵。  
《古道成寺》萩原正吟校閲。  
《古松風》菊縣琴松の口述により作譜との記載あり。  
《嵯峨の春》萩原正吟校閲。  
《四季の雪》中井猛著。  
《新道成寺》萩原正吟校閲。  
《新山姥》三品正保校閲、名古屋国風会で使用されている楽譜。  
《関寺小町》中井猛整譜。  
《関寺小町》二代富山清琴著。  
《高砂》① 萩原正吟校閲。  
《高砂》② 和弥採譜との記載あり。  
《珠取り》二代富山清琴著。

《綱》中井猛著。

《鶴亀》不明。中井猛蔵。

《融》二代富山清琴著。

《鳥追》二代富山清琴著。

《鉢の木》衣笠一代整譜。

《富士太鼓》萩原正吟校閲。

《藤戸》三品正保校閲。名古屋国風音楽会で使用されている楽譜。

《放下僧》菊原初子校閲。

《三津山》萩原正吟校閲。

《虫の音》萩原正吟校閲。

《八島》萩原正吟校閲。

《山姥》萩原正吟校閲。

## 謡本

以下、宝生流謡本。著作者は宝生九郎、発行所は東京…わんや書店。各曲の後には、発行年のみを記載。

《葵上》一九六八年。

《海人》一九六九年。

《芦刈》一九六九年。

《善知鳥》一九六九年。

《梅枝》一九六九年。

《老松》一九六八年。

《鸚鵡小町》一九六九年。

《翁》一九六八年。

《鉄輪》一九六九年。

《邯鄲》一九六九年。

《西行桜》一九六九年。

《石橋》一九六九年。

《卒塔婆小町》一九六九年。

《関寺小町》一九六八年。

《高砂》一九六八年。



《道成寺》一九六九年。

《融》一九六九年。

《鳥追》一九六九年。

《鉢木》一九七〇年。

《富士太鼓》一九七三年。

《藤戸》一九六九年。

《松風》一九六九年。

《松虫》一九六九年。

《三井寺》一九六九年。

《三山》一九六九年。

《八嶋》一九六九年。

《山姥》一九六九年。

《遊行柳》一九六九年。

《羅生門》一九六九年。

《闌曲》一九六六年。

※また、これら全ての曲について、『宝生流地拍子謡本』（宝生九郎、東京…株式会社 わんや書店、一九八五年）も参考とした。

#### 観世流謡本

《室君》観世左近 東京…檜書店、二〇〇一年。

《夕顔》《放下僧》観世左近『観世流続百番集』東京…檜書店、第三十八版、一九九四年。

## 参考音源

曲名の表記は、本論文で使用したものに統一し、異なる表記の参考音源は曲名の後の括弧内にそれを記す。また、演奏者の芸名は刊行当時のものである。

## 地歌

### (公刊音源)

『菊原光治 地歌の世界』日本コロムビア株式会社：COCJ-31032/ COCJ-31033 (CD二枚組) 二〇〇〇年発売。

《古道成寺》歌・三絃…菊原光治、笛…福原寛。ディスク2、トラック1。

《融》歌・三絃…菊原光治、箏…菊津木昭、尺八…二世青木鈴慕。ディスク2、トラック3

『京地歌く昭和後期の名人達』株式会社エス・ツウ：D00EM06101 /D00EM06101 (CD二枚組) 二〇一一年発売。

《関寺小町》歌・三絃…大村尚子、箏…峰内吟彰。ディスク1、トラック4。

《善知鳥》歌・三絃…大村尚子、箏…峰内吟彰。ディスク1、トラック5。

《鉄輪》歌・三絃…堀正美、箏…南光坊圭美。ディスク2、トラック2。

《老松》歌・三絃…峰内吟彰、箏…野田秀琴。ディスク2、トラック5。

『検校三品正保の世界』株式会社エス・ツウ D00EM03729/ D00EM03739 (CD二枚組) 一九九九年発売。

《新山姥》歌・三絃…三品正保、箏…土居崎正富。ディスク2、トラック1。

《虫の音》歌・三絃…三品正保、歌・三絃…土居崎正富、箏…佐藤君子、胡弓…横井みつゑ。ディスク2、トラック4。

『最後の大検校 菊茂琴昇の芸』株式会社エス・ツウ：D00EM03287/ D00EM03297 (CD二枚組)、一九九七年発売。

《翁》歌・三絃…菊茂琴昇。ディスク2、トラック5。

『先人の歌を求めて 福本光寿』株式会社エス・ツウ：D00EM04451 (CD) 二〇〇一年発売。

《貴船》歌・三絃…福本光寿、箏…菊武厚詞。トラック2。

『三曲合奏大全集 生田流』NHKサービスセンター：NSCC-03001~03025 (CD) 二〇

○三年発売。

※演奏者の後に巻名を記載。

《神楽》《鳥追》打合せ 歌・三絃（神楽）：二代米川敏子、三絃（鳥追）辻本親登代、尺八（神楽）：藤井治童『米川敏子【その式】2』NSCC-03002、トラック3。

《融》歌・三絃：藤井久仁江、箏：佐藤親貴、尺八：山口五郎『藤井久仁江【その壺】6』NSCC-03009、トラック1。

《三津山》歌・三絃：藤井久仁江、箏：富田清邦、尺八：山口五郎『藤井久仁江【その壺】6』NSCC-03009、トラック2。

《京松風》（松風）歌・三絃：藤井久仁江、歌・箏：岩田柔柯、尺八：山口五郎『藤井久仁江【その壺】6』NSCC-03009、トラック3。

《尾上の松》歌・三絃替手：藤井久仁江、歌・三絃本手：富樫教子、藤井泰和、尺八：青木鈴慕『藤井久仁江【その式】10』NSCC-03010、トラック4。

《新道成寺》歌・三絃：富山清隆、箏：富元清英、尺八：荒木古童『富山清琴【その壺】11』NSCC-03011、トラック3。

《梓》歌・三絃：富山清隆、箏：富成清女、尺八：北原篁山『富山清琴【その式】12』NSCC-03012、トラック3。

《葵の上》歌・三絃：富山清隆、箏：富元清英、尺八：荒木古童『富山清琴【その式】12』NSCC-03012、トラック1。

《新娘道成寺》歌・三絃：井上道子、歌・箏：岩田柔柯、尺八：山戸朋盟『井上道子 富樫教子14』NSCC-03014、トラック3。

《八島》歌・三絃：富樫教子、箏：岩田柔柯、尺八：川瀬順輔『井上道子 富樫教子14』NSCC-03014、トラック4。

《西行桜》歌・三絃：福田種彦、歌・箏：福田千恵子、柴山三栄子、尺八：川瀬順輔『福田種彦16』NSCC-03016、トラック2。

《虫の音》歌・三絃：矢木敬二、箏：井内久美子、尺八：青木鈴慕『矢木敬二17』NSCC-03017、トラック2。

《新青柳》（青柳）歌・三絃：矢木敬二、箏：井内久美子、尺八：青木鈴慕『矢木敬二17』NSCC-03017、トラック3。

《嵯峨の春》歌・三絃：島田重弘、箏：島田洋子、尺八：小山菁山『佐々木静江 林美恵子 島田重弘23』NSCC-03023、トラック4。

『地歌・箏曲の神髄に生きる 中華絃耀の芸道』株式会社エス・ツウ：D80EM03598/

―D80EM03608 (CD二枚組) 一九九八年発売。

《珠取り》(玉取海士) 歌・三絃：中華絃耀。ディスク2、トラック5。

『地歌大鑑 上之巻』東芝EMI株式会社：THX-90249～90263 一九八四年発売。

※演奏者の後に巻数を記載。

《葵の上》歌：林美恵子 柳川流京三味線：今林忠子、仲山暢子、塩田秀子、成田松代、小西敬子、酒井悦子、三好敦子、箏：三好敦子(1) THX-90249-A

《梓》歌・三絃：富山清琴、箏：富山清隆、尺八：北原篁山(1) THX-90249-A

《海女》歌・三絃：大村尚子(3) THX-90249-A

《善知鳥》歌・三絃：大村尚子、箏：峰内吟彰(7) THX-90252-A

《梅が枝》歌・三絃：大村尚子、箏：峰内吟彰(10) THX-90253-B

《邯鄲》歌・三絃：菊藤松雨、箏：菊楠松栄(18) THX-90257-B

《古道成寺》歌・三絃：土井崎正富、歌・箏：佐藤君子(21) THX-90259-A

《石橋》歌：村木洋子、柳川流京三味線：宮田善永、酒井博子、安田弘子、土本幸子、

半田千恵子、大木富志、箏：三好敦子(28) THX-90262-B

《四季の雪》歌・三絃地：中井猛、歌・三絃：佐々木憲一、藤崎哲矢(28) THX-90262-B

『地歌大鑑 中之巻』東芝EMI株式会社：THX-90182～90196 (LP十五枚組)、一九八三年発売。

※演奏者の後に巻数を記載。

《嵯峨の春》歌：木村芳松、染谷緑芳松、箏：飯塚松鋒、村谷津東、三絃：原田東龍(3)

THX-90183-A

《新青柳》歌・三絃：初代富山清琴、箏：後藤すみ子、尺八：北原篁山(3) THX-90183-A

《新娘道成寺》歌：富樫教子、三絃：井上道子、箏：中島靖子、尺八：青木鈴慕(4)

THX-90183-B

《新道成寺》歌：山木千賀、木村芳松、箏：飯塚松鋒、三絃：原田東龍(5) THX-90184-A

《高砂》①(高砂) 歌・三絃：松尾恵子(13) THX-90188-A

《融》歌・三絃：菊藤松雨、箏：菊楠松栄(19) THX-90191-A

《鳥追》《神楽》(打合せ) 歌・三絃(鳥追) 豊島祐子、藤田和子、前久保敬子、成田和代、伊田由紀子、歌・三絃(神楽) 長井喜代子、青池祐子、中井恵美子、高木美恵子、阿部かづ子、村木洋子(21) THX-90192-A

《鉢の木》歌・三絃：大村尚子（27） THX-90195-A

《富士太鼓》歌・三絃：初代富山清琴、尺八：北原篁山（29） THX-90196-A

『地歌大鑑 下之巻』東芝EMI株式会社：THX-90224～90238（LP十五枚組）、一九八四年発売。

※演奏者の後に巻数を記載。

《藤戸》歌：林美恵子、箏：三好敦子、柳川三味線：豊嶋祐子、藤田和子、前久保敬子、成田松代、村木洋子（5） THX-90226-A

《放下僧》歌・三絃：菊藤松雨、箏：菊楠松栄（6） THX-90226-B

《古松風》（松風）歌・三絃：菊藤松雨（8） THX-90227-B

《京松風》（松風）歌・三絃：間々田昇、歌・箏：阿部幸夫（9） THX-90228-B

《三津山》歌・三絃：菊藤松雨、箏：菊楠松栄（13） THX-90230-A

《虫の音》歌・三絃：菊井松音、箏：小林早苗（17） THX-90232-A

《八島》歌：中村彰香、三絃本手：峰内吟彰、三絃替手：竹下彰乃、箏：山下彰慶（19）

THX-90233-A

《山姥》歌・三絃：菊藤松雨、箏：菊楠松栄（21） THX-90234-A

『箏曲地歌大系』ビクターエンターテイメント株式会社：VICG-40110～40169（CD六十枚組）

※演奏者の後に巻数を記載。

《放下僧》歌：菊原初子、三絃：菊原光治（11）：VICG-40120、トラック2、一九八六年録音。

《石橋》歌・三絃：米川敏子、箏：野坂操寿（12）：VICG-40121、トラック2、一九八六年録音。

《八島》歌・三絃：富山清琴、三絃：富山清香、箏：富山清生（13）：VICG-40122、トラック3、一九五九年録音。

《鉄輪》歌・三絃：富山清琴（13）：VICG-40122、トラック4、一九五九年録音。

《鉢の木》歌・三絃：萩原正吟（18）：VICG-40127、トラック1、一九五五年録音。

《虫の音》歌・三絃：富山清琴、三絃：富山美恵子（22）：VICG-40131、トラック1、一九六五年録音。

《西行桜》歌：宮城数江、三絃：宮城喜代子、箏：小橋幹子（25）：VICG-40134、トラ

ック3、一九八〇年録音。

《尾上の松》歌・三絃…阿部桂子、三絃…藤井久仁江、箏…宮城喜代子(26):VICG-40135`  
トラック3、一九七九年録音。

《融》歌・三絃…福田栄香、箏…竹村綾子、尺八…正垣古真(29):VICG-40138`  
トラック2、一九五九年録音。

《新青柳》歌…菊原初子、箏…菊庭和子、三絃…菊原光治(30):VICG-40139`  
トラック1、一九八一年録音。

《新娘道成寺》歌・三絃本手…阿部桂子、歌・三絃替手…藤井久仁江、尺八…鳥井虚霧  
洞(31):VICG-40140`  
トラック1、一九六五年録音。

《三津山》歌・三絃…阿部桂子、井上道子、歌・箏…藤井久仁江(36):VICG-40145`  
トラック1、一九七五年録音。

『魂の歌 西松文一の地唄』テイチク株式会社:TECS-12078~81 (CD四枚組) 一九九  
三年発売。

《葵の上》歌・三絃…西松文一。ディスク2、トラック7。

《猩々》歌・三絃…西松文一。ディスク4、トラック5

『伝承名古屋の芸統く富成清女に於ける表現く』株式会社エス・ツウ:D00EM05959 (C  
D) 二〇〇九年発売。

《古松風》歌・三絃…富成清女、歌・箏…富緒清律。トラック2。

『土居崎正富検校の芸術』株式会社エス・ツウ:D00EM05979/ D00EM05989 (CD二枚  
組)、二〇〇九年発売。

《藤戸》歌・三絃…三品正保、歌・三絃地…井野川幸次、歌・箏…土居崎正富。デイス  
ク2、トラック7。

『名古屋の芸 伝統のオーソドキシイ』株式会社エス・ツウ:D00EM04541  
/D00EM04551 (CD二枚組) 二〇〇一年発売。

《鉄輪》歌・三絃…今井勉、箏…三品千代子、胡弓…今井勉(多重録音)。ディスク2、  
トラック3。

『没後十年追福 検校三品正保の芸術』東芝EMI株式会社：PCDZ-1403/PCDZ-1404/  
PCDZ-1405 (CD三枚組)、一九九六年刊行。

《八島》(屋島) 歌・三絃：三品正保、歌・箏：土居崎正富、胡弓：横井みつる。デイス  
ク3、トラック2。

『宮城道雄編 生田流箏曲選集 第三編(上)』財団法人ビクター伝統文化振興財団：  
VSCG-30 (CD) 一九九七年発売。

《新青柳》(青柳) 歌：宮城数江、箏：宮城喜代子、三絃：矢崎明子。トラック1。

『宮城道雄編 生田流箏曲選集 第四編(下)』財団法人ビクター伝統文化振興財団：  
VSCG-33 (CD) 一九九七年発売。

《西行桜》歌：宮城数江、三絃：宮城喜代子、箏：小橋幹子。トラック3。

『宮城道雄作品規範集成(16) 古典手付、古典合奏編曲』財団法人 日本伝統文化振興財  
団：VZCG-8317 一〇〇五年発売。

《尾上の松》歌・箏：宮城道雄、歌・三絃：太田里子、三絃：川瀬里子、尺八：初代青  
木鈴慕。トラック1、一九五三年録音。

『宮城道雄作品大全集 歌曲篇(6) 古曲編曲』ビクター音楽産業株式会社：VICG-40066、  
一九九三年発売。

《尾上の松》歌：宮城数江、歌・箏：宮城道雄、三絃：宮城喜代子、尺八：小野衛。ト  
ラック3。

## その他

『常磐津節全集』EMIミュージックジャパン、TOCF-9031~9050 (CD二十枚組)。

《老松》浄瑠璃：常磐津千東勢太夫、常磐津千勢太夫、常磐津勢寿太夫、三味線：常磐  
津菊三郎、常磐津菊寿郎、上調子：常磐津菊雄、笛：福原百之助、鳴物：田中伝一朗、  
望月佐吉、堅田喜三久、望月長左久。ディスク2：TOCF-9032、トラック7〜9。

『芳村伊十郎独吟集(一)』コロムビアミュージックエンタテイメント：COCJ-33311 (C  
D)、二二〇〇五年発売。

《京鹿子娘道成寺》唄…芳村伊十郎、三味線…杵屋栄二、笛…望月長之助、小鼓…田中  
伝左衛門、田中佐十郎、望月太意之助、大鼓…柏扇吉、太鼓…田中凉月。トラック1。



## あとがき

私が、様々な思いを胸に初めて藝高（東京藝術大学附属音楽高等学校）の門をくぐったのは、平成十九年（二〇〇七）、この文章を書いている今から十一年も前のこととなった。幼いころからとにかく音楽が好きだった私は、音楽家を志す人が集う高校という環境に憧れ、早い段階で藝高の受験を決意していた。友人たちに駅で見送られながら、地元郡山を離れ一週間がかりの受験を終え合格し、藝高に通えることになった時の喜びは、今でも忘れられない。入学後は、専攻である箏・三絃はもとより、ソルフェージュ、ピアノ、音楽史など、音楽を存分に学べる環境が楽しく、充実した高校時代を過ごした。その後、藝大に進学したが、修士、博士課程に進学することは、全く考えていなかった。改めて、修士への進学を勧めてくれた母、博士への進学を勧めて下さった深海さとみ先生に深く感謝申し上げたい。

私は小さいころから、専攻である箏・三絃以外にも様々な音楽を学んできたが、二歳で始めた箏の次に稽古を始めたのは宝生流謡曲で、五歳の時であった。税理士であった祖父と箏の師匠であった祖母、どちらも能楽を愛好しており、その影響で、母も箏を専門としながら謡曲・仕舞を学んでいた。そのうちに弟も謡曲の稽古を始め、食事の前などに家族で稽古をするのが常であった。その後十歳で仕舞の稽古を始める際、後に人間国宝となられた故三川泉師に入門した。また、高校一年の冬、郡山市在住で私が能管の手ほどきを受けた佐藤厚子氏の紹介により、故一噌仙幸師に入門し、正式に能管の稽古を始めた。師は後に人間国宝になられたが、謡曲・仕舞・能管ともに一流の師に恵まれたことは本当に幸運であったと思っている。

そんな環境で育ったため、「謡物」とよばれる作品とはなにかと縁があったが、この博士論文のテーマを決めたことにより、私にとつての能楽は、趣味以上の意味を持つこととなった。江戸期の作品に絞ったにもかかわらず四十の作品を扱うことになった上、それらの八割以上の楽譜が未公開であり、楽譜はもとより、謡本、音源他、関係資料を集めることには本来莫大な時間を要するはずだが、幸いに祖父、母がかなりの資料を収集していたため、研究に着手することができた。今回このテーマで博士論文を書けたことは、自分が幼いころから育ってきた環境や、家族の辿ってきた道を一つの形にできたということでもあり、万感の思いで脱稿をした。

しかし、それだけ恵まれた環境にあっても、本研究を進めるのは容易ではなく、多くの方の心温かいご指導、ご協力を頂いた。

演奏・研究のご指導を頂いた深海さとみ先生、上條妙子先生、武田孝史先生、博士リサイタルに向けて演奏のご指導を頂いた二代富山清琴先生、高校時代からお世話になり、論文に細かなご指導を頂いた塚原康子先生、資料についての情報、また自著を提供して下さった野川美穂子先生、なにかと質問に答えて下さり、色々な資料を提供、一緒に探していたいた杉本和寛先生、私の師である池上眞吾先生、藤原道山先生を始め、曲の指導、博士リサイタルの助演をしていただいた岡村慎太郎先生、菊央雄司先生、門外漢の私に、快く大曲のお稽古をつけて下さった京都の岡田吟光先生、貴重な資料を快く提供して下さい下さった名古屋国風音楽会の三品千代子先生、資料探しや曲の習得に親身にご協力いただいた梅辻理恵様、市川佐代子様、修士時代から資料探しや研究について助言をして下さった長谷川慎様、突然のお願いにもかかわらず快く資料を提供して下さい下さった大阪の久下昌男様、他、研究にご協力いただいた全ての皆様に深く感謝申し上げます。

長い学生生活の間には、中井猛先生、三川泉先生、一噌仙幸先生を始め、私がお世話になった多くの方々が鬼籍に入られた。この研究を一つの区切りとし、御遺志を繋ぎたいと思う。

「謡物」には、まだ研究の余地が残っていると感じている。今後もこの研究をライフワークとし、地歌・謡曲共に未修の曲を学びながら研究を続けたい。

最後に、長い学生生活を支え、存分に学べる環境を与えてくれた家族に、心から感謝する。

平成三十年十月某日

村澤丈児